

---

# 探偵生命体ネクスト

T-BLUE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探偵生命体ネクスト

### 【Nコード】

N5592E

### 【作者名】

T-BLUE

### 【あらすじ】

齢十歳にしてひとつの密室殺人事件を紐解き、その犯人を惨殺した過去を持つ少女、鞍馬山くまやま狗子いぬこ。全ての過去は封印され、彼女は私立高校で特別奨学生として生活していたが、十六歳の夏、彼女の周囲で再び不可解な事件が発生する。鞍馬山狗子の天真爛漫な人格の綻びからのぞく、狂気と残酷性、そして傷跡。主人公、殿山礼司は、彼女の瞳の奥に何を見るのか。運命の夜、全ての謎は氷解する。

## 第一話【プロローグのかわりに】

ぎしり、ぎしりと音がする。

そして愛に包まれている。

私は私ではない。

この暗闇の中では

私は私の名前を持たない。

光はここまで届かない。

愛を求め、光を恐れる。

そして人を恐れ

孤独を恐れ

何よりも

自分の物を失うことを恐れる。

私は愛されている。

私は

愛さなくてはいけない。

頭が痛い。

揺れている。

彼は何も知らないのだ。

彼をここに呼ぼう

何が終わるか

そして何が始まるのか 分からないけれど。

私はここから出たい。

### 暗い空間

ぎしり、ぎしりと音がする。

### 第一話

#### 【プロローグのかわりに】

事件について語り始める前に、取り敢えず、俺自身のことを少し教えておこうと思う。

まず性別は男。学校での成績は中の下で、背は極端に低い。顔は…  
…少なくとも、あなたよりは地味だろう。優越感を抱いてもらって  
かまわない。

家族は両親と俺、それに弟が一人の、合計四人。核家族というやつ  
である。

名前は殿山礼司という。

これからちよくちよく登場する『俺』とは、つまり俺のことだ。

チビで、名前は殿山礼司。

それだけ憶えてくれれば問題はない。

さて、まずは、この物語において最も重要な登場人物であり、また俺にとっても特殊な存在である、あいつの紹介から始めようか。

広い講堂はその瞬間、完全な静寂に包まれた。

ステージ上で、頭の禿げ上がった、赤ら顔をした小さな中年男はマイクを持って絶句する。

彼は日野台大学理工学部教授であり、今日は進学説明、というより理工学部の宣伝のために、わざわざ時間を割いて、ここ、日野台高等学校まで演説をしに来たのである。

本来ならば彼が駆り出されるはずではなかった。しかし高校側校長と旧知の間柄であることが、黙っていたはずなのに大学に知れてしまい、ならば、と急遽このステージに立たされることとなったのだ。

そもそも、それ自体が、彼、品川栄介教授にはひどく面倒な仕事なのである。

一つに、品川は高校生という連中が全く好きではない。わけは簡単で、言うことを聞かないからである。

彼らには品川という言葉に従う理由がないのだ。逆らって単位を落とす危険もなければ、大学教授という高い社会的地位に対する尊敬の念も一切ない。

それに、高校生は時に、意志すら統合される集団である。皆同じ制服を着ているから視覚的威圧感も増す。集団心理で強気になって暴言も吐く。全くたちが悪い。

大体ここにいる生徒たちの大半は、どうせ消去法的思考で文系に進むつもりでいるのだ。それは大学教授が今更別の道を進めたところで、そうそう揺らく決定ではない。根拠は薄弱なくせに決定はやたらと強固なのだ。

つまりこれは徒労、無駄な仕事なのである。

そう考えただけでやる気の失せる仕事を、ざわざわとした雰囲気の中で、どうして最後までやり遂げる事が出来ようか。

野次こそ無いものの、階段状の固定席を埋め尽くす数の生徒たちが、

めいめい勝手に繰り広げる雑談は、元来短気な性分である品川の神経を逆撫でするには十分すぎるほど、耳障りであったのだ。

はじめのうちは我慢していたが、やがてそれが大きくなるにつれて苛々とし始め、何だかその話し声が全て品川に対する悪口であるような錯覚を憶えた。

それでも品川は限界まで堪えて、冷静に、台本通りの話をしていただ。

だが、嵐のようなざわざわ声の中から、ほとんど偶然に「ハゲ」という言葉を聞き取ってしまった瞬間、品川は反射的に怒鳴っていた。「やかましい、バカどもめ」……と。

ハゲというのが、果たして品川のことを指していたのかは分からない。もしかしたら聞き違いかもしれないし、そんな単語を吐くような生徒は、全校でも一人か二人だけなのかも知れない。

だが、コンプレックスの爆発を止めることは不可能であった。

その怒鳴り声で、講堂内は一気に静かになった。

もちろん動揺からくる多少のひそひそ話は聞こえたものの、それは、きいいん、というハウリングの余韻よりもずっと小さかった。

本当の沈黙が襲来したのは数秒後である。

「うるさいなあ、起きちゃったじゃないか！」

恐ろしく、良く通る声であった。

怒鳴り声であるというのに誰もが聞き惚れるほどの美声。冷たい風のようにあり、また力強い雷鳴の轟きにも似た。しかし、内容はあまりにも常軌を逸脱していた。

ステージ上でマイクを持ったまま絶句する品川の視線の先に、その姿はあった。

生徒、教員。全員がそこに注目していた。

美声の主は一人の生徒だった。

生徒は、す、と立ち上がる。

放送委員の条件反射であろうか、悠然とした立ち姿を照らす、ひとすじのスポットライト。

長身の少女。

あまり光沢のない、どちらかといえばバサバサした質感をした茶色く長い髪は、白く細い首の後ろで一つに束ねられている。なぜ制服を着用していないのだろう。白い半袖のシャツに、下は黒いジャージ。いずれもぶかぶかだ。

手に何か持っている。どうやらそれは、閉じた扇子のようである。自前だろうか。あまり正常な神経ではない。

少なくとも女子高生としては。

あらゆる意味で何と意表を突いた格好であろう。しかしそれを異常と感じさせない、いや　その異常さすら霞んでしまうほどの美貌を、彼女は持ち合わせていた。同時に、とても日本人とは思えないようなスタイルも。

長い手足、細身の体。やや撫で肩であることを除けば、それはまさに人間として完璧なシルエツトであった。

彼女は言う。マイクも無いというのに、どうしてこんなによく響き渡るのか。

「もうちよつと小さな声で怒鳴れないのかい！」

次の瞬間、絶句していた生徒たちがどつと騒ぎ出した。

それはまるで、ロック・バンドのライブにおいて、最も人気の高い曲目が演奏される寸前のようなようだった。絶対的人気を伴った、期待の波である。

拍手喝采とコールが巻き起こる。

くらまやま、くらまやま　生徒たちはその名を、声を揃えて連呼する。

鞍馬山という奇妙な名は、疑う必要はあるまい、立ち上がった美少女の名字である。

少女は観客さえも怒鳴りつける。

「お前らも五月蠅いぞ、今はあたしが喋ってるんだから黙りな！」すると、いつそう会場は盛り上がる。

鞍馬山は席を離れ、中央の通路に出て、つかつかと品川の方へ下

りてくる。

品川は当たり前だが当惑した。こんな、いち生徒の暴挙を、教員たちが口を開けて観ている道理はない。

しかし講堂の脇に並んで立つ教員たちは皆、やるせない顔をして少女の方を見ているだけなのだ。

品川には聞こえなかったが、彼らは呟いていた。

「ああ、もうお終いだ」と。

もう鞍馬山はステージ脇にある階段のところまで来ていた。

壇上上がりながら彼女は言う。いつの間にか ああ、司会の

教頭から取り上げたのだ マイクも手にしていた。

「やあ教授、あなたの腕前は素晴らしいね。一体どこで練習したんだい」

それが向かい合つての第一声。

「何だと？」

品川には意味が理解できない。

少しも表情を動かさず、それでいて実につまらなそうに頭をかきながら、舞台上上がった鞍馬山は言う。

「人を退屈させる練習だよ。そこまで上手いからには相当訓練したんだろ？」

会場に笑いが起きる。

鞍馬山は続ける。

「冗談はここまでとして 問題はあなたの物言いだ。何も『バカども』はないだろう。騒がしくたって、あなたの話が聞こえないほどじゃないんだから、無視して進めれば良かったじゃないか。少なくとも理系志望の生徒は真面目に聞いているんだろうし それにあまりにも五月蠅かったら、そこにいる教頭が注意するはずだよ」

生徒にマイクを奪われでもしない限りはそうだろうが。

「いきなり怒鳴ったりするのは、もしかして、あなたが最初から高校生つてものを毛嫌いしてるからじゃないのかい？ そういうのは案外伝わるもんだよ」



「む」

さり気なく核心を突かれ、品川は少し動揺した。  
とにかく辺りを見回す。

「い、一体なんだ君は！　おい、誰かこいつを」

「無駄だよ」

鞍馬山は冷然としている。

「何？」

「力に訴えれば自分が怪我をすることは、皆よく分かってるから。  
誰だって痛い目は見たくないだろ？」

両手をひらひらと動かしてみせる。

「……」

滅茶苦茶強いということか。

品川は少女の姿をまじまじと見た。

とてもそんな風には見えない。

黒目が大きい割に威圧的な目つきと、唇の端から時折のぞく犬歯が  
極端に鋭いことさえ気にしなければ、むしろその容貌は可憐に見える。  
いや、これは矛盾した形容表現ではない。本当にそうなの  
だ。本来なら同居するはずがない二つの雰囲気、眼前の少女は併  
せ持っているのである。身に纏った数々の美的要素は複雑に絡み合  
い、一種独特な、迫りに似たものを生み出している。

品川は、生粋の理系人間が持つ少々偏ったボキャブラリーの中か  
ら、必死に言葉を探した。その場に合うものなら何でも良かった。

「君は　君は一体、何だ。私を誰だと」

「なんとか学部のイナガワ教授だろ？」

少女はさらりと名前を間違えてみせる。しかも、なんとか学部とき  
たものだ。

生徒たちは歓声を上げた。

彼らにとって内容はどうでもいいのだろう。

今、この場で、この少女が発言する事自体が重要　つまり面白い  
のだ。

品川は理屈抜きで激昂した。

「君は、いや貴様、失礼だとは思わないのか！」

「尊敬する理由のない相手への礼儀は、生憎と持ち合わせてない。つて言うか、あんた変な風に禿げてるし、なんか面と向かうと笑っちゃうんだよね」

その言葉が、品川の理性を一瞬で、完全に粉碎した。

「ハゲ。ハゲだと！ くそっ……こ、この小娘め！」

マイクをステージに叩き付ける。

そのマイクと共に、品川も

壊れていた。

「私はこれでも、成績に関しちや神奈川の神童で通ってたんだ！

高校時代などは一部から『理科の栄ちゃん』と呼ばれたこともあるほどなんだぞ！ この禿げた頭は　ハゲは教養の証だ！」

支離滅裂な絶叫と共に教授は、ばっ、と上着を脱ぎ捨てた。

「お前みたいな小娘にハゲの何が分かるというんだ！」

すると鞍馬山は扇子をはたはたと動かし、スペインの闘牛士を思わせるようなポーズで、いきり立った大学教授を挑発する。

「よおし、かかって来いイナガワ！」

「私は、」

品川は突撃した。

「品川だあッ！」

鞍馬山は、掴みかかった品川をひらりと避ける。余裕を持った動き　並の運動神経ではない。

「いい動きだよイナガワ、これなら尊敬に値する！」

「うおお！」

品川は、軽やかにステージ上を逃げ回る鞍馬山を、猛牛の如く追いかけて回す。

会場は既に完全な狂乱状態だった。全員総立ちである。

鞍馬山の暴拳を助長しようとする者、品川を応援しようとする者、とにかく爆笑する者、あまりの事態に悲鳴を上げる者。

その時教師たちは、講堂の片隅に集まって沈黙していた。

どうすればいいのか分からないのだ。

騒ぐのが生徒だけならば教師として注意もできるが、なぜか教授まで暴れてしまっている。

もう収集の付けようがない。

会場のボルテージは上がりっぱなしである。

「行くぞクソツタレども！ 高等部一年A組女子十番、鞍馬山狗子いぬこの空飛ぶ姿をしかと網膜に焼き付けろ！」

もう少女としての丸みを少しも残さぬ口調で、鞍馬山は叫ぶ。スピーカーから響くその声は、狂乱の中においても、皆の耳にはつきりと届いた。

会場はさらに沸き立つ。

「しゃあ だらあっ！」

右手にマイク、左手に扇子を持ち、鞍馬山は大の字になってステージから跳んだ。

うおお、と着地点に人が集まる。ステージ前に並べられていたパンプ椅子はもう、倒れたり吹っ飛んだり、滅茶苦茶である。

固定席からも男子たちが、雄叫びを挙げながら、土砂崩れのように駆け下りてきた。

その中心に、錯乱した品川まで飛び込んでしまったから最悪だ。

制服の中で揉みくちやになりながら、椅子を振り回して大学教授は絶叫する。

「小娘はどこだ！」

それを無視してどこかで鞍馬山が怒鳴る。

「よっしゃ皆、胴上げだあ！ あたしとイナガワに優勝球団監督の気分を味わわせてくれ！」

これ以上無いほどの歓声で生徒たちは応え、抵抗する品川と笑顔の鞍馬山は、彼らによって天高く投げ上げられた。理由もなく胴上げが始まったのである。

「なはは、気持ちいいな、最高の気分だ！」

鞍馬山は自分の体が飛び上がるたび、扇子片手に高らかに笑った。

それとは対照的に品川は激怒しっぱなしである。

「は、はなせッ、くそっ！ お前らを優勝に導いた憶えはないぞ！」  
しかし天井まで届きそうな勢いの胴上げは全く終わる気配を見せない。

やがて鞍馬山が空中から教授コールをあおった。

「いーな、がわ！ それ、いーな、がわ！」

その瞬間、ついに会場のボルテージは最高潮に達した。

全員がその名を連呼していた。

いーな、がわ！ いーな、がわ！

いーな、がわ！ いーな、がわ！

「……わ……私は……」

胴上げされながら、教授はなぜか笑っていた。

なぜ楽しい。分からない。なぜこんなことになった。分からない。

もう何が何だか分からない。とにかく笑っておけ！

「私は 私は『品川』だあああっ！」

うおおおお、と、生徒たちの歓声は、講堂を破砕せんばかりに轟いた。

2

狂乱が終わって数十分が過ぎた頃。

俺が保健室のドアを開けようとすると、中から鞍馬山の他に、渡

瀬恵依子の穏やかな声も聞こえてきた。

閑かな空気。声は、ドア越しにも明瞭に聞こえていた。

「じゃあ薬塗るから、ちよつとだけ、じつとしててね」

「ちよつと待った、痛くするなよ恵依子、痛く あんっ！ ばか

あ、何でそんなに乱暴にするんだい……」

ここから声だけ聞くと、なぜか、やけに色っぽい。

「大げさなんだから。 ほら我慢して」

渡瀬は手当をしているようだ。

ドアを開けると、二人はやっと、こちらに気づいて顔を上げた。保険の先生はいない。苦手な薬の臭いが俺の鼻をつく。

鞍馬山は椅子に腰掛け、擦りむいた右膝を渡瀬に診せているところだった。

「なんだい礼司じゃないか。もしや負傷したあたしの身を心配して」「先生に様子を見てこいつって言われたただだよ」

俺はひとつ余っている丸椅子に腰掛けた。

鞍馬山は、ちえっ、とまた下を向く。

「冷たいなあ」

「いつになったら直してくれるのかしらね。隙があればすぐ大騒ぎする悪い癖……」

渡瀬は静かに愚痴を言いながら、悪友の膝に、脱脂綿に染み込ませた薬を塗る。慣れた手つきである。

「狗子だからこれだけで済んだけど、胴上げの失敗って、打ち所が悪くて死んじゃう人もいるのよ。今度からは気を付けてね」

「分かったよ。毎度悪いね、恵依子」

鞍馬山は胴上げの最中、運悪く床に落下してしまったのだ。

しかしあの狂乱の中、たったこれだけの傷で人混みから脱出した運動神経はさすがである。たしかスポーツテストの結果は全国一位だったか。柔道や空手なども段を持っていたはずだ。

「さつきからみんなが校庭で説教受けてるってのに、中心人物はこんなところで一休みか」

俺は、ベッドに置かれている煙草の箱を横目で見ながら、そう言った。

一応説明しておく必要があるそうだ。

才色兼備で大人しく、世話焼きで、ご多分に漏れず男子からの人気も高い渡瀬恵依子。

とにかく目立つ鞍馬山。

そして、何をやっても地味な俺。

この三人は、中等部入学当時からの友人で、どういうわけだが高等部一年になる今まで、ずっと同じクラスである。

そんなだから必然的に親しくもなる。気が付けば、俺と渡瀬はどの学年でも、鞍馬山の監視役であった。監視役というより飼育係だろうか。とにかく、その役回りは半端な大変さではない。もう校内での喫煙などに関しては、いちいち注意するのが面倒だから目を瞑るようになったほどである。

鞍馬山はそれほどの問題児なのだ。

そんな奴と周囲から完全に親友扱いされ、時々クラスメートなどから『殿山、お前もしかして鞍馬山とデキてねー？』などと本気で訊かれる俺の苦勞が、果たして他人に分かるだろうか。

しかもそういった類の質問には必ず、ある程度の羨望が含まれているのだ。それが俺には理解できない。

たしかに鞍馬山狗子は、絶世の、などという馬鹿げた言い回しも大げさでないほどの美形だ。それは俺も認める。深く考えない連中が、

『あいつ本当可愛いよな。細いし、脚長いし、意外と胸もでかいし』  
『一緒に歩いたら、男全員振り返るだろうな』  
などと話しているのもよく聞く。ああ確かにそうかも知れない。

しかしそれが何だというのだ。  
美少女なら、校内を部屋着みたいな服装で闊歩し、それを注意した教師の襟首をつかんで、逆に怒鳴り倒しても許されるのか。スタイルが良ければ、校内至るところにマイ・灰皿を置いていても黙認されるのか。

毎回代わりに小言を頂戴する俺たちの身にもなって欲しいものである。

まあ、そうした自由奔放ぶりが許されているのは、他に、もっと大きな理由があるからなのだが。

鞍馬山はターボライターを取り出し、くわえた煙草に火をつけて

訊く。

「そついや恵依子、親父さんの再婚話　あれ、どうなったんだい？」

手当が終わり、もうすることもなくなったので、俺たちは自然といつも話しているようなことを喋り始めていた。

渡瀬は頷く。

「うん……今年中には入籍するみたい」

「式なんかは挙げないのか」と俺。

渡瀬は首を傾げる。

「さあ　？　そついう話が出ないところを見ると、挙げないんじゃないかしら。二人とも、もう二度目だし」

鞍馬山は煙を吐く。

「相手の人はなんて言うんだっけか」

「根岸香織さんよ。大きな病院の婦長さんで、四十歳……もう、何度教えたら憶えてくれるの？」

「あたしの記憶力はシロアリ並だからねえ」  
自慢できることではない。

そつ、渡瀬には母親がいない。

両親は何年前だか知らないが、離婚してしまったらしい。

離婚の理由も俺は知らない。

今は父親と二人暮らしだそつだ。

やがて鞍馬山は立ち上がり、煙草をくわえたまま言った。いつも下唇にくっ付けたまま器用に喋るのである。

「さて、と。校長に呼び出される前に、ずらかるかな」

「お前なあ……そついう生活、改めたらどうだ？　そろそろ退学になってもおかしくないぞ。成績もダントツの学年最下位なんだし」  
俺は呆れて言った。

渡瀬も心配そつに肯く。

「そつよ狗子、いくら国定特別奨学生だからって、何でも許されるわけじゃないんだから。真面目になれなんて言わないけど、せめてもう少しだけ常識的に出来ない？」

母親のような口調である。本気で心配しているのだ。

しかし鞍馬山は無責任に笑った。

「常識的に……か。はは」

瞬間、窓から射し込んだ陽射しが、鞍馬山の白くきめ細かな肌に反射して、俺の目を眩ませた。

黙っている俺と渡瀬に「じゃ、ばっははーい」と軽く手を振り、鞍馬山は閉じた扇子と煙草を手に保健室を出ていった。

国定特別奨学生 通称、IQ推薦。

生まれついで超人的知能指数を評価され、未来的文明進化の重要因子として、国内在学中はあらゆる入学テスト、進級判定等の無条件通過を約束されている者。

その称号を与えられた者は、過去三十人にも満たないという。

当然学費なども免除で、高校などは、三年間自宅で寝ていても卒業できる。

彼らは通常の場合、大学院もしくは特殊な施設で必要な教育課程を拾得し終えた後は、いずれも国家運営の中枢を担う役割や、最先端化学のさらに先端をリードするような役に付き、ほとんど生涯にわたって天文学的な額の税金を個人で吸収し続ける。国は彼らを『我々の尊い共有財産であり最高に価値ある人間』と言い切っている。

平等という言葉は忘れてしまったらしい。

噂によれば、彼らに対して犯罪行為を働いた者は、無条件に極刑を言い渡されるといふ。

まさに選ばれた特別な人間。人を越えた人。その国定特別奨学生に、あるう事が、

鞍馬山が指定されているのだ。



どんな顔をして受け止めたらいいのか知れない事実である。選ばれし者の称号とは、あんな人格破綻者にも、ちゃんと与えられるものなのだろうか。

いや。それ以前にあいつは、本当に天才なのか。

確かに鞍馬山は、今日もひと騒ぎやらかした事から分かるように、集団に対しても個人に対しても異常なほどの影響力を持っているカリスマ的問題児である。その上、浮世離れた容姿と人見知りしない性格のせいで、男にも女にも非常にモテる。よく写真が雑誌に載ったりするからか、他校にも、あいつのファンはわんさかというようだ。

まあ、モテるモテないは別問題としても、鞍馬山の絶大な人気が、果たして超天才的頭脳とやらの為せる業なのかは、どうも分からない。あいつが才能を活用していないからなのかもしれないが、俺の目にはどう見ても、ただの、存在感のある馬鹿者にしか映らないのだ。

扉を見つめながら、同じ事を考えていたらしく渡瀬は呟く。

「恵まれた才能を悪用しないところは偉いんだけどね」

この場合の悪用とは、頭脳を犯罪に使うことである。学年を巻き込んだ乱闘騒ぎなど、鞍馬山にとってはせいぜい悪戯に過ぎないから、悪事には入らない。

「あいつの場合は善用もしてないけどな」

俺は渡瀬の言葉にそう付け加えた。

3

日野台高等学校の裏門。

出てきた少女は鞍馬山狗子である。ここからなら校庭の横も通らずに済むから、逃げおおせるには都合がいいのであろう。

しかし逃げるにはやけに堂々とした足取りだ。飄々としている

というか、隙だらけというか。これが彼女の、普段からの態度らしい。

だが門から出てすぐの瞬間、狗子は立ち止まり、

「おや？ これはこれは」

と所得顔で笑う。

待っていた男は、ぺこりと頭を下げた。

「先ほどは失礼した」

男はあの品川栄介教授であった。幸いと、見えるところに怪我はないようだが、服はしわくちやになっている。

狗子は肩をすくめる。

「おいおいイナガワ、どうしてあんたが謝るんだい」

品川は首を横に振り、答える代わりに、独り言のように呟く。

「聞けば……君は国定特別奨学生だそうだね……。この学校に一人入学しているという噂は聞いていたが……まさか君だとは」

「それが？」

狗子のきよとんとした顔。

「う、む」

品川は口ごもる。質問や疑問が多すぎて、うまく纏まらないのである。

考え考えの様子で、中年男は少女に問う。

「君は、どうして……こんな平凡な学校に？ 余計なお世話かも知れないが、君の頭脳ならば、国立の授業も見戲のようなものだろう。

……現に君は、わざと力を出し惜しんでいるようだ。ここの先生方に聞いたが、テスト用紙はいつも白紙で出すのだろうか？ 君がその気になれば」

狗子はふむと唸った。

「ハサミがあるんだよ」

「何だつて？」

「ハサミさ。こう、ちょきちょきするやつ。みんな一つずつ持っているんだけど、あたしのは特に切れ味がいいらしい。その気になりゃ

何だって切れそうなんだ。ちよきちよき」手で何かを切る仕草を真似る。「……でもね、人間って、ハサミがあるから何かを切るわけじゃない。何かを切る必要がある時だけ、ハサミを持ち出して使う  
本来そういうものだろ？」

品川は答えない。

狗子は続ける。

「切れ味のいいハサミを持つてるからって、面白がって片っ端から物を切ってたなら、いつか怪我しちまうと思うんだ。周りの物もぼろぼろになる。『使わなくちゃもったいない』なんて焦るのも馬鹿馬鹿しいしさ」

「それが理由なのか？」

品川は真剣な面もちで、鞍馬山狗子の美しい顔をのぞき込む。

すぐ、根負けしたように狗子は笑った。

「いや。本当は単純に……ここの平凡な校風が気に入ったんだよ。

家から近いしね」

「簡単なものだな」

「まあ、高校生なんてその程度さ」狗子は扇子をタクトのように振る。「しかし、なかなか捨てたもんじゃなかっただろ？」

「……ああ」

品川は肯く。

「さつきは……面白かった、本当に 実に貴重な……楽しい経験だったよ。……感謝している」

噛みしめるようにそう伝え、そして苦笑する。

ほとんど二人にしか分からぬ会話である。

しかし確かに通じている。通じていれば問題はない。

やっと彼には、狗子の意図が理解できたのだ。

狗子は満足そうに言った。

「面白かった、か。……そう 対等になって楽しめる関係こそ最高なんですよ、品川教授」



## 第二話【少女の詩】

### 第二話

【少女の詩】少し昔の物語。

1

これは……六年前の夢だ。

またなのか。狗子は意識の中で苦悶する。

抵抗しても無駄だった。

もう夢は始まり、いつの間にか狗子は六年前の自宅にいる。

今はもうどこにもない、あの、大きな家に。

始まりは夜の十時だった。

たった一人、一階のリビングで本を読んでいると、不意に音楽が聞こえてきた。

知らない洋楽だ。ガチャガチャポンポンと五月蠅い、狗子の嫌いなジャンルの音楽である。最大音量かそれに近い状態らしく、音は大分割れている。静かな夜にはあまり似つかわしくない。

何だろう と、幼い狗子は思った。音が聞こえたのが突然だったからだ。

家にあるオーディオ類は皆、急速なヴォリュームアップが出来ないタイプの機器である。すべてリモコンまたは本体のボタンを押し続けて調節するタイプであるため、音量を上げようとすれば、どうしても段々と大きくなってゆく。前触れ無く最大音量を出したけれ

ば、意図的に消音状態にして音量を上げ、それから消音を解除するしかない。

つまり、操作ミスで突然大きな音が出ることは有り得ない。

だから誰かがわざとやったはずなのだ。

しかしこの家に、そんな悪ふざけをする者は、いない。

今いるのは、狗子自身と 父と 母。

それから、四泊の予定で遊びに来ている、従兄弟のお兄ちゃんとお姉ちゃん。

父と従兄弟たちは、何をしているかは知らないが二階にいる。恐らく全員別々の部屋で、テレビでも見ているのだろう。

母は狗子と同じく一階にいて、ドア一枚隔てた隣の部屋で、明日出かけるための準備をしている。

何にしても、皆、そんなに突飛な悪戯で受けを狙うほど陽気でも、低レベルでもない。そもそも機械音痴がないから、操作ミスだつて有り得ない。

気になり、本を置いて立ち上がった。

音は、隣 母がいる部屋から聞こえてくるようだ。母が何かしているのだろうか。

その部屋のドアを開ける。

「お母さん？」

母はいなかった。

そこにさっきまでいたはずの母親の姿は、消えていたのだ。誰もいない。

狗子はその部屋の中を見回した。

床のあちこちに、畳みかけのセーターや靴下が散らばっている。

相変わらず音楽は流れ続けているが、オーディオの類は見あたらない。

音は、もっと奥から聞こえているらしい。

狗子は空っぽの部屋を通り過ぎて、慎重に廊下を歩いた。

廊下の途中に扉はない。父親の知り合いから送られた民芸品の彫

刻やら、誰が書いたのか知らない絵などが、いくつか飾られているくらいである。

ただ、普通に比べてかなり大きな家であるため、幅は広い。

突き当たりに、灰色に塗られた、金属製の扉がある。

狗子はそので立ち止まった。

この向こうは、もう使っていない車庫だ。父がゴルフに飽きた今、かつてそこにあった車は、乗る者を失って親戚の所有物になったし、何より半年ほど前から、外からの出入り口であるシャッターが壊れて、開かなくなっている。

つまり、この扉からしか、車庫への出入りは出来ない。

この車庫も、普通よりはかなり広く天井もやたらと高いのだが、中には穴の開いたビニルホース、錆びた工具、予備のタイヤや灯油、つまりガラクタだらけで、役に立つ物はほとんど何も無いはずだ。家族の誰も、もう二ヶ月は足を踏み入れていない。

しかし今、母はここにいる事になる。

狗子がいたりリビングと、母のいた部屋、そしてこの扉は、一本道で繋がっている。分岐はない。母が狗子の目に触れずリビングを通過することは有り得ないから、つまり母はここ、車庫の中にいるのだ。

今までの母の行動パターンや動機を考察すると信じられないことだが、物理的に、その可能性が百パーセントということになる。狗子は動揺しながらもその事実を確認する。

二階から下りてきたらしい従兄弟の晴彦が、あとから廊下を歩いてきた。

「どうしたんだい、狗子ちゃん？ この音楽は？」

後ろにその妹である冬子がついている。

「何これ。この部屋から聞こえてるの？ …… 広美さん…… かしら」

広美とは母の名だ。冬子も『一階にいる狗子以外の人間』が母一人であることを判断したらしい。

「とにかく開けよう」

晴彦がずいっと前に出て、ドアノブを握り、そのまま回した。鍵はかかっていない。

すう、とドアを押し開ける。

車庫の中は暗い。

ほこりの臭いと共に、闇から音楽が一気に溢れ出した。やはり音楽はここからだ。コンクリの壁に反響して、吐き気がするような巨大音になっている。

暗いので、何かにぶつからないよう気を付けながら、三人は、ゆつくりとその中へ足を踏み入れた。ここの蛍光灯は大分前から切れている。

廊下から射し込む光は、ほとんど内部を照らさない。

しかしシャツターに近い床の一部だけは、角度の関係で、目を凝らせばわずかに見える。

奥の方にラジカセが見えた。誰も使わなくなり、いつからかここに置かれていた物だ。ほこりを被ってはいるが、まだ動くらしい。

……その証拠に、騒音は、そこから生まれている。

「誰がつけたのかしら」と冬子。

母に決まっている、と狗子は判断する。あのラジカセにタイマー機能はついていないから、テープを再生するには直接スイッチを押すしかないのだ。つまり車庫の中にいる唯一の人物、鞍馬山広美がスイッチを入れるしか……母が？

そうだ、母は、この暗闇の中にいるはずなのだ。

なのにどうして声を出さない？ どうして人間の気配が感じられない？

狗子は疑問を感じた。

が、ともかく晴彦と冬子に続き、一步二歩と、ラジカセの方に歩み寄る。このやかましい音楽は思考能力を麻痺させるから嫌いだ。早く止めたかった。



しかし、ほんの五メートルを歩く途中、晴彦は立ち止まっていた。

「……あれ？」

「どうしたのよ兄さん」

つられて二人も立ち止まる。

晴彦は戸惑っているようだ。

「いや　ここに何か、あるんだ。ぶら下がってる」

音楽は流れ続けている。

遅れて廊下の方から父が入ってきた。眠っていたらしく、体格のいいシルエットが目をこすっている。

父は優秀で名高い歯科医であると同時に柔道の有段者だが、その動きは実に緩慢である。

「どうしたんだ、五月蠅いな……誰の悪戯だ？　こんな大きな音を出して。……何だ、みんないるじゃないか」

「お母さんはいないみたいだわ」

狗子は咳いたが、その声は誰にも聞こえなかった。

「暗いな。ちょっと待ちなさい、今明かりを……」

父　鞍馬山健三は、ライターを取り出しているらしい。

やがて、ぼつ、という音と共に、空間がオレンジ色になった。

四方を囲むコンクリートの壁が姿を現す。

全てが明らかになった。

「あ　っ」冬子が指さした。

そして首を横に振る。

「い、いや……」

ぶらり、ぶらり。

「叔母さん……嫌よ……いやあああ……」

晴彦は顔を上げ、今まで手で探っていた『それ』の正体を認識した。

「…………え？ あ…………うわあっ！」

飛び退いて尻餅をつく。

そして狗子は 見上げた。

「お母さん」

それしか言えなかった。

そこに『あつた』のは、母だった。

しつかりと首に食い込んだ縄は、天井の金属パイプに括り付けられている。

膨れた顔。

不自然に折れ曲がった首。

ぶらぶらと小柄な体が揺れる。

母は首を吊って死んでいる。

狗子は混乱していた。

ゆつくりと歩き、ラジカセの電源を切る。

「お母さん…………」

もう一度首吊り死体を見る。

小柄な死体の足下には、錆びた金属の椅子が転がっている。

これが自殺であることは明らかである。ぼんやりした脳が、それなりに思考を始める。取り乱すことは何の特にもならない。それを知っている狗子は、少なくとも、並の人間よりは冷静だった。リビングを通り過ぎた者はいなかった。

シャッターは故障している。

つまり狗子の目に触れずここに入れたのは母だけだし、実際、ここには母しかいなかった。

殺せた者がいない。すなわち殺人の可能性はない。

思考は静かに加速する。

もし、万一。常識的に考えれば有り得ないことだが、ここに長時間潜んでいた外部の人間がいたとしても、出ていくことが無理だ。つまり他殺の可能性はゼロである。

思考は走り続ける。

「……広美……」

父は口を開けて絶句していた。

「首、吊ったの？ 広美さん……」

冬子が座り込む。

「どうしよう、とにかく警察に」

晴彦が部屋を出ようとした、その時。

ゼロではない、百だ。

「待つて」

狗子は反射的にそう言っていた。

瞬間 ずん。遅れてやってきた感覚。後頭部が燃えるように熱い。

思わず仰け反る。

それが、ただの前兆に過ぎぬとは 知らずに。

より鮮明なビジョン。

目の前に広がる光景。

それに潜む違和感……その正体は？ ……ああ椅子だ。

「貸して頂戴」

狗子は父の手からオイルライターをもぎ取った。

そして、残った左手で椅子を立てる。

足りない。

爪先は椅子の二十センチほど上で揺れている。

「母さんの身長じゃ、背伸びしても届かないわ。この低い椅子では首を吊れない」

しかし他に、台になるような物は無い。

母より身長の高い誰かが、椅子に乗り、母を吊したのだ。

誰が？ どういう方法で？

密室殺人が発生した。

三人は狗子の冷静さに圧倒されているようだった。

だが狗子は決して、完全に冷静などではなかったのだ。未発達な脳細胞を瞬時に限界まで覚醒させた分、人間的な感情と呼ばれるものが、ほとんど機能しなくなっていたのである。特殊な状態であった。

狗子はそれ以上屍に目もくれず、シャッターの方へ歩いた。

ほこりだらけのシャッターに手を掛け、ガチャガチャと揺する。…  
…上がらない。動かない。やはり半年前から壊れているのだ。

ライターで一番上の巻き取り部分を照らすと、その辺りの金属板は、明らかに歪んでいた。これでは開くはずがない。

背後で父の声が聞こえる。

「おい狗子、やめなさい……」

娘がショックで狂ったとも思っているのだろうか。

狗子の耳には入らない。

不自然な歪み。意図的に壊された跡だ。

半年前、このシャッターは何者かに壊された……？  
違う、先入観を捨てなくては。

シャッターが開かなくなっていたのは半年前。だから計画は半年前からだ。そして状況から見ても、外部犯行はまず有り得ない。恐らくこれは、家の構造を知っている者の仕業だ。それについて間違いはない。

だがどうして半年もの空白を作る必要があったのか。

理由があるはずだ。経緯があるはずなのだ。理由。理由。理由がある。つまりあの音楽にも？ 意味が？ どんな？

狗子の足下に、細い金属の棒が転がっている。

シャッターを開閉するための道具だ。先が鉤状になっている。

『シャッター』を……『先入観』……そして『暗闇』からの『音楽』なるほど、そうか。

「狗子！」

とうとう父が怒鳴る。

しかし怒鳴る理由を狗子は知っていた、いや……解明していた。

「解ったわ」

くると三人の方へ振り返る。

冬子は息をのんでいた。晴彦は尻餅を付いたまま、言葉を失っていた。

狗子は言った。

「お母さんを殺したのはこの中にいる人よ」

「何……？」

父親は一步下がる。

狗子は続けた。

「これは自殺なんかじゃない。それはあなたたちにも分かったはずね。でも、だとすると犯人がいることになる。つまり密室殺人。

何故なら二つ条件があるからよ」

シャッターを指さす。

「まずはこのシャッター。半年前からずっと動かないわ。外からも中からも通れない……壁と一緒にね」

続けてドアの方を見る。

「そして私の存在。二階にいたあなたたちのうち、誰かが　そう、いくら母さんの体が小柄で軽いとはいえ、私の身長と力では引き上げられないから、私は犯人候補から除外されるわ。ともかく、あなたたちの誰かが母さんのいる部屋、そしてこの車庫に辿り着くためには、リビングを通過しなければいけないはず。けれど私の目に触れずにそれを遂げるのは不可能……。だからこれは密室殺人というものに当てはまる」

口が驚くほどなめらかに動いた。

「でもね、密室殺人なんて絶対に存在しないのよ。密室ではなかったから殺人が起きたんだもの」

「な、何を言っているんだい狗子ちゃん」  
立ち上がった晴彦が口走る。

狗子はそれを認識し、発言の意味を分析。何を言っているんだいこの状況においては完全に無意味。展開された事実を把握できずに混乱し、反射的に組み上げた質問だと理解。

反応する価値は無し、と判断。

「……一番重要な要素は先入観だったわ。シャツターが『動かなくなった』という事実を即『故障』と結びつけてしまう人間の常識よ」  
足下にあつた鉄棒を、空いた手で拾い上げる。

「犯人は半年前、この棒をシャツターの巻き取り部分に、見えないよう食い込ませた。シャツターが動かなくなるようにね。……私と母さんはそれを素直に故障と思いこんだ。全然気付かなかったわ。そういえば半年くらい前からこの棒、どこかへ消えてしまっていたわね」

つまりシャツターは壊れていなかったことになる。

「一ヶ月の空白は、シャツターに対する私たちの、いえ私の認識を『壊れた物』から『壊れている物』へと変化させるための時間。解いてみればちやちな心理トリックだわ」

既に狗子が見ているのはただ一人。

自らの父親 鞍馬山健三である。

彼はだからだと冷や汗を流していた。

「い……狗子、お前」

「今日の昼間。もしかしたらもつと前かも知れないけど、この鉄棒は外された。誰にも気付かれないよう、あなたが外した」  
止まった時の中、狗子の声だけが響く。

「何十分か前、あなたはまず自分の部屋から出て、音を立てないように階段を下り、玄関から外に出た」

玄関はリビングより手前にある。こっそりと動けば物音は聞こえな

い。

従兄弟の二人は黙って聞いている。

「そして、誰も知らなかったけれど、『動く』状態になっていたシャッターを外から開け、車庫に入り、廊下を通り、母さんのいる部屋に忍び込んだ。隙を見て背後から紐で首を絞めれば、ほとんど声は出ない。男の力なら殺害は簡単よ。ましてや、あなたは柔道有段者だもの」

この時点で母は死体となる。

「そして死体を車庫まで運び、天井に吊した」

首吊り死体の完成。

「仕上げに椅子を転がし、鉄棒で『てこ』を作って内側からシャッターを歪ませた。この時初めて、シャッターは本当に壊れたのね。あとは自分が部屋から出るだけ……」

「ど　　どうやって出たと言うんだ！」思い出したように父親は怒鳴った。「子供のくせに！　黙っていなさい！」

まともに反応する価値は無し、と判断。

「推理小説の犯人みたい、間抜けね」

狗子はそれだけ言った。特にそう思ったわけではないが、黙らせるために。

効果はあった。

代わりに口を開いたのは冬子だった。

「狗子ちゃん、本当に　　どうやって出たというの？」

狗子は頷きもしない。

「あの下品な音楽にも意味があったのよ。まずあれは、私たちをこの車庫まで引き付けた。そして扉を開けさせ、死体の近くまで歩かせた」

母の死体を指す。

「この暗闇にも意味があったわ。自分は隠れやすくなり、死体も見えにくくなる。これは大事な事よ。私たち三人がすぐに『これは死体だ』と認識したら、そこで立ち止まってしまいう危険性もあるから

私たちが出入り口付近で立ち止まったら、出るに出られないわ」

「じゃあ、もしかして」

冬子はドアの方を見た。

「狗子は頷く。」

「そう、あまりにも単純な方法よ。私たち全員がシャッターの方へ注目している間に、ドアの裏から抜け出し、私たちの背後を歩いて廊下へ出ていったの。それを実行できたのは、一番後から車庫に入ってきたお父さんだけよ」

単純だが虚を突いた方法といえる。もつとも。

「この方法は、どちらにしろ、警察が到着すれば全て分かったと思うけれど。絞殺死体と首吊り死体とは、似ているようで、全然状態が違うもの。もしかして、リビングの隣室のどこか、散らかった服の下にでも、失禁した跡があるんじゃないかしら。全て終わってから片づけるつもりだったの？ 無理だね。計画そのものに欠陥がありすぎるのよ」

冷たい説明は終わった。

しかし狗子の脳は過剰覚醒状態を保ち続けていた。

動機のことを考える。

夜、両親が言い争っていたのを思い出す。

恐らく父の浮気が原因だ。

そして実行日に晴彦たちが来ている今日を選んだのは、母の死が『自殺』であることを証言する人数を、出来るだけ増やすため

冬子が泣きそうな声で言う。

「健三おじさん……本当にあなたが……」

「う、うううううあ！ あああ！」

鞍馬山健三は突然に腕を振るった。

がつんと音がして、

「あっ！」

横にいた冬子の表情が瞬間、歪んだ。

口の端から散ったのか 赤い滴が散る。



よろけて壁にぶつかり、崩れる。

「冬子！」

晴彦は駆け寄る。

健三はその晴彦をも殴り倒した。

顔と腹を殴られて晴彦はバランスを崩し、床に転倒する。

「う　あつ、」唸りながらも顔を上げる。「い……いけない、逃げろ……狗子ちゃん……」

「あああああ！」

父の声がそれをかき消した。

父は見たこともない恐ろしい形相をしていた。

狗子はその顔を表情無く見上げ、微動だにしなかった。

父は、抵抗しない狗子の首に手を伸ばす。

荒い声が響き渡る。

「前から　ずっと前からおかしいと思ってたんだ！　お……お、

お、お前は普通じゃないと、お、おお思っていた！」唾が飛び散る。

「この」

狗子は読み取った。

今、父を動かしているのは、混乱でも怒りでも屈辱でもない。

防衛本能だ。

すなわち　必死で練り上げたカラクリを難なく解き明かした少女に対する恐怖。はかり知れない能力を持つ子供の不気味さ、それが自らの娘だということを認識した上で全身に感じるおぞましさ、ずっと胸に抱いていた感情。

手に取るように伝わってきた。

「この、化け物！」

父はそう吠え、狗子の細い首に手をかけた。

父の声が反響する。

それに混じって、誰かの声も聞こえる。

この、化け物！　……違うわ。

この、化け物！　……どうしてそんな事言うの？

この、化け物！ ……私を嫌いになったの？  
この、化け物！ ……嫌よ、きらわないで！  
父に殺されて母が死んだ。父は母を殺そうと思ったから殺した。それには……嫌いだったから？  
今、狗子も殺されようとしている。  
ごめんなさい。もうしません。いい子にします。  
だからお母さんと私を殺さないで。  
殺したら 殺したら、私は狂ってしまう。  
狂ったら 私

ほんとうの、おばけになってしまう。

「この化け物め！」

だから、お願いだから、そんなことを言わないで！  
ぎりぎりど首が締まる。

足元で秋彦の声が聞こえる。

「や、やめて下さ……叔父さ……」

だんだんと、声が遠くなる。

ああ、いよいよ意識が遠のいてゆく。

父がまた口を開いた。

「この」

「……嫌……」

言わないで。

そんなこと言ったら、私、ほんとうのおばけに……だから、

「嫌……嫌……嫌……あ」

眼が 眼が 熱

「化け物め！」

「いいいいいい嫌あああああああっ！」

夏にしては涼しい土曜日。

一学期終業式の二日前である。

全校生徒は成績表等を渡され、ホームルームを終え、各の部活なり帰路なりに散っていた。

つまり今は放課後だ　とはいっても午前中であるが。

俺は中庭のベンチに座り、浅い眠りにについていた。

ここは三つの校舎に囲まれたところにあり、あまり陽はあたらないうが、それなりに心地の良い場所だ。三角形の空間を囲うように、幾種類もの木々が植えられ、真ん中には銀杏の大木がどっしりと根付いて周囲を見下ろしている。

近くで、暇を持って余した中等部の生徒たちがキャッチボールをする声が聞こえている。彼らはまだ帰らないのだろうか。

不思議なことだが、中途半端な眠りにについているとき、自分が寝ていることを認識していても、夢というのは非常な現実味を帯びて目の前に広がるものだ。

それはカラスの夢だった。

俺はなぜか山中にいて、大きな切り株の上にあぐらをかいている。そして膝の上には、カラスが横たわって寝ているのである。

何の警戒もせず、すやすやと寝息を立てる。どうも俺とカラスは親しいようだ。

しかし、そいつの姿たるや尋常のものではない。

身の丈は俺よりも大きく、くちばしは鉄のよう。巨大な羽根は全体に黒い炎のようなものを纏い、ゆらゆらと揺れ動く　おぞましく、しかしどこか美しい。まさしく怪鳥だ。

それが切り株の上に横たわり、俺の膝に頭を乗せている。

なぜか俺はそのことに少しの優越感を持っているようである。だが心のどこかでは、カラスにいつ喰われるものかと怯え続けている。

カラスは、そんな俺の心など、全て見通しているようだ。心地よ  
さそうにすやすやと眠っている。  
どんな夢を見ているのだろう。

やがて 俺は目を開けた。

寝ぼけ眼で見回すと、うとうとし始めてからあまり時間は経過し  
ていないらしく、周囲にはまだ中学生たちがボールを持って立っ  
ていた。

しかしどうにも彼らの様子がおかしい。皆、好奇の面もちで俺の  
方を見ている。

不信に思った瞬間、俺は、目を覚ましてもまだ膝の上に存在して  
いる重みに気付いた。

まさかと思いなから視線を落とし、その正体を確認して、うなだ  
れる。

そこにはカラスではなく、人間が寝ていたのだ。  
なるほど、背は俺よりも高い。美しいというのも、まあ当たって  
いる。

「おい……おい、こら」

俺はそいつの頬をぴしゃぴしゃと叩いた。

「起きろ鞍馬山」

「ん……礼司……？」

鞍馬山は眩しそうに目を開け

「……お休み……」

また、寝た。

俺は思いきりその耳を引っ張った。

「起きろって言うてんだよ！」

「いたた、痛い痛い痛い痛い！」

これで寝起きの悪い馬鹿女も、ようやく目を覚ました。

鞍馬山はむっくりと体を起こし、ああ痛い、と言いながら耳をお  
さえる。

「おお痛い……全く、せめて耳にキスとか、気のきいたことは出来ないかね」

「アホか。何やってんだ、お前」

「うん、ちよつと嫌な夢を見たよ。毎度のことだけど意味不明である。まだ寝惚けているらしい。」

俺は頭をかいた。

「お前の夢なんてどうでもいいんだよ。俺が訊きたいのはな、どうして気持ち良くうたた寝をしていて目を覚ましたら、いつの間にかお前が膝の上に寝てるのかってことだ」

「喜ばせようとしたんじゃないか。モテナイクんに女の子との甘い目覚めを提供してやったんだ。有り難く思え馬鹿」

「馬鹿はお前だ！ 相手がイカレ女じゃ嬉しくも何ともないんだよ！」

舌打ちしてまた周囲を見ると、五、六人の男子中学生の他に、女子たちもこちらを見つめている。

耳を澄ませば、その一人が「誰あれ……：狗子先輩の彼氏？ やだ全然格好良くないじゃん」と呟くのが聞こえた。

俺は赤面した。思わず小声になる。

「お前、本当……勘弁してくれよ、そういうノリだけは……。お前は知らないかもしれないけどな、最近校内に、お前のファンクラブなんかも出来たんだぞ」

「えっ、そんな時代を間違えたものがあるんだ」

「俺も信じられないけどな。顔だけに憧れる奴らだっているんだろ」

実際、黙っていれば本当に、一日中眺め続けても飽きないほどの容姿なのだ。普段のだからしない振る舞いを『気取らない』と解釈する奴も意外に いや信じられないほど多い。

皆こいつの馬鹿さ加減を知らないのだ。知らないということは恐ろしい、と、本気で思う。

「ふうん……。ファンクラブか……。なんか有名人みたいだ」

鞍馬山はしばらく他人事のように感心していたが、不意に前方を指さした。

「あつ、恵依子だ。おーい恵依子」

人を呼ぶ声まで脳天気である。

昇降口から出てきた渡瀬はこちらに気付き、小走りに近づいてきた。

「あら 二人仲良く何してるの？」

「ひなたぼっこ」

と鞍馬山。

俺も肯く。

「仲良くはないけどな」

「恵依子こそ何してるんだい？ とつくに帰ったと思ってたのに」

「私は図書委員だから、図書室の整理よ。これから夏休みに入るでしょう？ 長期貸し出しの用意をしておかないと、後で混乱するの。

それにしても……二人とも傘は持ってないのね」

「傘？」俺は問い返す。「何だ、もしかして今日、雨降るのか」

俺は傘など持っていない。隣にいる鞍馬山は、カバンすら無いから問題外である。

渡瀬は肯く。手には赤い折り畳み傘を持っている。

「そうよ。天気予報見なかったの？ 午後から降るって言っていたじゃない」

「見ない」と鞍馬山。

見ていない、ではなく、いつも見ないのである。普段からのいい加減さがよく分かる。

しかし俺も、昨日と今日は天気予報をチェックしなかった。最近快晴が続いていたので油断したのだ。

「参ったな」俺は言った。「うたた寝なんてしてるんじゃない」

「うん。あたしも今日は学校を休めば良かった」

鞍馬山はいつも、雨が降ると学校を休む。

空を見ると、なるほど、寝ているうちに天候が変わったらしい。

濃密な灰色に染まっている。周りにいた中学生たちも、それに気付いたのか、ぱらぱらと散ってゆく。

「何にしても早く帰った方がいいわよ。      じゃあ、私は人を待たせているから」

渡瀬はそう言い残して去っていった。

後ろ姿を見送りながら、鞍馬山は呟く。

「ねえ、恵依子っていつも、どんな友達と帰ってるんだろうね」

「      さあな」

そう言われてみれば俺たちは、学校内で渡瀬と親しくしている割に、一緒に帰ったりすることはあまり無い。

じゃあ俺たちはどんなメンバーと帰るのかというと、鞍馬山は基本的に広く浅い人付き合いをする性格だから特定の親しい友人はあまりいないし、俺もそこまで人と馴れ合う方ではないから、必然的に、俺たちは二人だけで帰ることが多くなっている。色々と誤解される理由の一つがそれである。

俺は立ち上がる。

「……………それどころじゃないだろ。雨が降る前に、とつとと帰ろうぜ」

鞍馬山も、そうだね、と立ち上がった。

3

結局雨は降り出してしまい、俺と鞍馬山は、駅へと続く長ったらしい上り坂を、手を傘代わりにして走っていた。

思っていたより大雨である。

桁外れの運動能力を持つ鞍馬山は、文字通り、飛ぶように坂道を駆け上ってゆくが、俺の方はそうもいかない。はあはあと息を切らせながら必死に後を追う形になる。

雨宿りが出来そうな場所もない。

鞍馬山は傘をさした用意の良い人々の合間を、するすると器用に走り抜けてゆく。

そして時々振り返る。

「早くしろ礼司、急いで避難しないと溺死するぞ！」

「こ、こんな雨で溺死なんてするわけないだろ、だから、ちょっと

スピード、落とせれば」

俺の方は息も絶え絶えである。もう、いつそ置いていって欲しい。第一こっちはカバンを持っているのだ。

「全く、普段から運動をしないからだよ。不健康な男だなあ」  
自分はセブンスターをすばすば吸うくせにそんなことを言う。

だが現実、俺の体力は限界に差し掛かっていた。言い訳のようだが無理もない。短距離走並みのペースで、学校からずっと走りっぱなしなのである。

ついに鞍馬山も、そんな俺を見かねたのか立ち止まった。

「ああもう　本当に遅いね、そんなに雨が好きかい」

「う、五月蠅いな……」俺は喘ぎながら前髪を撫で上げる。

もう全身びしょ濡れだ。雨は容赦なく降り続けているが、これ以上濡れようがないから、だんだん気にならなくなってきた。

鞍馬山もそうらしい。

「あーあ。びしょびしょだ。　おい、あんまりこっちを見るなよ

礼司、シャツが色っぽく透けてるんだから」

「何が色っぽくだ。大体、見えても別に嬉しかねえよ」

さすがにこれは嘘であるが、俺はわざと目を背けた。

鞍馬山は口を尖らせる。

「見たければ見ていいのに」

「どっちだよ。ああ　くそ、疲れた！」

雨の中では、いつものような馬鹿馬鹿しい会話すら面倒だ。歩くことさえ嫌になった。

横の車道を、車が連なって走り過ぎてゆく。

車に乗っている奴らが羨ましい。連中はこの雨の中、傘もささず



にいる人間をどんな目で見ていることだろう。

畜生、と言おうとした瞬間

クラクションが鳴った。

振り返ると、一台の黄色い小型車が止まっていた。

俺は車に詳しくないから車名は知らないが、知った人の車である。

思わず俺は目を輝かせた。

「黒場さん！」

俺は車の傍へ駆け寄り、鞍馬山は、……舌打ちをして、後へ続く。車の窓からその人は顔を出した。

下手なタレントよりも綺麗だが、どこか女を捨てた感じのする、薄い化粧と蓮つ葉な笑顔。短く全体的にシャギーのかかった髪。

その人 黒場勝美さんは言う。

「二人とも、ぼーっとしてないで乗りなさい。溺死しちゃうわよ。

それともそんなに雨が好き？」

……俺たちは顔を見合わせた。

黒場さんは怪訝な顔をした。

「どうしたのよ」

「いや さすが鞍馬山の保護者であるだけあって、言うことも似通っているなあ、と」

感心したのである。

「はん！ あたしをこんな売れ残りの三十路女と一緒にしないでくれ！ あたしまで売れ残る！」

鞍馬山は突然、もの凄い勢いでそう口走った。

「何ですって、でかい口たたくと乗せないわよ！」

黒場さんも間髪入れず言い返す。

とんでもない大声だ。通りすぎる人たちが皆見ている。

俺は慌てた。

「く、黒場さん」

「……あ、ごめんごめん。どうぞ乗って頂戴、礼ちゃん」

「あたしも乗ってやるからな」

「やかましいわね、勝手に乗りなさい！」

どうしてこんなに仲が悪いのか。とても同じ屋根の下に住んでいる二人とは思えない。

「さあ礼ちゃん助手席にどうぞ。ああ、イヌコは後部座席にでも寝そべってなさい。シートベルトなんてもつたないから使わなくて良いわよ。何ならボンネットにでも座る？」

「ふん、お前の下手な運転じゃ、車内もボンネットも安全性には大差ないからな」

「憎たらしい！ あんたなんか車の横を走って付いてくればいいのよ！」

「望むところだ、追いついてやる！」

「……お邪魔します」

もう俺は二人に構わず、勝手に助手席に乗り込み、中から扉を閉めた。

すると運転席の黒場さんはころりと表情を変え、俺の姿を見て言った。

「まあ礼ちゃん、びしょ濡れだわ　ねえ、うちに寄らない？　シ

ヤワー浴びていきなさいよ」

「そんな事言つて襲う気だな。男なら高校生でも良いのか、破廉恥三十路女！」　いつの間にかやら後部座席に座っている鞍馬山が怒鳴る。

「礼司はあたしのだぞ！」

「分かつてるわよ、ホント五月蠅いわね！」

「おい鞍馬山……俺は別にお前の物じゃないぞ……」

俺の声は無視された。よくあることである。

「ほら乗ったぞ、さっさと出せ！　あたしは腹が減っている！」

鞍馬山は偉そうに腕組みをして運転席を後ろからドカドカと蹴る。

黒場さんは「分かつてるわよ！」と怒鳴り、勢い良く車を出す。

俺は毎度の事ながら呆れ返り、鞍馬山の横顔と黒場さんの後ろ姿を、交互に見比べた。

黒場勝美さん。

今年で今年で三十歳の独身、もちろん女性。職業は私立中学校の講師で、教えている科目は化学、だったと思う。

ともかく彼女こそ、鞍馬山の正式な飼い主である。

どういふ事情だか知らないが幼い頃に両親と別れた鞍馬山を、まだ二十代だった彼女が進んで引き取ったのだという。

それだけ掻い摘んで聞けば、何となく良い話かな、で済むのだが、二人のやり取りを近くで目の当たりしている俺は、とてもそんな感想を抱けない。

黒場さんと鞍馬山は遠い親戚で、血の繋がりも少しはあるというのに、それを全く感じさせないほど二人の仲は悪いのだ。犬猿の仲などという言葉があるが、この二人のために用意されていたような言葉である。

それほど二人の口喧嘩は、毎回毎回、壮絶を極める。驚いたもので、知り合ってから三年間、俺は彼女らが普通に話しているところをほとんど見たことがない。比較的穏やかな時でも嫌味の言い合いである。

だが決して洒落にならないような争いには発展せず、今日のように、雨が降ると黒場さんが迎えに来るところなどを見ると、本質的にはそんなに仲が悪いわけでもないらしい。

ならばどうして理由もなく罵り合うのか。全く他人には理解しがたい所だ。俺は小さくため息をついた。

車が赤信号の前で止まると同時に、後ろで鞍馬山が頓狂な声をあげた。

「おや？ おい、ちょっと見なよ礼司」

歩道に何か見つけたらしい。

「何だよ」

俺もつられて窓の外を見る。

すると、確かにそこには、奇妙な光景があった。

雨の中、見覚えのある赤い傘。

それをさしているのはB組の神崎という奴だった。

鼻筋の通った端正な顔立ちに、鞍馬山ほどではないが、モデルのようにはぐらりとしたスタイル。理知的な雰囲気はガラス越しにでも伝わってくる。

成績優秀、容姿端麗……要するに、男バージョンの渡瀬みたいな奴だ。

しかし渡瀬との決定的な違いは、やや気障で、ほとんど異性にしか好かれないことである。

その神崎が横断歩道の前に立って、信号が青になるのを待っている。

そして 彼の横に寄り添っているのは

「あれって恵依子じゃないか？」

そう、渡瀬本人だった。

二人とも、こんなに近くなのに、車の中にいる俺たちの存在には、全く気付いていない。

相合い傘に肩を寄せ合い、何を話しているのか、くすくすと楽しげに笑い合っている。

信号は青になり、車は動き出した。

二人の姿は後方へ過ぎてゆく。

「今の子って確か、あんた達の友達でしょ？ 横にいたのは彼氏かしら。なかなか格好良かったじゃない」

黒場さんはしかし、そんなに興味は無さそうに言う。

俺たちは黙っていた。

……。今のは一体どういうことだろう。渡瀬と神崎は確かに親しいが、付き合っているなんて聞いたことがない。

「寄ってくでしょ礼ちゃん。昼ご飯、まだ食べてないわよね？」

黒場さんはハンドルを握りながら訊いてきた。

「あ、はい」と俺。

もやもやと詮索していた思考はすぐ断ち切られた。

横を通り過ぎた車に誰が乗っていたのかなど全く知る由もなく、渡瀬恵依子と神崎和也は、赤い傘に身を寄せ合い、他愛もないことを話しては笑い合って歩いていった。

神崎の傘がないのは、誰かが間違って持っていったか、さもなければ盗んだかして、とにかく紛失したからである。そうでなければ人目をはばかって付き合っている相手と相合い傘で帰るなど、危険すぎて出来たものではない。そう。

渡瀬恵依子と神崎和也。

この二人は以前から、恋人として付き合っている。

しかし互いに他よりも目立ち、鞍馬山狗子ほどではないにせよ、何かと異性から言い寄られることが多い身である。妙なイザコザなどが起こらぬよう、交際は出来る限り秘密に……と、始めからそういう約束であった。まるで自惚れているようだが、現実問題、そういう状況なのだから仕方ない。彼らはやはり賢かった。

だが、傘など途中のコンビニでも買えばいいものを、それをせず相合い傘で帰っていることから分かる通り、二人は決して割り切れているわけではなく、可能な限り一緒の時間を過ごしたいという思いは、他の平凡なカップルたちと寸分の違いも無かった。

横断歩道を渡り終えたと同時に、神崎は少しだけ真面目な顔をした。

「ねえ、渡瀬さん」

「何かしら？」

並の高校生なら一言聞いただけで感心してしまうような、玲瓏な口調で言葉が交わされる。

「どうしても今日でなければいけないのかい？ その……お父さんに会うのは」

「緊張しているの？」

「ああ。当然だよ。だって君のお父さんは、僕らが交際していることさえ、まだご存じではないんだらう？」

「……大丈夫よ」

渡瀬恵依子はそれだけ言った。  
問答無用の雰囲気を感じた口調であった。

5

黒場さんの部屋である。

日野台駅から徒歩十五分の所にある、茶色いマンションの四階。  
二人で暮らすのにちょうど良くらしいの部屋だ。

俺がここに来るのは何回目だろう。妙に気に入られているらしく、  
最近焼肉や鍋物をするたびに呼ばれるから……やはり多少遠慮  
はあるものの、緊張は全く無い。

一昨年の今頃だったか、二人に無理矢理酒を飲まされた時などは、  
酔っぱらって寝込み、そのまま一泊したこともある。

気安く泊まつたり、一緒に食事をしたり 昔馴染みや親戚でも  
ないのにそんなことが出来てしまうのは、彼女らがどこか男性的な  
親しみやすさを持っているからなのだろうか。

今も俺は、厚かましくシャワーを借りた上、黒場さん特製の炒飯  
を御馳走になっている。

スプーンの手で俺を指して黒場さんは言った。

「狗子の服が合ってたわね。それ貸すから、濡れた制服はビ  
ニール袋にでも包んで持って帰んなさい」

「どうも、ありがとございます」

シャワーを浴びた俺は、何と、鞍馬山の服を借りていた。 と  
いっても決してスカートなどではない。鞍馬山は死んだってそんな  
代物を見に付けはしないのだ。

だから俺が借りたのも、大きいサイズの、黒いTシャツとジーン  
ズである。鞍馬山は俺より背が高いし、いつもダブダブの男物を着  
ているから、俺が着ても、まあ小さくはない。もつともズボンの裾  
を折らなければならぬのは、男としていささか屈辱的であるが。

それに、やはり、そのシャツには何となく甘ったるいような匂い

が染みついている。俺はさつきからそればかり気にしていた。

そんな俺の様子を見て勘違いしたらしく、黒場さんは笑う。

「何モジモジしてんの。そんなに遠慮しなくてもいいのよ、厚かましくしても許されるのは若い子の特権なんだから」

「はあ……、はい」

俺は横目で、左隣の椅子に座っている鞍馬山を見る。

鞍馬山は何も聞いていないのか、ただ黙々と、炒飯を口に運んでいる。全くの無言。食に没頭しているといった感じだ。

それを見て黒場さんはため息をつく。

「どうしてこの子、餌を与えられた時だけ静かになるのかしらねえ。普段はぎゃーぎゃー騒がしくせに、ホント動物だわ」

それでも鞍馬山は飯に夢中である。

黒場さんは話を変えた。

「もうすぐ夏休みになるけど、礼ちゃん、この夏はどうするの？」

「去年みたいに時々遊びに来る？」

「あ、はい」

俺は反射的に肯く。

黒場さんは微笑んだ。

「良かった。私たち、長期休みの度に暇を持て余すのよ。ほら……私は中学の講師だから、進学塾で夏期講習のバイトする以外は仕事もないし、狗子は　こなだしね」

鞍馬山は左手で皿を持ち上げ、炒飯を口に流し込んでいた。やはり何も聞こえていないようだ。これでは彼氏など到底出来まい。

「今年は泊まりがけで海にでも行こうかと思ってるんだけど、礼ちゃんのご両親は許してくれるかしらね」

「え　俺もですか？」

「あら、嫌？」

「いや別に、全然嫌じゃないですけど」

俺がそう言うと、黒場さんはなぜか、安心したような顔をした。

「そう。じゃあ夏休み中、車で迎えに行くわね」

「はあ」

「ご馳走様！」

鞍馬山は全ての炒飯を腹に収め、乱暴に皿を置いた。そして嫌味っぽく舌打ちする。

「ああ不味かった」

「何ですって！」黒場さんがテーブルを叩く。「このメスイヌ、生意気言うとご飯食べさせないわよ！」

「不味い物は不味いんだよ。飯炊き係なんだから少しは料理の修業くらいしたらどうなんだ、この大ブス！」

「誰が飯炊き係でブスで行き遅れの三十路女よ！あんた、ちよつと若くて顔が可愛いからってね、油断してたらすぐにオバサンなんですからね！」

「行き遅れとはまだ言っていないぞ！まあ言い忘れたからだけだな。ふん、本気で焦って被害妄想状態に陥っている負け犬女の遠吠えはもう沢山だ！」

「誰が本気で焦っているというの！」

誰が見ても本気で焦っているだろう。黒場さんは一見して結婚願望が無さそうで、実は人一倍それを持っている人だ。……ただし、努力はしていない。今時三十で独身なんてざらですよ、と言っても聞かない。難儀な性格である。

「何よ、何よ何よ何よ何よ！色気の欠片もないから、十六になる今まで、一度つたりとも男っ気が無かったくせに！あんたもしかしてまだ処女でしょ？そのスレた顔でバージンって何だか不気味だわ！」

「不気味で結構！人のこと構ってる暇があったら早く男見つける！」

「きいーっ、誰が薄汚れてるっていうの！」

また段々とエスカレートしてきた。

皿が飛んだりする前に止める必要があるそうだが、どう止めて良いものか分からず、俺は取り敢えず炒飯を食べ続けた。別に炒



飯は美味しいし、黒場さんも不美人ではないと思ったのだが、それを口に出したら鞍馬山の怒りの矛先がこちらへ向きそうだったので、やはり言うのはやめておいた。

本当に皿が飛んだのは五分後のことである。

6

雨の音が恵依子たちを包んでいる。

空はとても暗い。……もう真夜中のようだ。

雨音に混じり、時々、頭の中で、

ぎしり、ぎしりと音がする。

真夜中？ では、これは誰なのだろう。

恵依子はそつと目を開ける。

眼前に迫る顔は、

「ひ

後ずさる。

違う、この人は違うはずなのに。

「神崎君、たすけ……て」

それでも　それでも

嫌なのだ。

恵依子は、……ぎしり。耳の奥で鳴った。

7

派手な喧嘩が一段落する頃には、もう時刻は四時をまわっていた。半端ではない長期戦であったため、最終的には、双方とも体力を消耗しすぎてイヤになったようだ。

おれはその間、別室で、黒場さんが借りたらしいホラー映画のビ

デオを勝手に見て時間をつぶしていた。ここに来ればよくあることである。

結局、黒場さんは「ばかっ！」と簡潔な捨て台詞を残し、車に乗って、日野台高校の近くにあるスーパーへ夕飯の買い出しに出かけた。

その数分後。

「全く どうしてあの女は、ああも血の気が多いんだろうね」  
俺の向かいの椅子に座り、膝から下をぶらぶらさせながら、鞍馬山はトランプのカードを切る。

その口には煙草。横に灰皿。テーブルの隅にはコーラのペットボトルが置かれ、脇に凍り入りのガラスコップが二つ。

始まるのはポーカーだが、金は賭けない。

鞍馬山が意外にも賭事を好まないからである。

一応ここにはTVゲームなどもあるらしいのだが、どこかで埃を被っているようで、俺は見たことがない。やるのはいつもカードゲームだ。

「たまにはババ抜きでもするかい」

鞍馬山は切り終えたカードをとんと置いて言う。

俺が肯くと、鞍馬山は、ジョーカーを一枚抜き取り、手際よくカードを二山に分ける。

「まず、どうするんだっけ？ 重複した数字を抜くんだっただね」

気怠い時間である。平和を感じてしまう。

自分のカードを見ていた俺は、ふと思いついて顔を上げた。

「なあ」

鞍馬山はもう持ち札を整理し終えたようだ。

「何だい」

「いや、さっきのさ……渡瀬と神崎のこと、どう思っ？」

学校帰りの光景である。

雨の中、相合い傘で帰っていた二人のことだ。

「ああ……。そういえばあいつら、一緒にいたねえ」

鞍馬山はあまり興味を持っていないようだ。

しかし俺は身を乗り出した。

「付き合ってるのかな」

「うん、」

鞍馬山は白い天井を見て少し考え、

「……多分ね」と答えた。

俺は目を丸くした。

「お前 何か知ってたのかよ」

「興奮するなよ、あたしは何も知らないさ。ただ、あの雰囲気はどう見たって、友達同士って感じじゃなかっただろ。もう高校生なんだし、別にそういうことがあってもおかしくないんじゃないのかい」

どことなく年寄り臭い物言いだ。

俺は首を振る。

「そういうことじゃなくて 俺、何も知らなかったぞ?」

「ん……。付き合っているとしたら、誰に対しても秘密にしてるんだろ? 神崎も恵依子もモテるからなあ」自分がモテることは棚上げだ。「ひがむ奴が出てきて、妙なイザコザが起きないとも限らない。賢いあいつらなら間違いなくそうするよ」

「そんな……もんか?」

俺は何となくショックを受けた。

人間というのは、例えば秘密にしていることでも、仲の良い友人にだけはそつとうち明けるものだ と、勝手に思いこんでいた。

違ったのか。そういうものではないのか。いや、もしかしたら渡瀬は、俺など大して大事な友人と置いていないのかも知れない。

ゆつたりと煙を吐き、鞍馬山は続ける。

「案外みんな友達のことなんて知らないもんだよ。特にあたし達と恵依子なんか、いつも一緒にいるみたいだけど、実のところ学校内でしか会ってないじゃないか。あいつの父親が再婚する話だって、部分的に聞いただけで、別に相談されたわけじゃない」

「そうか」

俺は二度、肯く。

「そうだったな」

「そうさ」

鞍馬山は、やけにはつきりと言う。そして、

「あたしだつて、誰にも知られたくない秘密の一つや二つ、持つてるかも知れないよ?」

などと呟いた。

「馬鹿言え」

と俺は笑った。

鞍馬山も笑う。

「なんちゃってね。そうだ礼司、夕飯もうちで食べて行くかい」

「夕飯か? まあ黒場さんの料理美味いし、御馳走になれるんなら嬉しいけどよ」

「じゃあ食べて行くんだね」

「いや」俺は頭をかく。「今更だけどさ……別に親戚とかでもないのに、こう、しょっちゅう甘えるのもな。さすがに昼も夜もつてのは。帰るのも遅くなるし　そしたら、やっぱり車で送ってもらわける」

何よりここは、忘れがちだが、女だけの家である。

しかし鞍馬山はやけに引き止める。

「遠慮しないで良いんだ。いつもこっちが呼んでるんだし　も　しかして迷惑かい?　そういうのは」

「いや別に、全然そういうんじゃないんだけどよ」

少し迷った挙句、俺は頷いた。

「　まあ、いいか。食わせてくれるなら食ってくよ。始めようぜ、ババ抜き」

「ああ」

鞍馬山はこくり、と肯いた。

結局、俺が七連敗した頃に黒場さんは帰ってきて、彼女の持つ買

い物袋には、はじめから俺の分も含めた三人分の材料が入っていた。俺は自宅に「遅くなるから」と電話を入れて、豚肉の生姜焼きなどを御馳走になった。

やっぱり黒場さんの料理はとても美味かった。

だから、俺は少しだけ鞍馬山を羨むと共に

ふと、なぜ鞍馬山が両親と一緒に暮らしていないのか、初めて疑問に思ったのである。

黒場さんの部屋を出たのは八時過ぎになったが、その時になっても、まだ雨の勢いは衰えていなかった。テレビの中で気象予報士が言うには、朝まで止むことはないそうだ。

俺は傘だけ貸してもらえれば良かったのだが、黒場さんが車で送ってくれると言うので、結局、それに甘えることにした。

部屋を出る頃には、鞍馬山はもう満腹になつて寝てしまっていたため、見送りはなかった。もっとも起きていたところで、まともな見送りなど無いだろうが。

黒場さんが運転する車の助手席で、俺は不意に、思ったことを口にした。

「黒場さん、俺、前から思ってたんですけど」

外は暗く、まるで車を潰そうとするかのように、物凄い勢いで雨が降っている。

「何かしら？」

黒場さんは前方から目を離さない。

俺は問う。

「今更こんなこと訊くの、変な感じですけど どうしてこんなに

……何て言うか、俺に親切なんですか？ 考えてみりゃ、知り合っただのはたった三年前なのに」

「三年も経つてるじゃない」

「そう……ですけど」

黒場さんはくすりと笑った。

「狗子があなたに懐いてるから　それに、私もあなたを気に入ってるから。それだけよ」

「はあ？」

誤魔化されたような、答えになっっているような。

首を傾げた俺に、黒場さんは、「ずっと狗子と仲良くしてあげてね」と呟くように付け加えた。

8

土砂降りの雨は、暗い光景の中にある境界という境界を、上から塗りつぶしたように曖昧にしている。

電柱も、ブロック塀も　本当にそこにあるのか、分からない。

渡瀬恵依子は混乱していた。

「神崎君……私……私……」

頭を抱え、電柱に寄りかかる。

神崎は静かに、拾い上げた傘を畳んだ。

そして恵依子の肩を優しく抱く。

「大丈夫だよ。気に病まなくて良い」

雨音はその穏やかな声すら曖昧にしている。

恵依子は震えていた。

「わ、私……ああ、あ……」

「さあ、君の家に行こう。まずは落ち着くんだ。大丈夫。君はずっと　こうなることを望んでいたんだろう？」

「そんな……私は、違う……だって、あの人は、とても可哀想な人だったのよ！」

「分かってる」

「お　お母さんは、勝手に男を作って出ていったの！　お父さんは、私たちのために、一生懸命」

「分かってる」神崎は恵依子を抱き締めた。「僕はみんな知ってる。

だから大丈夫。もう、君を縛り付けていたものは全て無くなった」  
神崎は笑った。

「君は開放されたんだよ。大丈夫、大丈夫だ」

「神崎君」

「僕はここにいる。ほら、平気だ。ずっとここにいる」  
熱っぽい声で神崎は囁く。

「君の傍にいるよ」

「神崎君」 嗚咽。「か、神崎君、神崎君、神崎君、神崎君、神崎君」

恵依子は狂ったように彼の名を連呼した。

神崎は やはり何度も肯いた。

死体の上に雨は降り注ぐ。

雨音に混じって何かが聞こえる。

ぎしり、ぎしり、ぎしり、ぎしり、ぎしり、ぎしり。

それはまるで、耳鳴りのように。

### 第三話【レッドアイズ・ブルーハーツ】

#### 第三話

【レッドアイズ・ブルーハーツ】青春と狂気が同時進行する夏は暑くて。

1

それを俺が知ったのは日曜日だった。つまり黒場さんの家へ行った翌日、終業式前日である。

日曜だから授業はない。

徹夜でゲームをしたせいで夜明けと共に寝た俺は、のんびりと正午に目を覚まして、一階に下り、テーブルの上にあったカップ麺にお湯を注いで、立ったまま新聞をながめていた。

電話がかかってきたのは、その時である。

両親は書き置きを残して買い物に出かけている。しかも弟まで遊びに行ったらしくいらないから、嫌でも俺が出なくてはいけなかった。

三分以内に切り上げねばなるまい。

俺は湯を注いだばかりのカップ麺をちらりと見て、そんなくだらないことを思いながら電話を取った。

電話の向こうから聞こえてきたのは、大して聞きたくもない声だった。

《あ、日野台高校の稲森つすけど、今、礼司君、御在宅つすか？》同じクラスで後ろの席に座っている陽気なデブ、稲森である。

九分九厘 暇つぶしのためにかけてきたのだろ。そういう奴



である。

クラスの中で俺だけが休日もずっと家にいることを、こいつはちゃんと知っているのだ。

稲森自身も昨日、明日は何もすることが無い、暇だなあどうしよう、などと言っていたから多分間違いない。

悪い奴ではないのだが今は面倒である。特に下世話な話題を好むこいつと寝起きに話をするなんて、前菜も食わずに厚切りのステーキを腹に押し込むようなものだ。

「俺だよ。切るぞ」

《はい……え？ ちよつ、なんで切るんだよ！》

「カップ麺がのびる」

稲森は電話の向こうで舌打ちする。

《そんな理由で切るなよな。結構大事なことなんだから》

「何だよ早く言え」

《うん》

少し声の調子を下げた。肉厚な割に軽薄な稲森にしては、かなり珍しい。

《B組にさ 神崎っていただろ。あの何となく嫌味っぽい顔した奴。頭良さそうな……あ、成績は本当に良いんだっけか？》

「神崎……？」

《そう神崎。お前知らないのか？》

「いや、知ってるよ。神崎がどうかしたのか」

俺はまた昨日の光景を思い出していた。

稲森は少し勿体ぶってから、簡潔に告げた。

《あいつ、死んだぜ》

よく分からない。

「死んだ？」

寝起きに近い俺は、ただ、その言葉を馬鹿みたいにリピートした。

《おう、自殺だってよ。なんか知らんが、車の前にいきなり飛び出したんだと》

「自殺……って、どうして……」

神崎が死んだ。

しかも自殺？ 今 渡瀬は？

稲森は、おいおい、と少し笑ったようだった。

《俺に理由訊かれたってな、んなこと知るかよ。詳しいことは神崎本人に訊いたらどうだ？ なんてな、ははは》  
全然笑えない。

「自殺っていうと……何だ」

俺はどもりながら質問を選んでいた。

「どこで？」

《場所か？ 死んだ場所はヒヤクラクだって。ほら、日野台駅から四つ行ったとこだよ》

ヒヤクラク……百楽町……か。待てよ。そこは確か

《あ、そうだ、何か良く分かんねーんだけどよ 渡瀬っているだろ？ つーか、お前らとよく一緒にいる、あの渡瀬恵依子だよ。うちの学校じゃ鞍馬山の次くらいにカワイイ子。優等生》

「……ああ……」

《神崎が死んだのって、渡瀬ん家のすぐ近くだったらしいぜ。あいつん家って百楽にあるだろ。俺もさっきB組のダチから聞いたんだけどな》

渡瀬の家の近く。

「稲森」

《あん、何だよ》

「神崎の家がどこか知ってるか？」

《は？ 神崎の？ んなこと知らねえ、いや待てよ。ええと……

……。ああ、やっぱり良く知らねえや。でも百楽の近くじゃねえぞ》

「そうか……」

何だろう。

何か、嫌な感じがする。

稲森はしかし軽い調子で続ける。

《そうそう、だから、どうして神崎がそんなところで死んだのかが謎なんだと。自殺したのは四時過ぎだったらしいけど、んな時間に神崎がそこにいる理由が無いんだってさ。それと自殺の動機とかも分かんねえらしいぞ》

神崎がそこにいた理由？

二人は多分付き合っている　と鞍馬山は言っていた。

だったら渡瀬を家まで送った帰り、か？

いや、神崎が渡瀬を送る理由はない。雨が降っていて空が暗かったとはいえ、まだ四時かそこらだったのなら、それは少々不自然だ。

第一、傘は一本しか無かったはずだ。その傘にわざわざ入れてもらって、彼女の家へついて行くまでは良い。

しかしその帰りはどうする。

傘を借りるか？　やはり、そこまでする意味はない。

ならば……その日、雨が降っていようが何だろうが、どうしても渡瀬の家へ行かなくてはならない理由があったのか。それで、その帰りに　死んだ？

上手く脳味噌が働かない。

俺は頭を掻いて訊いた。

「ところで稲森、お前どうしてそんなに詳しいんだ？」

「テレビでやってるぞ。今」

「早く言え」

がちやり、と俺は受話器を置いて、テーブルにつき、リモコンを手を取った。

テレビの電源を入れると……本当だ。ちょうど神崎の顔写真が映っている。

カップ麺は程良く出来上がっていた。しかしこの時刻では、昼食なのか朝食なのか分からない。

ともかくそれを食いながら俺は画面を見る。

画像が切り替わり、はねられた現場らしい場所が映る。

普通の、比較的静かそうな住宅街である。

アスファルトが映される。血痕などはないようだ。あっても雨で流れてしまったのだろう。

画面の端には『事故か自殺か?』と思わせぶりな文句が表示されていたが、その時は気にならなかった。

仰々しい音楽と共にナレーションが入る。

『この少年と、現場近くに住む同学年の生徒が、秘かに交際していたという……』

いきなりである。

何だ、と思った。三年間付き合ってきた友達よりも、テレビ局の方がよく知っているじゃないか。

『遺書などはなく、……』

俺は少し落胆した。一日調べれば分かるような友人の秘密を、俺は今までずつと知らないでいたのだ。

友達とは他人なのだなあ、と、初めて感じた。

なぜか鞍馬山の顔も目に浮かび、にわか寂しくなってしまった。

ナレーションは続いている。

『運転手は、「大雨で視界が悪かったから断言は出来ないが、少年は電柱の影から飛び出したように見えた」、また、「はねた瞬間、混乱で目の前が真っ赤になり、混乱して逃げてしまった」、と』

電柱の影から 飛び出した?

『他に人影は見えなかったと証言して』

神崎は一人でそこにいたのか。

『和也君は成績も良く』

知っている。

もうナレーションは耳に入らない。五月蠅いだけだ。

苛々して俺はテレビを消した。

熱い麵をずるりと吸い、あまり噛まずに腹におさめる。

食いながら、ふと考える。

渡瀬は今、どうしているだろう。

「ただいま」と、玄関の方から弟の声が聞こえた。

その日、日野台住宅公園は静かだった。

といつても、ここはいつも静かなのだ。密集したマンションたちの隙間に、ぽつりと存在している、小さな小さな公園である。

遊具はやはり小さな滑り台と、古びたブランコ。砂場だけがやや広い。

そこにいるのは数羽の鳩と、五歳くらいだろうか……今時活発そうな子供が二人。両方とも男の子だ。

それと、それぞれの親らしい、若い主婦二人だけである。

主婦たちは公園入り口付近にある青いベンチに座り、何かぺちやくちやと話している様子だ。どんな話題かは知れないが、時々明るく笑ったりしているから、それなりに内容は充実はしているらしい。子供たちは、その周りをぐるぐると走り回っている。鬼ごっこのもりらしいが、はっきりとしたルールが定められていないため、実際は単なるエンドレスの追いかっこである。まあこれもやはり、本人たちが満足していれば遊びの目的は達成されるのだから、それで良いのだろう。

そして一方、砂場の隣にある寂れたベンチには、背の高い、綺麗な少女が腰掛けていた。

黒いタンクトップに、下はスリムなジーンズのパンツ。細長く白い両腕を広げて、だらしなく背もたれに乗せ、長い足をでんと前に投げ出している。

気怠そうに半開きになった口には、大分短くなった煙草。

寝癖だらけの茶色い髪は、首の後ろでいい加減に束ねられ、時々吹く風に揺れる。

「ふあーあ」と無防備な大あくびをする。不思議と煙草は落ちない。ゆっくりと眠たそうな顔を上げ、ぼりぼりと頭をかく。少女は鞍馬山狗子であった。

一体何を考えているものか、彼女がぼんやりと見つめる先には、木にとまった二羽の鳩がいる。

ぼつりと呟く。

「庭には二羽、二ワトリが……」

ハトと二ワトリの区別もつかないらしい。しかもここは庭ではなく住宅公園だ。何一つとして正しくない。

「ふむ」

なぜか納得したように頷き、傍らに置かれたコーヒの空き缶に煙草を押し込んでから、ごろりとベンチの上に横になる。百七十センチ強と女性にしては結構な長身であるため、脚は曲げないと乗り切らない。

狗子はそのまま目を閉じた。

そこへ、追いかけてくつこをしている男の子たちが、てけてけと接近してきた。だんだん遊びに夢中になって、走り回る範囲が広くなってきたらしい。周りも見えていないようである。

「待てよ、おれ、ちゃんとタッチしただろ！」

「とどいてなかったよーだ。ケイちゃん足おそいな！」

「ずるいぞ！ 止まれよシンゴ！」

「やだよーだ！」

「待てつてば、 あっ！ シンゴあぶない！」

「え？」

案の定、追い掛けられている子 シンゴがつまずき、

「うわあっ！」

「シンゴ！」

あろう事か、そのままバランスを崩し、寝ている狗子の胸に顔を埋めてしまった。

公園内の時が止まった。

事実、鳩や、風に揺れる木々までもが、ぴたりと止まってしまったのは偶然だろうか。

「……ガキども……」

狗子はすぐに目を開け、倒れかかってきたシンゴの腕を、がしりと掴んだ。

幼いシンゴ少年は、文字通り蛇に睨まれた蛙の如く硬直した。同時に、追い掛けていたケイちゃんも言葉を失って立ちつくす。

同じく入り口の近くでは、母親たちが、我が子らの引き起こした大変な事件に気付いて思わず立ち上がった。

しかしどうしたら良いか分からない。何せ相手は、吸っていた物から判断するに、きっと非行少女である。警察を呼びに行くのが良いか、それとも今すぐに謝った方が良いのか。

狗子はシンゴを睨み付ける。

「知らないお姉ちゃんのお乳に、不意を突いて顔を埋めるとは……ガキの分際で随分と大胆だな。その年で痴漢行為か。幼稚園でもそういう事してるのか？ あん？」

シンゴの腕を掴んだまま、ゆらりと体を起こす。

シンゴは既に半泣きである。いや完全に泣いている。それほど、目の前のお姉ちゃんの形相は威圧的だった。

「う……」

「謝って済むかア！」

喋る隙すら与えられない。

怒鳴られ、びくと痙攣した少年に、閻魔の如く座した狗子は機関銃のように言葉を浴びせる。

「お前がもし四十を過ぎた会社勤めしているオジさんで、あたしがその部下である若いOLとかだったら、お前、下手すりゃ会社追われるかも知れんのだぞ！ そしたら家族はどうなっちまうんだ！」

「う……ごめつ……ごめんな……さあい……」

シンゴは涙と鼻水をだらだらと流して、必死に謝る。

「ええーい、やかましい！」

「う、うわあっ！」

襟首を掴まれたシンゴは片手で軽々と持ち上げられ、

とすん、と、狗子の右膝に乗せられた。太腿にまたがって向

かい合う形である。

狗子は指をぽきぽきと鳴らす。

「ふふん、目には目をだ、あたしもお前に淫行してやる。ほらパンツ脱げパンツ！」

「や、やめてよおっ！」

「こら暴れるな、せつかく気持ちよくしてやるうというのに」

「い、いいよ！ はなして たすけてママあー！」

「この不良、シンゴをはなせえっ！」

横から、勇気を振り絞ったケイちゃんが加勢する。

悪い不良はにんまりと笑う。

「何だい、友達を返して欲しいのか？」

「し、シンゴかえせよお！」

「駄目だ」狗子は首を横に振る。「これからあたしは、シンゴを連れて帰って、色々エッチなことしてから焼いて食べちゃうんだ」

「ええっ！」

「や、やだーっ！ やめろーっ！」

ケイちゃんは驚きのあまり絶句し、抱えられたシンゴは悲鳴を上げる。

無理もあるまい。なにせ生命の危機である。

「そして残った骨は、飼ってる人面犬にあげちゃうのさ……へへへ、怖いだろう」

「こわいいいいっ！ ママ、ママあーっ！」

「オニババ不良、シンゴをかえせ！」

「放さないもーん。食べちゃうもーん。それ あむっ  
ぱくり。」

「うわーん！ やだーっ！」

耳たぶを唇で軽くはさまれ、シンゴは泣き叫ぶ。

母親たちは、しばらく呆然とその光景を見ていたが、やがて、二人同時に吹き出した。

シンゴを小脇に抱えて逃げ回る狗子を、必死になって追い掛けるケ



イちゃん。

繰り広げられる光景に悪意の色は無かった。

それどころか、遠目に見ればまるで人形劇のようで、そこまでの経過がどうでも良くなるほど滑稽なシーンだったのだ。

鬼婆と少年たちの壮絶な戦いは数十分も続き、いつしかそれは、二対一の、終わらないプロレスになっていた。

「…………ふう………… お前らタフだねえ」

額に少し汗をうかべた狗子は、元々座っていたベンチに、再びどっかりと腰を下ろす。プロレスは狗子のギブアップ負けだった。

「お姉ちゃん疲れちゃったよ。ちよっと一本吸わせておくれ」

スリムなジーンズなのに、後ろのポケットから、すんなりと、セブンスターが出てきた。どこまで無駄のない体型なのか。

「オニババ不良、タバコすうの？」とシンゴ。

「ああ」

「不良だから？」

「ん…………。そうなのかな」

しゅぼ、と火をつける。煙草をくわえた口元が、一瞬だけ笑った。

「でも、おれのお母さんが、タバコすうと、バカになるっていつてた」

ケイちゃんが言うと、シンゴも肯く。

「おれもしってる。バカになるんだよ」

「へえ」

ゆったりと、実にゆったりと白煙を吐く。今度は少し美味そうである。

ケイちゃんは心配そうに、狗子の綺麗な顔を見上げる。

「オニババ不良、いまよりバカになっちゃうよ？」

狗子はそれを聞いて、少し「えっ？」という顔をした後　すぐに笑った。

「何だ、心配してくれるのかい？　優しいねえケイちゃんは。でも

良いんだよ、人間は馬鹿な方がいいんだから」

「バカな方がいいの？　なんで？」

ケイちゃんは意外そうな顔をする。

狗子は言った。

「利口より響きが良いじゃないか」

バカの方がファンキーだろ。言いやすいし愛がある。

ほとんど独り言のように呟きながら、狗子は空に向けて煙を吐き出した。

理解できず二人は顔を見合わせる。

狗子は付け加える。

「お前ら、今のを理解したら人としてお終いだから、気を付けるよ」

「うん、わかった」

「おれもわかった」

シンゴとケイちゃんは取り敢えず肯いた。

同時に向こうで、ベンチから立ち上がった母親たちが、二人の名を呼んで手招きした。

狗子にはこりともせず、いい加減に顎で指図する。

「ほらママたちが呼んでるぞ。調度良い。早く帰れジャリども、しつ、しつ」

「ちえ、行こうぜケイちゃん」

「う、うん……」

しかしケイちゃんはなぜか、帰るのを躊躇っていた。友人の姿はもう大分遠ざかったというのに、まだ何か物言いたげに、ちらちらと狗子を見ている。

それに気付き、狗子は、くすりと微笑んだ。

そして「おいで」とケイちゃんをベンチまで招き寄せ、彼の頬にそつと口付けした。一瞬のことで、出入り口にいる三人のうち誰も、それを見ていなかった。

呆然と赤面するケイちゃんに、狗子は「二人だけの秘密だぞ」と

耳打ちしてから、その頭をぐりぐりと撫でた。

「じゃあな」

「じゃ……」我に返ったケイちゃんは、顔を赤くしたまま、後ろ向きに走りだした。「じゃあね！ またねオニババ不良！」

「おう」

「またね！ また来てね！」

「はいはい、またね」

苦笑しながら手を振り、狗子は少年を見送る。

子供たちは帰っていった。

暇になった狗子は暫し安心してだったが、やがて煙を吐くとともに、乾いた前髪をかき上げた。

そして、公園内に足を踏み入れた一人の男に、冷やかな眼差しを向ける。先ほど子供たちを見ていた目とは明らかに違つ、敵意のこもった視線である。鞍馬山狗子のこんな目を、日野台高等学校に通う生徒は、一度として、一人として見たことはあるまい。

鳩たちが頸を絞められたような鳴き声を上げて、一羽残らず飛び立つと、灰色の羽がひとひら、くるくると舞い 地面に落ちた。

視線を受けながら、男はまっすぐに、狗子の座るベンチへと近づいてくる。

狗子は男が立ち止まる前に、唸るように呟いた。

「……何をしに来た……森田？」

男は、四メートルほど離れたところで、歩みを止める。羽が爪先で踏みにじられた。男はそれを意識しない。

「これは凄まじい敵意だ。肌が痛いほどですよ」

口に手を当てて笑う。

「本当に相変わらずですね、狗子さん。六年前 僕が何をしたわけでもないというのに」

若い男である。見た目から判断するに、年は三十になるかならないか、といったところだ。不健康そうに痩せていて、熱いのに、く

そ真面目にネクタイをしめている。

しかしそれとはやや対照的に、表情は良い意味でルーズで、そこに思考の柔軟性が滲み出ているようだ。

銀縁の眼鏡を中指で、す、と上げる。

「貴女は相変わらず、本性を知る人間に対して見境無く牙を剥く。もつとも保護者の黒場さんは例外ですか？」

「挑発しに来たのか」

「とんでもない。ああ勿論スカウトでもありませんよ。いずれ正式に伺うつもりではありますがね」

「今更あたしみたいなものをどう使うつもりだ？ あの時結局持て余したくせに」

「持て余したわけではありません。当時は上があなたを危険物として認識していなかっただけです。ただ、最近では少し事情が変わってきましたね。あなたを現実的に欲している部署もあるんですよ」

「もういい、さっさと要件を言え」

狗子は手刀をつくり、切っ先を森田に向ける。

「お前の御託を聞いているとそれだけで頭が熱くなってきそうだし再び、沈黙。」

森田はゆっくりと頷く。

「分かりました」

ハンカチを取り出して額の汗を拭く。

「今日は、お知らせを持ってきました。少しでも刺激になればと思いでいます」

「報告？」

狗子は手を下ろす。

森田は頷く。

「そうですね、規模を見れば大した事件では無さそうなのですが、少々奇妙な点があるのと、何より貴女と近い人間の死なので、詳しく調べさせてもらいました」

「能書きはいい。誰が死んだ」

「神崎和也くんをご存じですか」

「どこで」

「渡瀬恵依子宅 付近です」

「どうして」

「漠然とした問いですね。僕は生憎、貴女ほどは賢くない。したがって察しも悪いわけで」

「何が原因で死んだ？」

「交通……事故死。即死でした」

森田は嫌味っぽく笑う。

「興味がわきましたか」

狗子は「ふん」と鼻をならす。

「ただの事故なら貴様らが勝手に片づける。いや……出るまでもない、か」

「言つたでしょう。貴女と近いところでの事件だから、そして奇妙な点があるから調べたと……狗子さん、また回転が遅くなっていますよ。必要な情報確認が済んでいないのに言動を決定するなど、まるで並の人間です。見るにたえません」

「一々五月蠅いな。今のあたしはこれでいい」

「奇妙な点というのは」森田は勝手に続ける。「事故発生時の状況です。彼が渡瀬恵依子宅の付近にいた理由はいくらか想像が付きますし、一般生徒から確認も取りました」

「二人は秘かに交際していた。……仕事が早いな」

「そして、そこにいた細かい理由は、この際重要ではありません」

「早く言え。重複が多い」

「彼をはねた男ですが、ええ」

森田はまた眼鏡をなおす。

「二十六歳自営業、今までにスピード違反が一回と駐車違反が一回、しかし元暴走族で運転技術はまあまあです。アルコールも入っていませんでした。彼は神崎少年をはねてから怖くなり、小一時間ほど車を走らせていたそうですが、良心からでしょうか、すぐに出頭し

てくれました」

「それで」

「彼の証言が妙なんです。曰く『大雨で視界が悪かったから断言は出来ないが、少年は電柱の影から飛び出したように見えた』んだそうです。そして自分は『はねた瞬間、混乱して目の前が真っ赤になり、怖くなつて』……『逃げた』と」

「自殺」

「そうですね、他の人影は確認されなかったようですから。現場にいたのは彼一人です」

「何か理由でも？」

「同じ学校に通っている貴女の方が詳しいのでは？」

「人間は見るだけだ。一々調べない」

「無意味な発言ですね。人間的で嘆かわしい」

「あたしは人間だ！」

狗子は突然、泣くように怒鳴った。

その反応を見て森田は笑う。

「本当に感情的だ。よくそこまでリアルな人格を造り上げることが出来たものです。六年前、初めて会ったときの貴女からは想像も出来ない。しかしそうまでする理由は何です？ 親しみやすい人間になつて 殿山礼司くんでしたか、あのクラスメートに好かれようとしても？ まさかね、貴女と彼では、生まれながらにして持っている価値が違いすぎる。それくらい貴女にも分かっているはずです。彼と親しくすることなど……貴女にとつて、所詮、人であることを確認するための手段でしかない。まさか本気で恋愛感情などを抱いているわけではないでしょう？」

狗子は唇を噛んで答えない。

なおも森田は続ける。

「知り合つてからよく彼を部屋へ呼んでいるようですが、黒場勝美さんも、貴女が本来の人格を抹殺し、仮初の人生を送ることを応援しているのですか？ 僕には理解できませんね」

森田はベンチに座って俯く狗子を見下ろす。

「それにしても、彼が貴女の本質を知ったとき、それでもまだ、まともに口をきいてくれるでしょうか？ ……彼と本当に親しくなりたいのなら、試しに全て話してみたらどうです。そういうのが本当の繋がりなのでしょう？ 包み隠さず彼に教えて上げればいいじゃないですか。貴女が本当はどんな人なのか。どんなことをする人なのか。いずれ分かってしまう事ですしね、ならば早い方が良い。何なら僕から伝えてあげますよ」

狗子は両手で頭を抱えた。

綺麗な顔が、恐れに歪む。

「やめてくれ……」

髪を掻きむしる。

「どうしてそんなに追いつめるんだよ……っ！」

「刺激しているだけですよ」

涼やかに答える。

風が吹いた。

森田は続ける。

「話を戻しましょう。彼が自殺したとすれば、その理由が存在する可能性は高い。それについて、一応、渡瀬恵依子に話を聞きました」

狗子は顔を上げる。

「恵依子に？」

「そうです。意外に精神状態は安定していました、口数は少ないものの、ちゃんと受け答えをしてくれました。表面的にはね」

「……何か」

「はい。内容がかなり奇妙でした」

森田は少し間をおいてから、言った。

「彼女は昨日、『父親と帰った』というのです」

「父親と帰った、って……？」狗子は眉をひそめる。「そこで父親が出てくるのか？ ……つまり……彼氏と自分と、三人で帰った……」

「そうなります。鵜呑みにすればそうなるはずなんです。雨が降り出したので、父親は駅まで歩いて行き、二人分の傘を持って娘の帰りを待っていた。そこで親子は合流し、一緒に帰宅したという話です」

「神崎はどうなる。駅で彼女の父親と鉢合わせして 死んだときは一人だったんだろう。途中まで三人で歩いて、中途半端なところで別れ、それから神崎は、死んだ……。それは……」まつ毛の長い両目が瞬く。「つまり三人は仲良く帰っていたが、途中、父親と神崎は口論をして別れた……そして口論の内容に自殺の原因がある……？」

「それが一番簡単なんですけど、困ったことに、渡瀬恵依子はさらにこう証言したんです」

森田は人差し指の先を泳がせる。

「……『神崎くんは家までついてきた』と」

「死んだのはその帰りか」

「そういうわけでも無いらしいのですよ。まあ聞いて下さい。続けて彼女はこう言っています。『私たちは二人だけで帰った』」

「何だそれは……いや そうか、『ついてきた』んだから、神崎は、二人で帰る親子の後を、勝手につけてきたのか」

「そう思いますよね。まるで謎かけのようだが、辻褄はそれで合う。だからそうなのかと訊いたんですよ」

「違う、のか？」

「違うらしいんです。極めつけに彼女はこう答えました。『一緒に帰ったのは神崎くんだけ』『それ以上は言えない』……。分かりますか？」

「それは……」

狗子は深く俯き、しかしすぐに顔を上げて、答える。



「矛盾……だ」

「矛盾です。父親と帰り、しかし父親と帰っていないというわけですから、見事な矛盾です」

父親と帰った。

神崎は家までついてきた。

二人だけで帰った。

一緒に帰ったのは神崎だけ。

……それ以上は言えない。

狗子は声にせず、唇でそれらの言葉を復唱した。

「これらが何を意味しているのかは分かりませんが」森田は笑みを浮かべる。「参考のために、その他の情報を伝えておきましょうか。

渡瀬恵依子の父親、渡瀬清一郎が駅で待つていたという証言ですが、九分九厘事実だと思われます。近所では、娘思いなことでも有名な父親でして、少し過保護すぎるのではないかと噂する主婦なども多いようです……雨が降ったり帰りが遅くなる度に、しよつちゆう駅で娘を待っている姿を、何人もの知り合いが見ているそうですよ。勿論、娘が折り畳み傘を持っていても同じでしょう」

「父親が過保護」

「彼は妻と離婚しています。それはご存じですか」

「知ってる」

「そのため唯一の家族となった娘を必要以上に大切にしていることは、そう不自然でもないでしょうね」

「……分かってる」

やや唐突に、狗子の口調に苛立ちが混じり始めた。会話の脈絡

とは無関係に、それは、眼前にいる男と多くの言葉を交わして、自我が少しずつ過去に立ち戻ってしまうことを恐れているからなのかも知れない。

森田は不敵に微笑み、きびすを返して、「また来ます」と言い残し、その場を立ち去った。

狗子は舌打ちする。知人の死を知らされても全く動揺しなかった

自分に気付いたからだった。

確かに、刺激には なったようだ。

3

月曜日、終業式の中で、全校生徒は神崎のために黙祷した。

生徒で埋め尽くされているにも関わらず、これ以上ないほど、しんと静まり返った校庭である。

列の一番後ろに立つ俺は、六十秒間続く沈黙の間も目を開けており、皆の表情を秘かに観察していた。……傍目から見れば罰当たりな感じがするだろうが、俺は元々仏壇のロウソクを鼻息で消すほど信仰心のない人間だから、どうしてもこういう瞬間、真面目な気持ちになれないのだ。どこか滑稽だと思ってしまう。

まあどうせ皆その程度の気持ちでいるだろう、と、そう思っていた。しかし意外なことに、俺みたいに不謹慎な奴はごく少数だったというより、目を開けているのは俺くらいで、いつも騒がしい友人らも、冗談ばかり言う先生も、皆目を閉じ、下を向いていた。

肩を震わせている女子がいる。彼女は、もしかしたら神崎のことを好きだったのかも知れない。尋常な悲しみ方ではないのが、後ろ向きにもよく分かる。

見回すと、そういう子は、中、高等部問わず大勢いる。

なるほど、渡瀬と付き合っていることが分かれば、かなり大勢の女生徒がショックを受けたかも知れないわけで、そうなれば、鞍馬山が言うように面倒なイザコザも起きたらう。俺は何だか変に納得した。

後ろで声がする。

振り返ると、鞍馬山の場違いなヘラヘラ笑いが目に入った。

鞍馬山は当たり前のように私服だった。右手に煙草、左手に烏龍茶の缶を持ち、気弱そうな若い女の先生に絡んでいる。

「ねえ、先生いつも地味な服着てるよね。あたしも人のこと言えな

いけど」

「く……鞍馬山さん、今は黙祷中ですから」

「化粧も地味だしね。 やっぱり教師って派手な格好すると、色々五月蠅いと言われるの？ うちの三十路も言ってたよ。 あいつも私立中の講師やってさ」

「鞍馬山さん……ほ、ほんとに……」

今は黙祷中だというのに何という いや、そもそも、どうしてあいつは、生徒の列からあんなに外れているのだろう。

目を開けて下さい と校長が言う。

少しずつ、この場に『音』が戻ってきた。

朝礼台に生活指導主任が上り、悔やみを一言述べてから、夏休みの生活態度について説教を始めた。神崎の話は終わりである。

そうなると切換はスピーデイで、どいつもこいつも一度に騒ぎ出した。皆、明日から夏休みであることを思い出したらしい。説教の声はここまで聞こえてこない。

「礼司」

気付くと鞍馬山は右隣にいた。

「……何だよ」

「やっぱり二人、付き合ってたみたいだね」

神崎と渡瀬のことだ。

それなら俺もテレビで確認した。

そう言つと、鞍馬山は感心したような顔をした。

「テレビで。へえ、気付いてる奴も中にはいたんだ」

？ ああそうか。報道されるといふことは、テレビ局の人間が、おそらく日野台高校の生徒に、電話か何かで話を聞いたからだ。つまり校内の誰か 多分複数人数が 神崎と渡瀬の関係に、以前から気付いていたということである。鞍馬山はそのことを言ったのだ。

鞍馬山の言葉は時々、今みたいに飛躍する。

ふと思いつき、俺は声をひそめた。

「こつ言っちゃ何だけだよ……テレビ番組ってのは、たかだか自殺くらいで、そいつの交友関係まで突っ込んで調べるもんなのか？ 秘密で付き合ってた相手とか、そんなことが分かるくらい」

鞍馬山は煙を吐きながら、軽く肩をすくめる。

「どうだろ。このケースは少し特殊だからね」

「特殊？」

「事故にしても自殺にしても不自然だから、番組を面白おかしくできる。題材としちゃあそこそこだ」

「ああ」

なるほど。昨日から続く、どこかふわふわとした現実味の無さがあったが、正体はその曖昧か。

神崎に自殺する理由はない。かといって事故にしては不自然な状況 だが現場に神崎以外の姿は無かったという。物理的に有り得ない現象が起きたわけではないのに、どこか腑に落ちない。変な話、俺は今、神崎が死んだ場面も想像できないのである。

それから鞍馬山は妙なことを言った。

渡瀬が昨日警察に話したという、矛盾した言葉の群であった。

父親と帰った。神崎は家まで付いてきた。二人だけで帰った。一緒に帰ったのは神崎だけ。

どういうことなのか俺には皆目分からない。

「多分、彼氏が死んで、精神的に参ってるんだろうな」  
俺は何も考えずにそう言った。

それより、どうして鞍馬山がそんな話を知っているのが不思議である。

訊くと鞍馬山は嫌な顔をして、

「知り合いに警察関係の人間がいるんだ」と答えた。

そして、煙草を、持っていた缶にぱいと入れる。缶はほとんど空っぽだったようだ。

少し首を傾げて、親指で下唇を撫でる。

いつも観察しているわけではないが、初めて見る仕草である。考え事でもしているのだろうか。

俺は、いつの間にか鞍馬山の横顔を見つめていたことに気が付き、なんとなく目をそらした。

「渡瀬はやっぱり休んだな」

学校には体調が悪いと電話したらしいが、本当のところは、恐らく彼氏が死んでショックを受けたか、逆恨みを恐れたかのどちらかだろう。俺は泣いている女子たちの後頭部を見ながら考える。

鞍馬山の返事は曖昧なものだった。

「うん」

まだ何か考えているようだ。小さな声で呟いているようにも見える。じっと地面を睨み

不意に、こめかみを押さえる。

「っ！」

前触れもなく、ぐらりと揺れる。

「お、おい、平気か？」

俺はバランスを崩した鞍馬山の体を受け止め、顔をのぞき込んだ。

どきりとした。別に、思わず抱いた肩が、手のひらに収まるほど華奢だったからではない。綺麗な顔も少しは見慣れている。

ただ、ただ、眼が。

「お前、それ？」

俺は、寄りかかる鞍馬山の肩を抱えたまま硬直した。

我に返り、鞍馬山はその眼を見開いた。

「え？ あっ、やだっ！」

どん、と俺は突き飛ばされた。

空き缶が土に落ちて転がる。

鞍馬山は顔の上半分を手で掴むように押さえ、また少し、よろけた。

「見ないで」

二歩ほど後退し、その場へたりとしゃがみ込む。

「お、おい」

俺は周囲を見回す。

何人かが、何があったのかと振り返り、こちらを見ている。

恥ずかしいのと心配なので、俺はともかく、頭を抱えてうずくまる鞍馬山の肩を揺すった。

「頭が痛いのか？ ……なあ、何とか言えよ」

唐突な出来事に戸惑う俺の混乱した頭の中を、疑問がぐるぐると回る。

今見えた、眼は？

黒いはずの瞳が、透き通った赤い色に変わっていた。

充血していたのか。

いや、それなら白目が赤くなるだろうし、何より 充血していただけならば、あんなに瞳は縮まるまい。しかも、ただ瞳孔が収縮したのではない。中心部分が、ひとすじの細い糸のように……あれはまるで猫だ。

そう、透明で赤い、猫の瞳である。

返事は蚊の鳴くような声だった。

「何でもない……」

顔を上げようともしない。

周囲がざわめく。ごつい体育科の教員も、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

俺は本当に心配になってきた。

「どうしたんだよ、そんな、女みたいな声だして」

返答はない。いつもならば、あたしはれっきとした女だぞ、と間髪入れずやり返してくるのに。

熱中症というやつだろうか。あれは時として死にも至ると聞いた。今日はそんなに暑くないのだが、どうなのだろう。

「何だ一体」

体育科の斉藤が、うづくまる鞍馬山の横に立つ。

「おい鞍馬山、気分が悪いのか？ ちよっと 田辺先生」

呼ばれて、ひよる長い体格の担任も駆け寄る。

「何かありましたか……あれえ」

気の抜けたような声で、鞍馬山を見て驚く。

思っていることは分かる。鬼の霍乱だと言いたいのだろう。

斉藤は俺に訊いた。

「いきなりこうなったのか」

「ああ、いえ、まあ」

何と説明したものが。

担任が唸る。

「ともかく保健室だな。殿山、連れて行ってやりなさい」

「俺が？ いや 別にいいですけど」

保険委員でも何でもないが、親友と思われているから仕方あるまい。

しゃがんで鞍馬山に声をかける。

「立てるか」

「……いい……」

「いい、つて言われてもな」俺は頭をかく。「取り敢えず、日の当

たらない所に行こうぜ、な？」

腕を掴むと、振り払われた。

「あのな」

「見ないで」

眼のことが。

あれは見てはいけないものだったのか。

俺の見間違いでは。

「別に」

わけが分からないが、ともかく。

「別に俺、何も見てないから。とにかく立てよ」

また細い腕に手をかけ、やや強引に引き上げた。

すると、驚くほど簡単に、鞍馬山狗子の体は持ち上がった。

同時に両目が見えた。

生気を失った瞳は、元通り、黒かった。

「あれ」

やはり見間違いか。

鞍馬山はよろけながらも一人の足で立った。

先生たちやクラスメートが注目している。

「あ、歩けるのか？」

俺はなぜか怯えながら声をかける。

返答はなかった。

代わりに「……一人で行く……」と言い残し、俺には一瞥もくれずに、鞍馬山はとぼとぼと新校舎の方へ歩いていった。

呆然と見送る俺の肩を、デブの稲森 昨日電話をかけてきた奴である が、つつく。

「なあ、付き添わねーのかよ？」

「ああ」安心していただけとは言えない。「一人で行くって言ってたし」

「なんだ、夫婦喧嘩か」

「あんな」

こういった冷やかしは不滅のものか。

しかし。

冷静に考えれば、鞍馬山が眼を気にしていた以上、気のせいではあるまい。あの眼球は明らかに普段と違っていた。何か特殊な眼病だろうか。

だが、ただの病気ならば、どうしてあんなに見られるのを拒んだのか？ それに頭を押さえていたのは。

このケースは少し特殊だからね。

唐突に、さつき鞍馬山が発した言葉が、よみがえる。

聞き流していたが、今回のケース、というのは妙な言い方だ。まるでいくつもの事件に触れてきたような口調ではないか。

渡瀬と同じだ。



結局俺は、あいつのことを何も知らないのかもしれない。  
そう思った瞬間、友人が一人もいなくなったような錯覚に陥り、  
また、ひどい寂しさを感じた。

4

保健室へ行く気はなかった。

中庭の、日陰に位置しているベンチに体を横たえ、狗子は目を閉じた。

やかましい蝉の声は耳に届いていない。

とても不安である。

やはり礼司は変に思ったのだろうか、と考える。

当然だ。あの時、多分、狗子の瞳は赤く染まり、中心部分は猫科動物のそれと同じく、異常に収縮していたに違いない。六年前と同じである。……もつとも、森田たちから話を聞いただけで、鏡に映して見たことがあるわけではないが。

直後に礼司が見せた反応から察するに、もう元に戻っているのだろうが、そういう状態になったのは、実に六年ぶりである。そして六年前が初めてだった。

しかし、なぜだろう。

今回は前触れがなかった。ショックを受けたわけでも、思考が極限まで加速したわけでもない。突然、頭が割れるように痛くなりそして、記憶は途切れた。

ほんの一瞬だった。

揺らいだ、という感じであった。

もしかして前触れはあったのかも知れない。

表面に出ている自我が認めようとしないうち、もしくは拒絶している隠された事実を、おそらく狗子は、自分でも気付かぬ深いところから突き止めたのだろう。与えられている、ごくわずかな情報の中から。そして、はつきりと認識してしまう前に、反射的に押さえ込んだ。

その事実が危険なものだからだ。多分、過去に立ち戻る、強烈なきっかけになってしまふ。押さえ込んだのは表面にいる自分か。

狗子は目を開け、自らの細い首に、そっと触れる。

消えてはいない。封じ込めた自分は、まだここに息づいている。

血も涙もない、ただ完璧なまでに精密な機械人形。

そして、その奥には

狗子は震えた。

仰向けのまま、自分の両手を空にかざす。

べつとりと……血にまみれた両手だ。周囲に炎が広がる。車庫に響

く悲鳴。赤い飛沫。生温い感触。絶叫。断末魔。哀願。

かすかに残る感触は、本当に自分の記憶なのだろうか。

認めたくない。強く唇を噛む。

狗子は出来る限り他のことは考えず、ただ、数分前に聞いた殿山礼司の声だけを、繰り返し思い出していた。

「礼司」

小さく名を呼んだ。

5

終業式に続いてロングホームルームも終わった。

俺のクラスは他より少し解散が遅くなったが、それでも十分以上は遅れず、俺達はそれぞれロッカーの中にあつた物をカバンに詰め込んで、少し周りの奴らと喋ってから教室を出た。

稲森と俺は購買部に寄つて課題用のレポート用紙を購入し、さらにパンを買い、それを食いながらダラダラしていたせいで、さらに二十分ほど遅くなった。

いよいよ帰ろうとすると、鞍馬山が、誰もいない昇降口で、ぼつ

んと一人、待っていた。

そして俺を見て、なぜか安心したような顔をした。

「 礼司……」

寄りかかっていた壁から背中を離す。

「何お前、もう平気なの」

と、一緒に階段を下りてきた稲森が俺の代わりに訊いた。

鞍馬山は、まあね、と疲れた顔で笑った。

それから俺の方に向き直った。

「ねえ礼司 今、ちよつと時間あるかな」

「どうしてだよ」

「二人だけでさ、話したいことが……あるんだけど」

珍しく真剣な顔だった。

稲森はにんまりと笑い、黙ってその場から消えた。何か勘違いをしたようだ。そのうち、きつとまことしやかな噂が流れ、また俺を苦しめることだろう。

俺は憂鬱になったが取り敢えず肯いた。

「分かったけど、何の用だ？」

その気はなかったのだが、やや口調が邪険になったかも知れない。

鞍馬山は物言いたげに俯き、そのまま黙ってしまった。

教室に残っていた奴らが五人ほど、わらわらと階段を下りてきた。全員男子だから、廊下でラインサッカーでもしていたのだろうと想像できる。

そいつらが鞍馬山の姿を見つけて声をかける。

「あ、鞍馬山じゃねーか？ どうしてさっきいなくなったんだ？」

「病気か？」

「みんな結構心配してたぞ」

鞍馬山は、

「 へへ」

と笑顔になった。

「平気平気、ただの頭痛だから」

「本当か？」

「体は大事にしるよ」

言いながらクラスメート達はさっさと靴を履き替え、俺達に「また休み明けにな」と別れを告げて、昇降口を出ていった。

二人だけになると、鞍馬山はまた口をつぐんでしまった。

ともかく場所を変えることにした。中庭ならば静かだし、仮に誰かいたとしても、キャッチボールをしている中学生くらいだろう。

そう考えて中庭へ行くと、都合良く誰もいなかった。

鞍馬山は黙って、いつものベンチに腰を下ろした。

俺は少し迷ってから、隣に腰掛ける。

遠くから野球部員らしい怒鳴り声が聞こえてくる。練習開始はまだから、あれは上級生が下級生を叱っている声だろう。何かへマでもした奴がいるのだろうか。

中庭の中心にあるイチヨウをぼんやりと見つめながら、鞍馬山はようやく口を開いた。

「さっきは……悪かったね。せつかく心配してくれたのに……」  
校庭でのことだ。

「別にどうでもいいよ」

それより、そんなことを一々気にする鞍馬山が問題だ。普段の傍若無人な立ち振る舞いに比べると、これは明らかに異常である。調子が狂って、どう会話すればいいのか分からない。

こんな風になった理由は、やはり

鞍馬山は言った。

「礼司、さっき見たんだろう？ あたしの『眼』……」

赤い、猫の眼 か。

俺は肯いた。

「まあ……ちらつとな」

「もう誰かに言ったかい？」

「いや、誰にも」

俺はわざと明るく言った。そうした方が良いと思ったからだ。

鞍馬山は少し間をおいてから、

「あれが何なのか、知りたいだろ？」

と訊いてきた。

教えたくはないのだろう。それくらい、俺にも分かる。

だが多分、俺が訊けば、こいつは答える気にいる。

俺はかなり長い間考えて、やっと返す言葉を探し当てた。

「お前、それ教えたくてウズウズしてるのか」

鞍馬山は首を横に振った。

俺は肯く。

「そっか。じゃあ訊きたくねえや」

正直、何が何だか全然分からないが、所詮、俺が「知りたい」と思う気持ちは好奇心でしかない。それに違いはないのだ。そんなもののせいで鞍馬山が苦痛を感じるなら、好奇心など押し込めてしまおう方がいいだろう。

言い訳をするように鞍馬山は言う。

「礼司にはいつか……いつか教えるから、だから」

「あー、分かった分かった」ぱんぱんと手を叩く。「分かったから、もうこの話は終わり、な」

俺は最後まで脳天気な調子を崩さなかった。

鞍馬山は やつと、微笑んだ。

「ありがとう礼司」

こいつにちゃんと礼など言われるのは初めてである。恥ずかしいような気分になったが、何にせよ普段の調子は戻ったようなので、俺は取り敢えず安心した。

沈黙があった。

俺はイチヨウの木をながめながら、かゆくもない頭をぼりぼりとかく。

「じゃあ 帰るか。どっかで飯食って……」

横目で隣を見る。

目が合った。

「…………へへ」

鞍馬山は照れた顔で笑う。

俺は仰け反る。

「気持ち悪いな、何だよ」

「良かった」

「は？」

「あの時」

ゆつくりとこちらに腰をずらし、

「隣にいたのが礼司で、本当に良かった…………」

鞍馬山は、俺の左肩にしなだれた。

俺は、どきり、と硬直した。

触れあっているところから体温が染み込むように伝わり、シャンプーと、かすかな汗の匂いが鼻腔に入り込んでくる。

一体どういいうつもりだろう。いつもじゃれついてくるのとは雰囲気が違う。

本当に 何のつもりか。

鞍馬山はぼつりと呟く。

「礼司」

「な、何？ うわ」

鞍馬山は俺の左腕に自分の両腕を絡ませ、強引に引いた。

そして俺の手を、黒いハーフパンツをはいた太ももが、ぐいと挟み込む。俺はやわらかく肉感的な感触に卒倒しそうになった。

恐る恐る顔を左に向けると、鞍馬山は、潤んだ目で俺を見ていた。

「礼司、お願いがあるんだけどさ」

「え」

これはまさか

続きは小さな声だった。

「キス…………一度だけ、いいだろ？」

「え、」

「唇と唇、軽く触れるだけでいいよ。誰も見てないから」  
「え、えと」

俺が戸惑っていると、鞍馬山は目を背け、無表情で訊いてきた。

「嫌かい」

「そ、そうじゃねえけど」

そうじゃないが　　どうなのだろう。……確かにただの友達とは思っていない。何だかんだで俺はこいつを女として見ているし、正直……今更な話だが、すごく可愛いと思う。性格だって、問題だらけだが、決して嫌いではない。むしろ好きだと言える。そうでなければ三年間も仲良くは出来ない。だが、何と言うべきか、簡単に手を出してはいけないような、そんな気がするのだ。それはなぜなのかと考えると　　ああ、手を挟んでいる太ももの感触が、俺の思考を揺るがしている。

俺が情けなく困惑していると、鞍馬山は寂しそうに言った。

「……なんか、ごめんよ……調子に乗りすぎた。悪かったね、困らせて」

絡んでいた腕がほどける。

「今のは忘れていいよ。じゃあ」

「ちよ、ちよっと待った！」

俺は思わず、ベンチから立ち上がるうとした鞍馬山の腕を掴んだ。

だが鞍馬山の力はやはり俺よりも強く、俺は逆に引っ張られる形になって、バランスを崩し、鞍馬山の上に倒れ込んでしまった。

「わっ　と」

ぎりぎり、下になった鞍馬山の、顔の横に手をつく。

顔と顔は二十センチまで近づいていた。

鞍馬山は驚いた目で、じっと俺を見つめる。

「礼司？」

「め、目ェ閉じろ」

口が勝手に動いていた。

鞍馬山は黙って目を閉じた。

選択肢が一つしかなくなってしまった。

こうなればどうにでもなれた。

俺は覚悟を決め、その無防備な唇を

「せ、先輩たち何をしてるんですか！」

寸止め。ベンチから転げ落ちた。

後頭部を軽く打ち付けて視界が揺らぐ。

我に返り、青空の次に見たのは、ぽかんとした顔でベンチに倒れた鞍馬山と、そのベンチの前に立つ、見たこともない女子中学生の姿だった。

俺より小柄なその中学生は、地べたに転がった俺を、震える指でさしていた。

「い、狗子先輩、この冴えない男は誰ですか？もしかして彼氏？こんな人が ううん、そんなはずは無いわ。だってこんなに地味なんですもの。天才で美人でスタイル抜群でスポーツ万能でとにかく格好いい狗子先輩には、全然釣り合わない！触れる資格もないわ」

俺のことか？ひどい言われようだ。

「きつとこの男、無理矢理先輩を押し倒そうとしたのね、そうに決まってる。モテないからって、よりにもよって私たちの狗子先輩を犯そうとするなんて 先輩、怖かったですよ？ 私が来て良かったわ。早くシャワーを浴びて体を洗い流さないよ」

誰が武道有段者で国定特別奨学生の女を襲うものか。そう思ったが、何だか反論する気も起きない。俺はとにかく体を起こす。

鞍馬山は、珍しく、やや赤面して「はは……」ときこちなく笑っ

ている。「えー……と、君は、中等部二年の」

「米倉紀子です、先輩」

「うん、そうだった、紀子ちゃんだ。前に何度か、一緒に写真を撮



「たっけね」

「憶えていてくださっただんですか？　嬉しい！　写真なら、ほら、今もここに」

「いやあ、出さなくていいよ。嬉しいけど」

「そうですね……。そんなことより先輩！　先生に　いえ警察です！　これは婦女暴行ですよ！　早く突き出さないと！」

いつの間にか完全な変態にされてしまった。

俺は小さく横から口を出す。

「あのな」

「痴漢は黙ってなさい！」

「はい」

問答無用である。

鞍馬山はぼりぼりと耳の後ろをかく。

「……………うむ……………」

ちら、と俺を見て、そんなに地味かなあ、まあ格好良くはないわなあ　とぼやく。

そう二人がかりで重ね重ね地味と言われては、今更とはいえさすがに傷つくが、かといって何か言い返せるわけでもなく……………俺は、しよげた。

鞍馬山は「さっきのが双方合意の上だったと言っても信じないだろうけど……………一応、この地味な男はあたしの親しい知り合いで、強姦魔ではないよ。だから皆には内緒にしておいてくれるかい」と、よく考えれば不条理なことを、さも道理らしい口調で米倉紀子に説いた。

それで相手が「はい」と肯くのだから大したものである。

その時、ふと　鞍馬山は米倉紀子のスカートに目を落とす。

「ねえ紀子ちゃん……………もしや、何か大切なことを忘れてやしないかい？」

「はい？」

「自転車置き場で何かあったようだけど」

「え」

「ほら、」米倉紀子のスカートを指さす。「そこに小さな葉っぱが付いてる。あたしはあまりそういう分野に明るくないから何て植物だか知らないけれど、学校の敷地内でそれが植えられているのは自転車置き場の入り口だけだ、ってことは知ってる。それに、さっきここへ来たときから息が切れてた。急ぎの用事じゃあないの？」

「そ、そうでした！」

米倉紀子はいきなり、我に返ったように慌てだした。

「渡瀬先輩が」

「……何？」

鞍馬山は生まれつき綺麗に整っている眉をひそめる。

紀子は足踏みをした。

「ですから普通科一年の渡瀬恵依子先輩が、二年の先輩達に」

俺は立ち上がる。

「渡瀬が、学校に、来たのか？」

「そうよ　そうです。それで怖そうな女の先輩達に連れてかれて

……私、後をつけて行ったんですけど、どうすることも出来ないか

ら、人を捜してたんです！」

神崎ファンの逆恨みだ。

俺は狼狽した。

「どうしてそれを早く……」

「礼司、行こう。　紀子ちゃん、ありがとう」

鞍馬山は俺の言葉を遮り、立ち上がって走り出した。

6

体育館の裏にある、細長い自転車置き場である。

もう、クラブに所属していない生徒達はほぼ全員帰宅しているし、所属している生徒はまだ当分活動中なので、今はちょうど、四人の他には誰もいなかった。

「……………！……………？」  
「……………？……………！……………」  
「……………！……………！」

どうして三人の上級生が自分を困んで怒っているのか、恵依子には全く理解できていなかった。

神崎のことで怒っていることは分かる。しかし何も聞こえない。

声が……………聞こえないのだ。

誰かの手が耳を塞いでいるらしい。

多分、これは　この手は　そう、神崎の手なのだろう。

ならば彼女たちは『まやかし』だ。そうに違いない。

全ての言葉は嘘。

恵依子を騙そうとしているのだ。

神崎も　彼も、きつとそう言うだろう。

納得して恵依子は笑った。

「　そう……………貴女たちは羨んでいるのね。私が今、神崎君といつも一緒にいるから。そうなったから」

そうだと神崎も言う。

ならばそれが真実ではないか。

二年生たちが青ざめるのを見て、恵依子はまた、笑う。

7

「信じらんない！　どうして平気な顔して学校にいるわけ？」

「神崎君、あんたの家に行ったせいで死んだんでしょ？　彼に

何言ったのよ！　どうして……………神崎君が自殺なんて……………」

「……………絶対許せない！　絶対　この人殺し！」  
いた。

三人で一人を困んで、口々に、ヒステリックな声で怒鳴っている。  
困まっているのは確かに渡瀬だ。

渡瀬が穏やかに口を開く。

「そう……貴女たちは羨んでいるのね。私が今、神崎君といつも一緒にいるから。そうなったから」  
何を言っているんだ？

とにかく自転車置き場に駆け込もうとした俺を、鞍馬山は無言で制した。

二年生達は青ざめている。

「ちょ……ちょっと、おかしいんじゃない？」

「いつも一緒って？」

「ねえ、やばいよ、この子……。逃げよう、私達まで殺されるよ！」

悲鳴のように口走り、一人がこちら 出入り口に向かって走り出した。

続いて二人も、わめきながらばたばたと走る。

俺達は知らぬふりをして彼女らを見送り、渡瀬のいる自転車置き場に足を踏み入れた。

「……あら、狗子？ 殿山君も」

こちらに気付いた渡瀬は、明るく微笑んだ。

俺は 何を言ったらいいのかわからず、間抜けに視線を泳がせた。

だって渡瀬は笑っているのだ。

何か言わなくては。

「あのさ……お前、神崎と付き合ってたって……」

「本当よ」

異常な速答だった。

「そして今は一緒にいるの」

渡瀬は胸に手を当てる。

「……一緒に？」

おかしい。どう考えてもおかしい。これは明らかに、彼氏が死んだシヨックで、どうかしている。

鞍馬山は腕組みをして何も言わない。

何も訊いていないのに、渡瀬は勝手にぺらぺらと続ける。

「ごめんなさい、彼と付き合ってたこと、あなた達二人にまで秘密にしてて。でも神崎君のことを好きな子って多いでしょう？ だから怖くて、誰にも言いたくなかったのよ。神崎君にも迷惑かけたくなかったし。もう何もかも、いいんだけど」

「渡瀬」

「あ、二人とも、あのことを言っているのね？」

俺達は 何も言っていない。

「いいわ。教えてあげる。確かに私よ」

わけが分からない。

分かるのは、渡瀬の精神状態が極端に不安定だということだけだ。

鞍馬山は ？

鞍馬山は、ここで初めて口を開いた。

「何がだ、恵依子」

抑揚のない声で言う。

「お前は何をした」

「殺したの」

『殺した』？

聞き慣れない単語に俺は動揺した。

鞍馬山は動じていない。

渡瀬はどこか満足そうに、空を見る。

「私ね……」

嫌だ、聞きたくない。

そう思った瞬間、俺の耳は機能しなくなった。誰かに耳を塞がれているようだ。

それでも言葉は流れ込んでくる。

渡瀬の唇が動く。

目はそらせなかった。

渡瀬は言った。

かれを ころしたの。

そう。

渡瀬は確かに、そう言った。

第四話【C a n ' t g e t n o s l e e p t o n i g h t . . . .】

第四話

【C a n ' t g e t n o s l e e p t o n i g h t . . . .】  
時にそれは、恐怖の集合体。

1

狗子は黒く生温い闇の中を逃げていた。

誰から逃げているのか、なぜ逃げているのか。

答えは出ているのに分からなかった。認めるのが怖かった。

だから無我夢中で走る。

遠く、ゆらゆらと漂う赤黒い霧の中に、クラスメート達の後ろ姿が見える。

「……みんな！」

狗子は叫んだ。

彼らは同時に振り向き、そして恐れと嫌悪の表情を作った。

全員が全く同じモーションで腕を動かし、一斉に狗子を指さす。

「？」

狗子は立ち止まり、自らの身体に目を落とす。

「あ」

全身が血にまみれていた。

だが狗子の身体には傷一つない。

この血は

「ち……」狗子は首を振る。「違うんだ、これは……」

「何が違うのよ!」

一人が叫んだ。

誰なのかは分からない。もしかしたら全員かも知れない。  
そうだ全員だ。

皆が叫ぶ。

「来るなよ！」

「こ……来ないでくれよ！」

「来るな！」

「嫌ア、怖い！ 誰かたすけて！」

狗子は頭を抱えた。

「みんな、違うんだ……あたし……そんなつもり……」

嘘よ。

幼い声が聞こえる。

「本当だ……あれはあたしの意志じゃ……」

馬鹿みたい。全部憶えているくせに。

「あたしは」

私。

「違うよ……違う、もうやめてくれ！ 誰か たすけて」

叫び、狗子は一歩、前に踏み出した。

クラスメートたちの顔が断末魔に歪んだ。

「いや、いやああっ！」

「来ないで！」

「殺さないでくれ！」

「い、い、あ、あ、うあああ あ！」

絶叫の大合唱と共に、全員の首が弾けた。

スローモーションだった。

数十の頭が、簾花火のような血しぶきの中、狗子を睨みながら同時に宙を舞い、血を吐きながら また弾けた。闇を背景に。沢山の西瓜が砕けるように。

首を失った身体はばたばたと倒れた。

狗子は振り返り血を浴びながら呆然としていた。



「みんな？」

欠陥品の人形たちを見つめる。

「あ あたしが？」

粘液で濡れた髪を掻きむしる。

「あたしがやったのか……あたしが！ みんな！ 殺したのか！」

誰もあなたのことなんか受け入れられないもの。

「でも！ あたしはみんなと……一緒に」

産まれたときからヒトに触れる資格を持っていないの。

分かるでしょう？

ヒトは弱いだよ。触れれば壊れてしまうもの。

みんな怖がるわ。

誰だつて壊されるのは怖いから。

皆と一緒にいようなんて厚かましいのよ。

あんたなんて……私なんて……あたしなんて、

人殺しのくせに。

「嫌だ……」

狗子はまた走り出した。

「礼司！ どこにいるんだ礼司！ たすけてよ！ あたしを一人に

しないでくれ！」

まだ分からないの？

「分かってる！ でも」

礼司だけは。彼だけには。

「どこにいるんだよ！」

背を向けて遠くに立っている、小さな姿を見つける。

「礼司？」

そうだ、確かにそうだ。きつとたすけてくれる。

蠢く闇の地面につまづき、よろけながら、すがるように駆け寄る。

だが、前に立ちはだかる者がいた。

「待ちなさい狗子！」

「勝美」

黒場勝美は低い声で言った。

「もうだめよ。終わったの」

「どいてくれよ」

「行かせない。これ以上何をするつもりなの」

「頼む……から」

「自分が『何』なのか思い出したでしょう？ だったら身の程をわ

きまえなさい。あんたなんか最初から」

「頼むからどいてくれ！」

勝美の体を片手で横へ押しのける。

「ぎゃ」

鈍い音と、獣が唸るような声。

「あ……ごめ……」

もう遅い。

回転しながら裂ける勝美の上半身。飛び散る鮮やかな赤。

そしてまた、血にまみれてゆく自分。

どちゃり。

足下で、重い音。

「あ……勝……あ」

狗子は、原型を失ったその亡骸から必死に目を背け、叫ぶ。

「……礼 司 ！」

声にならない。

礼司はまだ後ろ向きに立っていた。

狗子のもつれる足で駆け寄り、その手を掴む。

礼司は振り向いた。

嫌悪もあらわに。

「汚い手で触るんじゃないよ」

「礼司……わ、分かってくれ……」

「やめろ、放せよ。気持ち悪い」

「お願いだから嫌わないでくれ、何でも お、お前が望むなら、

あたし何だってするよ。だから」

「気持ち悪いって言ってんだろ！」

礼司は手を振り払った。

「あっ！」

ぶきつ、と、何かが切れる音が響いた。

狗子の右腕は根本から外れて宙を舞い、落ちた。

「……………ううっ」

身をよじりながら左手で肩を押さえる。

石榴のような傷口から流れ出る液体は、なぜか毒々しい緑色だった。緑色が闇の地面に斑点をつける。

声が響いた。

あら、破損したわよ。

「う……………五月蠅い……………」

確か最初の発動は、呼吸困難による生命維持機能の……………。

「やめる、もうやめる！」

何を言ってるの。私はあなた。忘れたの？

分離していないから境界も存在しない。

所詮あなたは、私の延長線上にいるのよ。

新たに別人格を作ったつもり？

馬鹿ね、何も変わっちゃいないわ。

あなたは所詮

「私だもの」

小さな手が、礼司の胸部に突き刺さった。

ぬらぬらと赤く濡れた少女の指先は、彼の背中からのぞいていた。

腕は礼司の中を貫通している。

赤い目の少女は、愕然とする狗子を見据えながら、動きを失った少年の体を軽く投げ放った。

亡骸は空中に飛沫の軌跡を描きながら舞い飛び、遠くの闇へ、音もなく落ちた。

「礼司……………？」

向こうに落ちている礼司は、そのまま動かない。

狗子は、見開いた黒い目で少女を睨み付けて叫んだ。

「…………お前エツ！」

「何を怒っているの？ 私が…………自分がしたことなのに」  
少女はくすくすと笑いながら闇に溶けて消える。

狗子は投げ捨てられた礼司に駆け寄る。

傍らに膝をつき、亡骸を抱き寄せる。

「あ…………あ」

死んでいる。冷たくなっている。

ぼろぼろと涙が落ちる。

泣く権利など無いというのに。

「ごめんなさい…………」

狗子は自らの、唇の端を噛み切った。

「ごめんなさい、ゆるしてください、…………もう…………しないから、」  
め…………ゆるして、くださ…………」

「…………だからよお」

礼司は目を開け、吐き捨てるように言う。

「触るなって言うてんだろ、化け物のくせに」

その顔が曖昧になり、少女と重なる。

「分かっているんでしょう？」

少女の瞳は黒い。

「触れる権利も、一緒にいる権利もないのよ。分かっているのにと  
うしてわがママを言うの？」

「あたしは 私は…………」

少女の、礼司の瞳を見つめる。

自分の顔が映っている。

血にまみれた醜い顔。

そして 眼窩に宿る赤い光 糸のように細い瞳。

「あああ」

狗子は立ち上がり、存在しない天を仰ぎ、そして、

「うああっ!」

左手の指で、自らの眼球をえぐり取った。  
続けてもう片方。ぶつぶつと音を立てて眼窩から引き抜かれる。  
ネクストの。  
忌まわしいネクストの。

狗子ちゃんは

お父さんのお仕事の都合で

遠くへ引越すことになりました

視界はフェードアウトした。

狗子の体は仰け反り、びくんと跳ねた。

同時に目を覚ます。

闇ではなく、白い天井があつた。

「つ、はあっ！」

がばりとタオルケットを払いのけ、体を起こす。

部屋の明かりはついている。

コンポから、小さな音量でジヨニー・ロツトンの声が流れている。

‘ tell me why, tell me why, why d  
‘ you have to lie -  
‘ should’ve realized that you -  
‘ should’ve told the truth -  
‘ should’ve realized you know w  
hat I’ll do . . . ’

CDをかけながら寝てしまったらしい。

ゆるゆると立ち上がってそれを止め、部屋を出る。

寝汗がひどい。

薄暗い廊下を歩き、勝美の部屋のドアを、少しだけ開ける。

「おい、飯炊き女あ」

部屋の中は暗い。

中から寝息が聞こえる。

狗子は黙って扉を閉めた。

廊下に掛けられた丸い時計を見上げる。

二十三時三十分。

まだ何分も寝ていなかったのか。

このタイミングならば、冗談めかして誤魔化せるだろう。迷惑がられるかも知れないが……一人でいると、あまりにも不安が押し寄せてくる。

狗子はリビングへ行き、受話器を取った。

2

夏休みに入って二週間ほど経ったある日。

ゆっくり玄関のドアを開けると、ジヨギングでもしているような姿で、両手にコンビニの袋をさげた鞍馬山が立っていた。

「やあ、おはよう礼司くん！」  
爽やかな笑顔である。

「……貴様」

俺はげんなりして、玄関に座り込んだ。

鞍馬山は下駄箱の横にどさりと袋を置き、俺の顔をのぞき込む。

「おや？ どうしたんだい、元気が無いなあ。ほら、おはようと言つてごらん」

「ふざけんな、何がオハヨウだ！」

俺は近所迷惑を顧みず、立ち上がって怒鳴った。

「そりゃ早いよな！ 一時だぞ、まだ午前一時！ 今日が始まってから一時間しか経ってないじゃねえか！」

黒い空。黄色い月。

完璧な真夜中である。

鞍馬山はふんぞり返った。

「そつとも、朝の一時さ」

「ああ……」

軽い目眩が俺をおそう。

さつき『明日遊びに行くからね』と電話があった時から、薄々嫌な予感はしていたのだが。

「……まさか一泊するつもりか？」

「何言ってるんだい、午前一時に到着して夕方までには帰るつもりなんだから、立派な日帰りだ」

「分かった。お前に常識は通用しない。また改めて思い知らされた」

「別にいいだろ、どうせ親御さんは旅行に行ってるらしいし」

「そういう隙を見て襲撃か！」

「人聞きの悪い……。まあいいや、お邪魔します」

靴を脱ぎ、鞍馬山はとうとう上がり込んだ。

その時に気付いたのだが、こいつは古いデザインのナップザックを背負っていた。鞍馬山にファッションセンスは無い。あるのかも知れないが使うことはない。憎たらしいことに、何を身に付けてもサマになるからである。

俺はそれを指さした。

「おい、それ何だ」

「中身かい？ 着替えとか色々だよ」

「シャワー使うつもりか」

「自転車をこいで来たからね、汗かいちゃったんだ。バスルームくらいあるだろ」

「……」

今更何も言うまい。

そもそも、何を言う権利も、しょっちゅう黒場さんの部屋へお邪魔している俺にはないのだ。

再びコンビニの袋を手にした鞍馬山は、廊下をずかずか突き進んで、誰もいない食卓の扉をがちやりと開けた。

明かりはついていて。さつき俺がつけたのである。

我が家の小さなリビングキッチンを眺め回し、鞍馬山は嬉しそう

な笑みを浮かべた。

「うわあ、普通だなあ」

「悪いかよ……」

「誰も悪いなんて言っていないだろ　よいしょと」

テールに二つの袋をのせる。

透けて見える中身は、ビールの缶やつまみ、それにスナック菓子などだった。

他にも色々と入っている。

鞍馬山はぱんぱんと手を叩く。

「さて。あたしはシャワーを浴びるから、礼司くん、タオルを用意しておきたまえ」

「……もう好きにしろ」

早くも疲れてきた。

真夜中に、目もさめるような美少女が一人で訪ねてきて、これからシャワーを浴びるといふ。しかも両親は旅行中だ。普通なら大なり小なり胸を高鳴らせるシチュエーションだと思う。

しかし惜しむらくは、その美少女が鞍馬山であるという一点……。健全かつ不純な一般的男子高校生が期待するような甘い展開など、相手が鞍馬山では、全く、夢のまた夢である。世の中、上手いようには出来ていないと見える。

「それじゃ　、　とっ？」

鞍馬山が居間を出ようとドアノブに手をかけると、扉は突然、勝手に開いた。

明るみに出てきた小さな影は、鞍馬山の細長い脚にぶつかって、止まった。

「……ん、……兄ちゃん……？」

二階で寝ていた、俺の弟であった。物音に気付いて起きてきたのだ。パジャマを着た弟は、眩しそうに目をこすり、ぶつかった相手を見上げる。

それが俺でないことに気付くと、寝惚けているなりに怪訝な顔をす



る。

「…………お姉ちゃん…………誰？」

鞍馬山は、弟と目線が合うように腰を下ろした。

「これはもしや、礼司の弟かい？　　ぼく、名前は？」

「…………殿山正二、です」

眠たそうにしながらも丁寧に自己紹介した弟の頭を、鞍馬山はよしよしと撫でた。

「ショージかあ。もっと小さい礼司って感じだねえ。いくつだい」

「六才です」

「まだむつつか。　　聞いたか礼司、六歳だつてさ」

「知ってるよ」

肉親を見られるのは何となく気恥ずかしいものだ。

鞍馬山は感心したようにため息をつく。

「弟かあ。可愛いねえ…………兄貴に似てずいぶんちっこいけど」

余計なことを言いながらしばらく正二の頭を撫でていたが、何を思ったか、突然がばりと抱きついた。

「持って帰ってしまいたい！」

「…………うう！」

正二はわけも解らず、苦しそうにもがく。

俺は慌てて弟を救出した。

「ば、バカ女、自分の腕力を考えろ！　　正二が窒息死するだろうが

！」

「なあ正二くん、お姉ちゃんとお風呂入ろうか？」

「聞け！」

今更ながら、非常識な奴が来てしまった。

3

脱衣所で、狗子は礼司からバスタオルを受け取る。

狗子が着替えしか持ってこなかったからである。

礼司はバスルームを指す。

「一応言っとくけど、まだ湯は抜いてないから、軽く湧かせば入れるぞ」

「残り湯か……。ちっ……。お前みたいなチビの残り湯……。屈辱的だ……。本来なら」

「警沢言える立場じゃねえだろ！　つーか、普通は『シャワーだけでいいよ』って言うところじゃないのか？　どうして入る気満々なんだ！」

「やかましいな　あ、ボディシャンプーも借りていいかい？　使い捨てしか無くてさ、足りなくなるかも知れないから。それと」

「もう何だって勝手に使え」

「サンキュー。そうだ、見ていく？」

「何を」

「脱ぐところ」

「見るかつ！」

礼司は小動物のようにけたたましく吠え、脱衣所から出ていった。

狗子はくすくすと笑ってから

まるで伸びたバネがゆっくりと元に戻るように、再び無表情になる。

「ふっ……」

一息ついて、上半身を隠すものを、思い切りよく脱ぎ捨てた。

脱衣所と廊下を隔てるドアは、開けたままである。こうしておいて、何かの拍子に裸を見られるハプニングがあっても、コメディードラマみたいで面白い、と狗子は思っていた。別に、タダで見られて損をするほど大したもの隠していない。

脱いだ下着を手に、ふと、横にある鏡を見る。

返り血で真っ赤に濡れた裸身が映っている。

「……！」

急に体を見られるのが怖くなり、急いで脱衣所の扉を閉めた。  
力が入りすぎて、ばたん、と大きな音が響く。

居間から礼司の声がする。

「何かあったのか？」

「な、何でもない！」

「そうか？ あんまり強く開け閉めするなよ、お前ただでさえ馬鹿力なんだから」

「ああ……。分かった……」

狗子は再び鏡を睨み付けた。

相変わらず、血で汚れた体がそこにある。

洗い流さなくては。

このままでは、礼司の近くにいた資格すら無い。  
洗わなくては。洗わなくては。洗わなくては。生きていくかぎり落ちることのない、この罪深い穢れを、少しでも。

4

鞍馬山がシャワーを浴びている間、目が冴えてしまったらしい正二は、俺と一緒にテーブルにつき、単調な深夜音楽番組を観ていた。目の前には鞍馬山が持ってきた柿。ピーやら馬肉の缶詰やらが積みまれているが、正二は歯を磨いた後だから、それらはお預けだ。

最近では六歳児でも邦楽のトップテンくらいは聴くようで、テレビから知っているグループの曲が流れると、つたないながらも、時々、小さな声で口ずさんだりしている。

しかしバラードはお気に召さないのか、その手の歌手が歌い出すと、ふと、思い出したように訊いてきた。

「ねえ兄ちゃん」

「何だよ」

「あのお姉ちゃん、兄ちゃんの彼女？」

「違うよ」

「違うの？ でもさあ、すごい美人だねえ。背も兄ちゃんより高いねえ」

身長については余計なお世話だ。

シャワーの音がここまで聞こえてくる。

正二は確認するように再び呟いた。

「ね、すごい美人だよねえ」

「そうだな」

俺は適当に答えた。余計なことは教えなくて良いだろう。

だが、正二は珍客に興味津津な様子だ。

「同じ学校の人？」

「ああ」

「なんていう名前なの？」

「鞍馬山だよ」

「彼女じゃないの？」

「違うって言ってるだろ」

「……なんだあ……」

正二は分かりやすく落胆する。

俺はバターピーナッツを口に放り込む。

「どうしてお前がガツカリするんだ」

「だってさ、友達に見せられないから」

「はあ？」

ピーナッツを噛み砕く。

正二は彼なりの言葉で語り始めた。

「あのね おんなじクラスにね、浜口くんってひとがいるんだけどね、この前浜口くんちに遊びに行ったら、浜口くんのお兄さんがいてね、お兄さんには彼女がいてね、それで、そのお姉さんがさ、すごい優しくてね、それで、きれいでね、あ、お兄さんも優しいんだけど、そのお兄さんと、彼女のお姉さんと、僕と、それから小松くんとかね、それから浜口くんとかね、サッカーしてね」

要約すると、浜口くんという友達には兄貴がいて、その彼女が優

しくて美人だったと、そういうことらしい。

「で？」

「うん。だからさ、あのお姉ちゃんなら、浜口くんのお兄さんの彼女より、もつとずっと美人だからさ、今度みんなに見せてあげようと思ったの。あ、浜口くんのお兄さんの彼女も、すごくいい人だから、僕やつぱり好きだけど」

「……。へえ」

子供が考えることはよく分からない。

正二はため息をつく。

「でも、彼女じゃないならダメだね」

「そうだな。残念だったな」

俺はまたピーナッツを嚙る。少し塩辛い。

なおも正二は質問を続けてくる。

「ねえ……兄ちゃんはさ、あのお姉ちゃんのこと、好きなの？ 彼女にしたい？」

「どうしてそうなるんだ」

「だってさ……あんなにきれいだから」

「まあ、顔はな」

「じゃあイヤな人なの？ セーカクが嫌いななの？」

「別に」

「ふうん……なんか変なんだね」

正二は不満そうに、またテレビに目を移した。

流れる音楽以外に音は無くなった。

テーブルに肘をつき、今度は俺がため息をつく。

「はあ」

終業式の日の記憶が、やたら鮮明に蘇る。

今となっては全て夢のようである。切なそうに俺を見つめる瞳も、生々しく伝わってきた胸の鼓動も。

直後に有耶無耶になってしまったし、鞍馬山本人もあれ以来、その話はしようとしれない。俺もそういうことに慣れていないから、どう

すればいいのかわからない。

そんなこんなで全然何も実感がわかないのだ。

もしかしたら、鞍馬山にからかわれたのかも知れない。そんな事まで考えてしまう。

そうだ……終業式といえば、渡瀬はどうしているだろう。

結局あの日は、あれ以上何も言わず、去って行ってしまったが。

俺に引き止める勇氣は無かった。

鞍馬山は黙って見送っていた。

果たして鞍馬山は理解していたのだろうか。

分からない。分からないことだらけだ。

何だか 気が滅入る。

シャワーの音はいつの間にか止んでいた。

ドアが開き、俺が用意したタオルで髪を乱暴に拭きながら、鞍馬山が入ってくる。

「ああ、さっぱりした」

小さめの黒いタンクトップに、下はジャージ。来たときとそう変わらない服装だ。水気を帯びた、何となくいい匂いがする。

「風呂上がりにはビールビール」と

並べられた缶の一つを手にとって、ぷしゅ、と開け、天井を仰ぐように流し込む。

俺はその仕草を、ぼんやりと見ていた。

「ぶはっ。少しぬるいかな？」唇を舌先で舐める。「ほら、礼司も飲みなよ、ビールもつまみも沢山あるんだから。あと酎ハイも」

「俺はいいよ。また酔っぱらうから」

「ジュースも買ってきたからさ。ほれ、烏龍茶もあるよ。これなら飲めるだろう？」

「……ん」

俺はテーブルに肘をついたまま、出された烏龍茶を受け取った。

鞍馬山は肩をすくめる。

「どうしたんだい、ノリ悪いぞー。うりゃうりゃ」  
俺の頬にビールの缶が押しつけられる。

そうしながら鞍馬山は「あれ」と傍らを見る。

「正二くんは寝ちゃったんだ」

見ると、正二はテーブルによだれをたらして、すやすやと眠ってしまった。

「仕方ねえな。そのソファに寝かすか」

「あたし運ぶよ」

言うが早いか、鞍馬山は椅子に腰掛けていた正二の体を楽々持ち上げ、部屋の隅にあるソファまで運んで、そこへ優しく寝かせた。

「礼司、タオルケットか何か持ってきてあげて」

「お、おう」

俺が奥の部屋から正二専用のタオルケットを持ってくると、鞍馬山がそれを、ふわりと正二にかけた。

「うん、これでよし」

そして、二人とも黙って数秒間、正二のあどけない寝顔を見下ろしていた。

しんとして、俺はふと、今が夜であることを思い出した。

「さてと」

鞍馬山は柏手を打つようなふりをする。

「また起こしちゃったら可哀想だから、二階で飲もうか。あたしは机のよだれを拭いて明かりを消すから、ビールなんかは礼司が先に運んでくれ」

「俺が運ぶのかよ」

「あ、そこにある缶は開いてるから、あたしが持つてくよ」

小声で言いながら、鞍馬山はリモコンを手にとって、テレビを消した。

結局、飲まされた。

鞍馬山は結構酒に強い。飲むと、ややぼんやりとした面持ちには

なるが、泥酔したり、いつもと別人になったりしたのは見たことがない。

比べて俺はかなり弱い方だ。

ビール一口で顔が真っ赤になり、一缶も飲めばもう頭がクラクラしてくる。

小さい頃　今も体は小さいが　は、酒の匂いを嗅ぐだけで酔っぱらっていた。

それが今夜は二本も飲まされたので、既に意識は朦朧とし始めていた。

「おい礼司、しっかりしろ。夜はまだ始まったばかりだぞ」

俺の部屋のベッドに腰掛け、鞍馬山は新たにスクリュードライバーの瓶を開ける。コーラ瓶くらいのやつだ。最近よくコンビニで売られている。

「もつと色々話そうぜ、何でもいいから」

言いながらまた、ぐい、と飲む。果たして味は分かっているのだろうか。

俺は床に座り込み、別に食いたくもないスルメをがじがじと嚙る。

「……別に面白い話題なんか無いだろ……。それに……会話って、無理してするもんじゃないと思うぞ」

「じゃあ起きてるだけでいいよ。一緒に起きていようよ」

「何だそれ……」

鞍馬山はスクリュードライバーをもう空にした。

さすがに、ひくっ、と横隔膜を痙攣させる。無理もない。もう数えるのが面倒なほどの缶や瓶を空にしているのだ。

今日は少し異常である。目つきもかなり変わってきている。

「そういえばさあ」

空けたそばから、また開ける。今度は耐ハイだ。

「礼司　おい、聞いているか、ちんちくりん」

「ちんちくりんとか言うな……。聞いているよ」

「お前さあ、あれだよ。今がチャンスだ、とか思わないのか？」



なあ起きろつてば未熟児」

「未熟児って言うな。起きてるって。なに……チャンスが何だつて……?」

本格的に眠くなってきた。

鞍馬山は耐ハイで濡れた口元を弛緩した左手で拭い、「あーその、要するにあれだ。つまり普通は、だな」人差し指をタクトのように動かす。「こうやって真夜中に、仮にも女が一人で家に来て、しかも湯上がりであまつさえ酔っぱらっていれば、思春期の童貞少年たるもの、こう、むらむらつとくるのが……なあ、どうなのさ」

「一応言いたいことは分かるけどな」

俺はスルメを飲み込み、ごろりと床に寝転がった。

「相手がお前じゃそんな気起きねえよ。……別に、何も感じないって言ってるわけじゃねえけどな。仮にムラツときて強引にいつても、そのパワーで抵抗されたら自分の人生が終わっちゃうだろ」  
どうでもいい話だ。

何か、自分が、間違った返答をしたような気もするが　ああ、まぶたが重い。

「限界だ、もう寝る」

「礼司……」

鞍馬山が何か言ったような気がしたが、眠気はそれをかき消した。

俺は泥のような眠りについた。

5

「おい……本当に寝ちゃったのか?」

狗子は礼司の顔を覗き込む。

本当に寝ているようだ。

「何だよ……バカ野郎、このっ」

ぴしっ、と頭を叩くが、軽く唸っただけで目は覚まさない。

「ふん」

狗子は立ち上がり、ぐったりした礼司の体を抱きかかえる。正二とそんなに変わらない重さだ。

そう思うと、思わず笑みがこぼれる。

礼司をベッドに寝かせ、自分は床に座り込む。

と、そのベッドの下に何かが見えた。

「何だいこれは……」

まあ大体想像はつくが。

ベッドの下に手を突っ込み、勝手に引っぱり出してみると、それはやはり、そういう写真誌だった。

今までこういった物を実際に手にする機会はなかったので非常に興味がわいたが、さすがに無断で中身まで見るのは気が引ける。

狗子は寝ている礼司の体を揺さぶる。

「おい礼司、スケベな本見ていいか？」

「……ん」

「これ借りるぞ」

「……ん……」

許可が下りた。

見る前に取り敢えず、部屋の冷房を消す。どうせ今夜は涼しいからだ。

立って窓を網戸にし、煙草を取り出して一本抜き、口にくわえる。

それからまた座り込む。

煙草に火をつけ、床に置いた本のページをめくる。

最初はカラーページだった。

「おお」

めくる。

「お？」

めくる。

「うわっ。ち、乳？ びっくりした、乳か。いや、何にしてもびっくりだ。大したもんだなこりゃあ」

一人でぶつぶつと呟きながら、手を止めてしげしげとながめる。  
なかなか勉強になった。

あまり熱心になるのも馬鹿馬鹿しいので、狗子は本を閉じ、丁寧に元へ戻す。

それから相変わらず寝ている礼司を見る。

「おい、マスかき小僧」

からかおうと声をかけるが、返事は無い。

まるで死んだように眠っている。

寝息も、いびきも聞こえてこない。

「……礼司？」

また急に不安になる。

さっき見た怖い夢が　そう、まさにあれは狗子にとっての恐怖、その全てだった　押し寄せるように、胸の中に蘇った。

煙草を空き缶に押し込み、両腕を乗せてベッドに寄りかかる。

そして礼司の口に耳を近づける。

かすかな寝息が聞こえる。

安心しつつ狗子は呆れた。

自分に、だ。

これくらいで不安になるなんてどうかしている。

狗子はベッドにしがみつくようにしながら、寝ている礼司の手を、少し躊躇ってから、軽く握った。

温かい。

夢の中で、この少年の胸を突き貫いた自分。

何も言えない後ろめたさが、狗子の目をきつく閉ざした。

「……ごめん。……ごめんなさい」

謝らずにはいられなかった。

6

吹き込んだ風が頬に当たって、俺は目を覚ました。

部屋の中は明るいまま。窓の外はまだ暗いが 横目で枕元の目  
覚まし時計を見ると、午前四時過ぎだった。もうすぐ朝になる。  
気のせいか鳥の声も聞こえてきた。

窓からの風は涼しいが、右手だけが妙に生暖かい。  
首を動かして横を見る。

作り物のように綺麗な白い顔があった。

「……起きたんだ」

人形はかすれた声で言った。

鞍馬山は床に座ったまま、まるでベッドにしがみつくように、曲  
げた両腕を乗せて寄りかかっていた。

俺はまだゆらゆらと動いている意識の中で、鞍馬山の両手が俺の  
右手を握っていることを認識しながら、ぼそりと訊いた。

「ずっと起きてたのか？」

「ああ」

「どうして」

俺の手なんか握ってるんだ？

「何だい？」

鞍馬山はなぜか疲れたような顔をしていた。

白い十本の指は弱々しく俺の手に絡まっている。

俺は訊くのをやめた。

「いや、……。眠れねえのか」

「うん」

小さな顔を傾けてシートに乗せる。

目と目が 近い。

鞍馬山は言った。

「夢を見るのが怖いんだ」

俺の鼻に息がかかったが、最初から意識が朦朧としているせいか、  
この前のように困惑はしなかった。

「怖い夢見るのか」

「……ああ」

「どんな」

そう訊くと鞍馬山は黙った。

長い沈黙の後、鞍馬山は、絡めていた細長い指を解き、ゆらりと立ち上がって言った。

「悪いね、勝手に触って」

「は？」

「手 怒らないでくれよ」

「そんなくらいで怒るか、バカ」

「ありがと」

そう言いながらベッドに腰掛ける。

俺も体を起こし、床に足を下ろして座った。

そういえば俺はいつの間にかベッドの上にいる。こいつが乗せてくれたのだろうか。

礼を言う前に鞍馬山が口を開く。

「さすがに、この時間になると目が疲れてきたよ」

ゆっくりとした動作で目をこする。

「夢にビビって寝られないなんてお前っぽくないな。怖いんならまた膝枕でもしてやろうか？」

俺はふざけて言ったのだが、鞍馬山は肯いた。

「うん、頼むよ」

言うなり体を倒し、俺の膝に頭を乗せる。

厚かましい奴だ。

鞍馬山は膝の上で言う。

「酒をいっぱい飲めば、潰れて寝られると思ったんだけどな。……」

あ、やっぱりこれ気持ちいいや。ちょっと眠りたい気分になってきたぞ

「そりゃどうも」

「お前、人として生きるよりも枕の方が向いてるんだな、きつと。将来いい枕になれるよ。あたしが保証する」

「……そりゃどうも」

厚かましい上に失礼な女だ。前から分かっていることだが。

ちろ、と鞍馬山の目が、警戒するように俺を見上げる。

「念のため言うておくけど……あたしが寝てる間に下着とか脱がすんじゃないぞ」

「しねえよ」

「おっぱい揉むなよ。変なところいじるなよ。縄で縛るなんて以ての外だぞ」

「全部しねえって。大体何だよ縄ってのは。俺にそんな趣味なんか無いぞ」

「でも、さっき借りた雑誌にそういう写真が載ってたじゃないか」「雑誌？」

もしや。

俺の意識はベッドの下に移動する。

鞍馬山は目を閉じる。

「まあいいか、礼司を信用しよう」

「俺はお前を少し信用できなくなったぞ」

うなだれて、恥ずかしさと情けなさの入り混じったため息をつく。

どうも最近ため息が多い。

いや、別に最近の話ではないか。思えば鞍馬山と知り合ってからずっとこうだ。

俺は何となく鞍馬山の髪に触れながら　こういうことを自然に出来てしまうから俺達の関係は特殊なのだろう　愚痴ってみる。

「膝枕って普通、女が男にしてくれるもんだよな」

「礼司が自分でいいって言ったのに」

「うーん」

まあ、そうだ。

一体俺は何を言いたかったのか。

鞍馬山は薄目を開けて、また俺の顔を見る。

「第一お前の方は、あたしの膝で眠りたいなんて、別に思ってくれちゃいないだろうし」

「何だつて？」

「つまり、ね」

鞍馬山はもそもそと体を動かし、真上を向く。虚ろに開かれた目は俺の顔を映していた。

「あたしが普段から礼司に触れたい、触れられたいと思っっている気持ちほど、礼司があたしに対して抱いている感情は強くない。

お前はあたしを、変わり者の友人くらいにしか思っていないだろう。それなりに気に入ってくれているのは分かるよ。一応女として認識しているのも分かる。でも、まあ、それだけだ」

「鞍馬山……？」

気怠そうに続ける。

「だからといって文句はないんだ。あたしは現状に満足してる。これはプレッシャーをかけようと思って言うわけじゃないけれど、お前はいつだって優しいし、今みたいに、甘えたいときは甘えさせてくれるから。ただ皮肉は感じるよ。雑誌の写真なんかであたしの顔を知っているだけの奴らが、わざわざ校門まで出向ってきて、手を変え品を変え何十人と言い寄ってくるのに」

はあ、と息をつく。

「お前だけは、あたしのことをバカ女と言ったり怒鳴りつけたりするんだ。それが心地よくてたまらない。変な意味じゃなくてね……。結局その無関心さが必要なんだな」

淡々と綴られた言葉はそれで終わった。

俺は戸惑いながらも、案外落ち着いていた。

「それ　どういう意味だ？」

「ふん」鞍馬山はふてくされるように寝返りをうつ。「分かっているに訊くんだな。遠回しな告白だよ。がらにもない事をしたって、もう後悔してる。ああ気持ち悪い」

「俺は」

「気にしないでいい。どうせ、大して動揺もしてないだろう」

実はその通りだった。

俺は何だか申し訳なくて謝った。

「……………悪い」

鞍馬山は顔をこちらに向けない。

「大いに謝れと言いたいところだけど、礼司は悪くないから謝る義務もないんだ。ただ　　そうだね、一つだけわがままを言わせてもらえば……………うん……………」言い淀む。「……………」

声が小さすぎてよく聞こえない。

俺は背を曲げて顔を少し近づけた。

「聞こえねえよ。何だって?」

「ん。なんでもない。やつぱりいいよ」

「何だよ」

「なんでもないったら」

鞍馬山は少し体を丸める。

俺はいつかのように、その耳を引つ張った。

「遠慮なく言ってみろって。俺に出来ることなら何でもするぞ」

「い、痛い痛い痛あーいっ!　口調とやってることが全然違うじゃないか、この暴力チビ!　バカっ!　短足っ!　もうバレンタインデーにチヨコやらないぞ!」

「お前がくれるのなんて、いつも食いかけのチヨコバーとか十円チヨコだろうが」

耳を引つ張る手を離す。

鞍馬山は片手で耳をおさえながら、口を尖らせて毒づく。

「それでもあたしと恵依子くらいにしかもらえないくせに」

「うるせえな、それで何だよ」

「なにさ」

「さっきの話。俺に何しろって?」

鞍馬山はうつと詰まる。

「だからそれは……………本当にくだらないことだから。……………絶対笑うぞ、お前」

またごによごによと言い淀む。



「いいから言ってみろよ」

ベッドの上に丸まった細身の体を、俺は片手で揺する。

鞍馬山は、やはりごにょごにょと言っ。

「まあ、その、要するに……簡単に言っつと、つまり……」横目で俺を見る。「頭を、だな……」

「頭を？」

声はだんだん小さくなる。

「だから……こう、撫でてくれ、って……言おうとしたんだけどさ」

沈黙。

……頭を……撫でる？

「ぶはっ！」思わず俺は吹き出した。「は、はははは！」  
爆笑すべきところである。似合わなさが過ぎて冗談にしか聞こえない。

「す、すげえー面白え！ 何言っつてんだお前？ アタマ撫でろっつて……デカイナリして本気か？ つーかもう犬と一緒にじゃねえか！

はは、名前もピッタリ」

「か、帰る」

言い捨てて起きあがるうとした鞍馬山の小さな頭を、俺はまた膝の上に押さえつけた。

鞍馬山はもがく。

「放せ、バカ礼司！」

「暴れるなよ、頭撫でてやるから。おーよしよし」わしゃわしゃと頭を撫で回す。「うん、こりゃ良い犬だ。デカくて凶暴だけど」

「やめろ、あたしは犬じゃない！ お前みたいな寸足らずに可愛がられる筋合いなんて無いぞ！」

「よく吠えるなあ。元気があってい、っつ！ うわ、咬むか普

通！」

「ふうふうふうっ！」

「痛てて、ちょ、やめるバカ女！」

朝っぱらからよくやると、自分でも思う。

しかし普段と立場が逆転したのが面白くて、俺は必要以上にはしゃいでいた。

鞍馬山はしばらくジタバタしていたが、やがてだんだんと大人しくなり、くわえていた俺の指も放した。

更に数分後　俺の膝に横顔を乗つけたまま、しょぼくれたように言う。

「……屈辱的……」

「何が」

「……別に」

俺は頭を撫で続ける。

「どうだワン公、こうしてると落ち着いて眠れるか」

「……。うん……」

鞍馬山は素直に答え、再び目を閉じた。

その整いすぎた顔を眺めながら俺は考える。

果たして　こいつが見た、眠れなくなるほど怖い夢とは、一体どんな夢なのだろう。

それを訊こうとした時にはもう、膝の上ですうすうと細い寝息がたち始めていた。

これで当分便所にも行けなくなった。

俺は息をついて、人差し指で軽く鞍馬山の額をつつく。

鞍馬山は眠ったまま、小さく「う」と唸った。

7

五歳の時　。

父の書齋に狗子が入り浸っていた。

「見て、お父さん。出来たわ」

狗子が差し出すと、父はコンピュータに向かったままその紙を受け取って、驚いた顔をした。

「速いな」

ルーズリーフには、因数定理の問題が数題と、その解答が、活字のように冷たい筆跡で書かれていた。

狗子は、父に買ってもらった大学受験用の問題集で遊んでいたのだ。狗子は言う。

「今回は一分半。反射的に回答できるようになったから合計思考時間は一秒未満。数学って案外飽きるのね。面白い捉え方だとは

感じたけど……そこに書いてあるのなんて、どれも少し考えれば分かることばかりなもの。この前、もっと専門的なものも立ち読みしたのよ。でもがっかりしちゃった。発想のレベルは上がってたけど、閃きが用意されているの。思考パターンを同調させると意図や概念が全部見えてきちゃう。遊びとしては退屈よね」

アームチェアに腰掛けた父の膝に、ちょこんと座る。

「私ね、今度は絵を描いてみようかと思うのよ。それ合ってた？」

「ん？ ああ」

「嬉しいわ。前は時々ミスしてたものね。少しずつ経験情報の結晶化もスピードアップしているみたい。順調に成長しているのが分かるわ」

「ああ……そうだね」

六歳になったばかりの娘を見る父の顔は、浮かない。

父の表情には、明らかに『ある感情』があらわれていたのだが、狗子はそれに気付かなかった。

人間は、他動物であるキツツキが木に穴を開ける理由を明確に理解することは出来ても、その本能的衝動を共有することはできない。狗子もまた、生物が持つ恐怖心が、自己防衛のために組み込まれたプログラムの名称であるということは知っていたが、他者が抱く

恐怖を感じ取ることは出来なかった。

何も知らず、何も分からず、狗子は父の顔を見上げて、いつものように言った。

「ねえ、お父さん、私偉いでしょ？」

「……。そうだね。狗子は賢い子だ……偉いぞ」

父は狗子の頭にその大きな手を乗せて、優しく撫でた。

「狗子は可愛くて賢い子だ」

未知への恐怖に顔を引きつらせながら。

頭を撫でられながら、狗子は喜んでいた。いつも表情は大して変わらなかったが、こうして父に誉めてもらうため、狗子は家庭教師に教わる赤ん坊地味な勉強も、つまらない柔道スクールも、おおよそ無意味なピアノのレッスンも、退屈を我慢して全て完璧以上にこなしてきた。

部屋に並んだトロフィー。賞状、楯、認定証、全て　誉めてもらうため。

幸福の中で狗子は言った。

「私、もっと出来る子になる。どんな問題でも、目の前にあるものは全部、ちゃんと解くわ。私にはそれが出来るんだもの」

そうすれば父はきっと　誉めてくれる。

優しく頭を撫でてくれる。

狗子は透明すぎる心で、疑う余地もなく、そう信じていた。

愛されていると思っていたのだ。



## 第五話【あの娘に逢いにゆくよ】

### 第五話

【あの娘に逢いにゆくよ】向こう側から導く手。

夏は瞬く間に過ぎた。……といえは言葉としての格好は良いのだが、長期休みと言うくらいだから、夏はやっぱり長かった。

俺の生活リズムは錆び付いたメトロノームみたいに狂ったし、夏ばてで、ただでさえ少ない体重も何キロか落ちた。きつい日差しが苦手なせいで、例年通り家の中にいることが多くなり、少々運動不足にもなった。我ながら不健全で不健康な高校生だ。父はそんな俺を「青春の無駄遣いをしている」と言っただけで嘆いていた。

しかし、そんなに退屈だったわけでもない。鞍馬山にはちよくちよく遊びに誘われたし、クラスメートの集まりにも、呼ばれたら一応顔を出した。

それと約束通り、黒場さんに連れられて海へも行った。のだが、もちろんあの二人は、浜辺でも構わず大喧嘩をして、他の海水浴客たちを驚かせていた。

他にも色々あったけれど、それらはまた、別の機会があれば語ることにしよう。

ともかく、夏休みは終わり、長い夢もまた、終わるのだ。

まるで息切れでもしたように、苦しげに、そして当たり前前に。

1

「始業式まで、まだ三十分あるからな。出欠を取るぞ」

相変わらずひよる長い担任が出席簿を開く。

久々の教室は騒がしい。どいつもこいつも 当然俺も含めてだが まだ全く、夏休み気分である。黒く焼けた肌の色が元に戻るまで、その気分は抜けないだろう。それでも授業は始まるのだから困る。

出欠は女子から順に確認される。

「七番、飯島」

「はい」

「八番、岡田」

「はい」

「九番、蒲田。……返事がないな。いるか？」

「あ、はいはい、いるいる」

「話してないで聞いてるよ。次に返事がなかったら欠席にするぞ」

「ごめんなさい」

皆、五十日ぶりに会った友人らと好き勝手に喋り合い、担任の声などほとんど聞いていない。むしろ聞こえていない、というのが正しい。これが通常授業なら学級崩壊の様相だ。それでも自分の名前が聞こえれば、大方の奴がびくつと反応するのだから、人間とは上手くできている。

「次、十番……」

担任の声が気怠くなる。

「鞍馬山狗子」

なぜかフルネームだった。しかし「はい」という声は聞こえない。

代わりに教壇側の扉が音を立てて開いた。

全員の視線が集中する。

快活な声が響く。

「やあ諸君、お早う！」

入ってきたのは鞍馬山だった。

それだけでわっと歓声が起こる。

「鞍馬山ー、久しぶりー」

「元気だった？」

「お前全然日焼けしてないなあ」  
めいめい勝手に声をかける。

鞍馬山はそんな言葉の一つ一つに笑顔と冗談で応えてから、担任の前に立った。

教壇に片手を乗せて寄りかかる。

「先生も久しぶりだね」

「そうだな。出来れば二度と会いたくなかった」  
担任の顔は本気である。

「またまたあ」

と鞍馬山は笑った。

そして手に持った缶コーラをぐくりと飲む。

「ふう。……しかしアレだね。教室の中は冷房が効いてて涼しいけど、外は相当な暑さだね。だからクーラーってありがたいなあ、なんて思うけどさ、クーラーが温暖化の一因になってることもまた」  
「とつとと席につけ！ 誰がお前とエゴ話などするか！」  
「つまらないなあ」

口をとがらせ、鞍馬山はやつと教壇から離れる。

席と席の間をするする通り抜け

こん、とコーラを置いた机は、窓際の後ろから三番目。つまり、俺の隣の席だ。

鞍馬山は椅子を引きながらこちらを見た。

「おはよ、礼司」

「おう」

「元気だったかい」

「普通」

「……何だいそのテンポは」鞍馬山はむっとした顔をする。「つれないんだな 何日かぶりに会ったつてのにさ」

「今日からまた面倒な学校が始まるのかと思うと調子も下がるんだよ。大体客商売でもあるまいし、いつも明るく受け答えをする義務



なんて俺にはないぞ」

「何だかあたしみたいな口をきくじゃないか」

「そりゃ、休み中にまで何度も会ってりゃ、喋り口調もうつるだろ」

「やっぱりお前ら、休みの間も一緒にいたんだな」

そう割り込んだのは、後ろの席からずいとその巨体を乗り出してきた稲森である。

「どうだ 何か進展はあったか？」

俺は純粹に感心し、また呆れた。

「お前ホント相変わらずだな」

ワイドショー顔負けの冷やかし根性である。

そろそろ飽きてほしいものだが、その話が、あながち根拠のないものでもなくなってきた感があるので、こちらとしても笑いにくい。

と思っっている俺の横で、鞍馬山は既にげらげらと笑っていた。

「当然だろ稲森。何せ情熱の夏だからな。もうこれモンだ、これモン」

人差し指と中指の間に親指を突っ込み、ひこひここと動かす。

俺はその頭をひっぱいた。

「やめるバカ！ お前は本当に十六の女か？」

「ポンポン叩くなよサディスト！ それに女が下ネタを言って何が悪いんだ？ 男女差別も甚だしい！」

稲森は横で他人事のように いや他人事なのだが、笑っている。

「ははは、夫婦漫才」

その豊満すぎる笑顔が気にくわなくて俺は怒鳴った。

「暑苦しいからデブは黙ってる！」

「こら、俺のことは『太目の子』と呼べ。やんわりとな」

「何が お前、やんわりとって……なんだよそれ……ああもうバカばっかりだ。俺は軽い目眩すら感じた。

新学期早々こんなに疲れるとは。まだ数分しか経っていないのが嘘のようである。

担任はもはやこの程度の騒ぎでは動じず、出欠をとり続けていた。

「矢島」

「はい」

「雪村」

「あ、はい」

「渡瀬」

応える者はいない。

担任はもう一度その名を読む。

「渡瀬 渡瀬恵依子」

応える者は、来ていない。

担任は渡瀬の席を確認して、欠席か、と呟き、出席簿に赤ペンで書き込む。

渡瀬の名が呼ばれた途端、何人かの女子達がこそこそと話し出した。

俺は耳をそばだてるが、あまり渡瀬に対して好意的な単語は聞こえてこない。

多分、大なり小なり、神崎に気があった奴らだろう。

鞍馬山が、ふんと鼻を鳴らす。

2

音のない部屋に、一人。

暗闇の中。

神崎は包丁を手に取った 一応、手袋はつけている。

震える切っ先を見つめる。

これが彼女の腹に突き立てられれば、全ては終わる。

ただの不幸な少女として、渡瀬恵依子は死ぬだろう。

それでいいのだ。

彼女の役割は既に終わっていた。

同時に神崎の役目も終わっている。

全てを終わらせてから、神崎は消えるつもりでいた。  
もう準備は出来ている。

あとは

彼女がこの部屋に入ってくるのを待つだけだ。

3

食べ終えても、鞍馬山は煙草を取り出さなかった。  
代わりに虚ろな目で窓の外を見る。

車道を楽しげに歩きすぎてゆく三人　家族だ。若い父親に、もつと若い母。真ん中に娘。まだ四歳かそこらだろう。  
手をつなぎ、笑っている。

ガラス一枚隔てた向こう側を、一つの日常が過ぎてゆく。

俺たちがいるのは、学校近くのファミリーストランだった。

窓際の席に向かい合って掛け、昼食をとったところである。

テーブルには空になった食器がそのまま置かれている。残っているのは俺のコーラと、鞍馬山のアイスコーヒーだけだった。

「こちら、お下げしますか？」

ウェイトレスが立っていた。

鞍馬山は我に返った様子で顔を上げる。

「あたしはもういいけど……礼司、お皿は食べないのかい？　フォークとか」

「食うか、バカ」

「じゃあ二人分下げちゃって」

「はい」

ウェイトレスはくすくすと笑いながら食器を運んでいった。

鞍馬山はまた窓を見る。

さつきから、あまり会話がない　食事中は無論のことであるが。

そういえば、いつも俺は制服、鞍馬山は私服で一緒にいるが、傍から見たら一体どうい関係に見えるのだろう。

暇になつて俺は声をかけた。

「お前、やけに静かだな」

「そうかい」

「煙草吸わないのか」

「うん」肯く。「あまり吸いすぎると、元気な赤ちゃん産めなくなるしね」

真顔だとどんな内容でも冗談か本気が分かりにくい。

俺は訊いた。

「やっぱり気になつてるのか、渡瀬のこと」

「……」

窓を見たまま。

ぼつりと答えた。

「うん。そうだよ」

やっとこちらの方を向いた。

今さらその美貌にどきりとしながら、俺は肯いた。

「まあ 俺も一応気にしちゃいるけどな。このままいくと、あいつ、ずっと来ないかも知れないし。まだ渡瀬のせいで神崎が死んだと思ひこんでる奴もたくさんいるから」

「うん。それもあるけど」

「他に何か問題でもあるのかよ」

「何となく……。でも、はつきり言葉には出来ない」

鞍馬山にしては曖昧な物言いだ。

不意に席を立つ。

俺はそれを呼び止めた。

「おい、どこ行くんのだ？」

「電話……店の中にあるかな」

鞍馬山は極端に携帯電話を嫌う。

その影響か知らないが、俺も何となく購入していない。

「入り口の所にあつただろ？ 誰にかけるんだ」

「うちの飯炊き係県運転手にね。確か、今日は部屋にいるはずなん

「ただ寝てるかもなあ、ぐうたらだから」

電話をかける理由を俺が訊く前に、鞍馬山は答えた。

「これから恵依子のところへ行こうと思うんだ。一緒に来てくれな  
いか」

「は？ 行ってくて……自宅に直接か？」

「そうでなくちゃ意味がないらしい」

「どうしてだよ」

「さあ……」

出入り口の方へ歩き出す。

「まだ分からない。何が分かってるのか……」

すたすたと歩いてゆく。

「？」

別人のような声で不可解なことを言われ、俺は啞然としていた。

黒場さんは二十分もしないうちに到着した。

昼寝をしようと思っていたそうで、少し不満な様子だったが、わけ  
を聞くと「そういうことならね」と肯いてくれた。

出発前に黒場さんも、昼食がまだだからとサンドイッチセットを  
注文し、俺たちもデザートを追加注文。

どさくさに紛れて昼食の分までおごってもらった。

結局、店を出たのは三十分ほど経ってからだった。

「それにしたって」

俺と鞍馬山が後部座席に乗り込むと、車はゆっくり動き出す。

「どうして電車で行こうとしないのよ？」

駐車場から出るところの段差で、車体は、ごん、ごんと縦に揺  
れた。

鞍馬山は「はっ！」と煙を吐く。「運転手がぶつくさ文句言つな

あたしはバスや電車が嫌いなんだ」

「誰が運転手ですって！」

「大馬鹿者、貴様に決まってるだろ！」

「バカはあんたよ！ ああもう、煙草吸うなら窓を開けなさい！  
煙たいじゃないの！」

このままだと確実に事故が起きる。

代わりに謝ったのは俺だった。

「すみません黒場さん」

「礼ちゃんは謝らないでいいのよ。全部うちの子が悪いんだから

そうよねバカイヌ！」

「狗子様だ！」

喧嘩は止まらない。

「大体あんた、道はちゃんと分かるんでしょうね？」

「ずっと前に渡瀬が風邪で学校を休んだとき、プリントを届けるために玄関先まで行ったことがあるから多分平気だ。たしか駅に近いところだったような気がする」

鞍馬山は、運転席の裏に取り付けられた灰皿に、吸いかけのセブンスターを押し込む。さすがに車内の煙たさを気にしたようだ。

「とにかく百楽駅の近くまで行け」

「いいかげんだな……」

「この子はいつもいい加減よ」

黒場さんは半ば諦め気味にそう言った。

俺はふと、最前から気にしていた、ある事柄について思い出した。

「なあ鞍馬山」

「ん」

「憶えてるか？」

「忘れた」

「まだ言っていないだろ……終業式の後、渡瀬の様子が変わったよな」

「ああ」

鞍馬山は二本目を取り出して口にくわえる。火はつけない。ただ口寂しいだけのようだ。

俺は質問を続ける。

「あの時言ってたこと、あれ、どういう意味だと思う？　いつも神崎と一緒にいる、って」

「そんなこと言ってたねえ」

「彼氏が死んでまいつてるだけにしちゃ、変だったよな」

「礼司はどう思ってるんだい」

「俺？」

「礼司なりに何か想像してるから、その話を持ち出したんだろ」  
俺は何か試されているような気になった。

それから、何だか恥ずかしいような感想を言葉にする。

「俺は……別に本気で思ってるわけじゃないけどよ……なんか」

「恵依子が神崎の幽霊か何かに取り憑かれてるみたいだって？」  
鞍馬山はぴたりと言い当てた。

戸惑った。

「どうして分かったんだよ」

「誰でも考えそうなもんさ。特にあたしら日本人はそういうのが好きだからね。死人が取り憑いたり祟ったり、ってやつ。血に染みこんでるんだねえ、オカルトを好む気質が」口から煙草を離し、タクトのように振る。「でもダメだよ、その考え、今は捨てときな」

「……下らないもんな」

「違うよ。それだと一応の格好は付くけど、他のところが見えてこない。間違っているかどうかはともかく不完全だ。本当の答えっていうものは、当てはめれば、周囲にある全ての空白も自然と埋まってゆくものなんだ。ちょうどクロスワード・パズルみたいに」

「パズル？」

「そう。だから本当の答えを見つければ、全てが見える。過去のストーリー、つまり神崎の死やそれ以外の不可解な言葉……それだけじゃない、その気になれば、起こり得る様々な」

そこまで言って鞍馬山は、圧倒されている俺に気付き、ふいと目を伏せた。

「……まあ、そんな感じさ」

どんな感じだというのか。

こいつはもしかして躁鬱病にでもかかっているのでは無かるうか。

「ああ、これだけは言っておくけど」鞍馬山はドアに寄りかかりながら付け加える。「恵依子には何も取り憑いちゃいないよ。い

や うん、もし亡霊が動いているとすれば、恵依子が生んだ幽霊が、恵依子の中から抜け出したんだ。だから取り憑かれてるわけじゃない。それならあるかもね。でも、だとすれば……」

「渡瀬が 霊を、生んだ？」

「そう。幽霊は死人から勝手に出来るものじゃないから。肉体を失った魂は、誰かに認識された時点でこの世のものとなってしまふ。

そうなれば、本来なら有り得ないことだけど……ある角度から見れば、生命が終わらないってこともあるだろう」

「どういう意味だよ」

「ねむい」

「は？」

「最近、頭が疲れるんだ……」

「おい、ちよつと待てよ」

「寝る……」

そう言つて鞍馬山は、ドアに寄りかかったまま、ぐうぐう眠ってしまった。

満腹になり眠くなったのか。

火のついていない煙草が、口からぽろりと落ちる。

「うわ、こいつホントに寝ちまった」

「動物は本能のままよ」

黒場さんの言葉に俺は苦笑する。

しかし どういう意味だ？

渡瀬が幽霊を生んだ？

分からない。

ただ、とても嫌な予感がした。



予感とは何だろう。  
俺たちを乗せて車は走る。

4

狗子はドアにもたれて寝たふりをしていた。

これ以上何も語りたくないからだ。ボーダーラインを越えてしまうような錯覚にとらわれ、躊躇した。

だが頭が疲れているというのも本当である。

どうも最近、何も考えていないはずなのに脳が疲れる。

何かが 中で、勝手に動いているようだ。

正体も知れている。

『狗子』だ。

他の誰でもない、自分自身である。

あれは果たして何を割り出しかけているのか。

知りたくない。混ざりたくない。

狗子はぎゅっと目を閉じ、やがて本当に眠った。

5

案外道が混んでいたので少し遅くなり、百楽駅に着いたのは、ファミレスを出て約一時間後だった。

俺たち二人はジャスコの駐車場を出て、駅ビルの前あたりまで歩いてきた。

黒場さんは駅周辺で買い物をするつもりらしく、俺たちとは別行動である。携帯の番号は俺が記憶しているから、後で落ち合えばいいだろう。

しかしここは、俺の地元の駅に比べて、人通りがかなり多く、建物も乱立している。ぐるりと見回しただけでも、西友、駅ビル、ジヤスコ、トポス 少し遠くにダイクマの看板も見える。買い物に

はまず不自由しないだろう。

ところで、案内役の鞍馬山はさつきから、全く迷うことなく、ずんずん歩みを進めている。ずいぶんはつきり道のりを憶えているものだ。

「なあ鞍馬山、本当にこつちでいいんだろうな」

俺が確認するためにそう訊くと、鞍馬山は振り向きもせずには答えた。

「知るか。あたしの足に訊け」

「えっ」

「冗談だよ」

「……」

本気に聞こえた。

渡瀬の家は、商店街を通り抜けた先の、なだらかな坂を上ったところにあつた。

距離的には駅からかなり近いのだが、その辺りは駅周辺とは全く違う落ち着いた空気と、澄んだ生活の匂いが漂う住宅地だった。人通りはとても少ない。

渡瀬の住む家は三階建てで、屋根は青かった。

「閑かなところだな」

俺は周囲を見回して、ぼつりと言った。

並んでいるどの建物もさほど高級住宅らしい外観ではないのだが、なぜか不用意に大きな声を出すことすら憚られるような空気を感じる。渡瀬はこんなところに住んでいるのか。

鞍馬山はそれには答えず、正面ではない妙な角度から家を見上げて、

「相変わらずあれは閉まってるのか」

と呟いた。

「何のことだよ？」

俺は鞍馬山の視線のさきを辿ろうとしたが、同時に向こうから聞こえてきた耳慣れた声に、完全に注意を奪われた。

「狗子と殿山君じゃない？」

俺はぴくりと、鞍馬山はゆっくりと声の方を見る。

さっき俺たちがきたのと同じ道を、早歩きでこちらへ歩み寄ってくるのは、買い物袋をさげた渡瀬であった。制服ではないから一瞬分からなかった。

鞍馬山が軽く右手をあげる。

「よう恵依子、買い物帰りかい」

「わあ、何だか久しぶりねえ」

駆け寄ってくる渡瀬の表情に、終業式の日に見せたような、異常な色は見て取れない。あの頃より大分落ち着いたということだろう。俺は少しだが安心した。

渡瀬は俺たちのところまで来て立ち止まる。

「二人とも、私に会いにきてくれたの？」

「まあね。無断欠席だったから、もしかしたら一人で倒れてるんじゃないかと心配になってさ」

鞍馬山が珍しく、穏やかな嘘をつく。

渡瀬は、どう思ったのか知らないが、ふ、と微笑んだ。

「そう　ありがとう。でも平気よ、今日はちよつと、気分じゃなかったただだから。明日からは登校するつもりでいるわ」

口調から判断するに、それはどうやら本当のようだった。もう心配はないらしい。

しかし鞍馬山が「せつかくここまで来たんだから何か冷たい飲み物でも出してもらわないと割に合わない」と主張し、結局俺たちは渡瀬家上がり込むことになった。

俺はもちろん、鞍馬山も中に入るのは初めてである。

「二人とも、驚くわよ」

玄関のドアを開けると、渡瀬はこちらを見て、微かな笑みを浮かべながら、そう言った。意味は分からなかった。

鞍馬山はまた家を見上げながら「二人暮らして三階建てつてのは何か裕福な感じがするなあ」と地味な感想を述べていたから、聞い

ていなかったようだ。

玄関に入ると、薄暗い、真っ直ぐな廊下があった。暗いのは単に明かりがついていなかったからだ。右側には、二階より上へ上るための階段がある。

俺たちは靴を脱いで、渡瀬の後ろに続いて廊下を歩き、奥の居間に足を踏み入れた。

「ただいま」と渡瀬は言った。

一人テーブルにつき、新聞を読んでいた男がこちらを向く。

「……ああ、お帰り」

渡瀬の父親か。

仕事は休みののだろうか。

俺は目の前の男を観察する。

痩せぎすで背は高く、血行が悪いのか、肌は全体的に黒っぽい。

どこか暗い男 本能的にそう思った。

渡瀬の父親は俺たちを見て渡瀬に問う。

「彼らは……？」

「私を心配して来てくれたんですって。ほら、学校に連絡するのを忘れていたでしょう？」

渡瀬は答えながら、笑顔で俺たちを見る。

何か奇妙だ。

「そうか」

父親は、どこかそわそわしている。

「ええと、どうしようかな、まずこれを台所に置いて……あ、ちょっと三人で話していてね。ついでに飲み物用意してくるわ」

渡瀬は買い物袋を手に部屋を出て行った。

俺と、父親と、鞍馬山の三人だけになった。

「 恵依子の親父だね」

鞍馬山は分かり切ったことを確認する。まあ親子にしては全然似ていないし、確認したくなる気持ちも分からないではないが。

不法な言葉遣いに父親は少し動揺したようだったが、こくりと肯いた。

「ああ……。君らは恵依子の友達かな」

「鞍馬山狗子だ。横にいるのはペットのハムスターで名前は礼司。あんたの名は？」

「……。渡瀬清一郎だ」

「再婚するんだってね」

「ああ」

「おめでとう」

「……。ありがとう」

礼を言いながらも、清一郎は、かなり怪訝そうな顔をしていた。変な子だと思っっているのだろう。当たっている。

渡瀬が戻ってきた。

「お待たせ 何がいいか分からないから、冷蔵庫の中にあった飲み物、全部持ってきたわ」

盆の上にスプライトや麦茶などのペットボトルとガラスコップを乗せている。

「サンキュー恵依子」

「重くないのか？」

勝手に来たんだから俺も手伝えばよかった。

「あら私、案外力は強いだよ」

言いながらも、テーブルに置くときには、ほとんど筋力のなさそうな腕が少し震えていた。

それから渡瀬は父親に問う。

「ねえ 流しにあったはずの包丁が無くなってただけ……使った？」

「包丁？ 使った覚えはないな」

「おかしいわねえ、別の所にしまったのかしら あっ、そうだわ忘れてた」

「思い出したのかい？」

鞍馬山は立ったままコップに麦茶を注いでいる。

「あ、ううん、それとは関係ないんだけど……狗子に借りてたCDがあったでしょう？ 録音終わってるから返すわ。夏休みの間中借りちゃった」

「ああ、そういえば貸してたかな。デイスチャージだったっけ」

「イーグルスよ。ちょうどいいわ。ちょっと待ってて、今持つてくる」

「恵依子」

いきなり清一郎が立ち上がった。

「自分の部屋に行くのか？」

「そうだけど……変な言い方するのね」

何が変なのだろう。

清一郎は首を横に振る。

「後にしなさい」

「どうして今はだめなの？」

「……それは」

「変なの。取ってくるわよ」

「恵依……」

父親の顔は明らかに青ざめていたが、渡瀬は少し訝しみながらも、再び居間を出て行った。

とんとんとん……と、階段を上る音が聞こえる。

その間、清一郎は椅子に座り、額には汗すら滲ませて、きよろきよろと部屋の中を見回していた。

それが俺たちのことを気にしているのだと気付くまで、一秒はかからなかった。

そんな清一郎を、鞍馬山は、眉をひそめて見つめている。

ここがどこか、全く別次元なのではないかと錯覚するほど、それは異常な緊張感を持った時間だった。現実には約三十秒ほどだったのだと思うが、少なくとも俺には五、六分に　またほんの一瞬にも感じられた。

時間すら歪んでいるようだった。  
なぜか吐き気がした。

そして沈黙は破壊された。

「いや、あ、あ　あああ　っ！」

遠かったが、それは確かに渡瀬の声だった。正確には悲鳴である。転んだり、積んであった何かが崩れたにしては大げさすぎる悲鳴だ。

「何だ？　おい礼司、様子を見に行こう」

鞍馬山はそう言いながら、もう廊下へ出るドアを開けていた。

「お、おう」

鞍馬山に続いて歩き出し、そして居間の方へ振り返ったほんの一瞬。俺は、ひどく不審で、その場に似つかわしくなく、そして恐ろしいまでに不気味なものを目にした。

それは安堵の笑みであった。

渡瀬清一郎は、椅子から立ち上がりながら、うっすらと笑っていたのだ。

ぞくりと背が震えた。

何だこの感じは。

そもそも、なぜ、この父親は立ち上がらない？

詮索している暇はなかった。

俺は鞍馬山の背を追いかけて廊下を歩き、突き当りの階段で二階へ上る。

悲鳴はやんでいた。

鞍馬山は一つ一つのドアを開け、それら全ての部屋をのぞき、どこにも渡瀬がいないことを確認してから舌打ちする。

「三階か？」

俺たちはまた階段のところへと戻る。

さっき聞こえた渡瀬の声は、明らかに尋常ではなかった。

父親はまだ上ってこない　今、あの男は何をしているのだろう。

娘の部屋がどこにあるのかも教えようとしなかったが……。三階まで上り、二つ目のドアを開けたとき、そして渡瀬清一郎がようやく階段を上ってきたとき、再び悲鳴が響き渡った。

6

「そん、な……ああ、嫌、あああっ」  
首を左右に振り、恵依子は呻く。  
「か　神ざ　う、嘘でしょう。そんな　まさか  
よるける。」

背中が、どん、とドアにぶつかる。  
「嫌よ、ああ、嫌、いやあああっ！」  
恐怖と絶望が、悲鳴と共に、異常な量の涙を噴き出させた。  
信じられなかった。

現実。

眼前には、握られた凶器の切っ先があり、それはゆらゆらと揺れている。

何だ、この状況は。

ただ一つ明らかなこと。

あつてはならないのに、分かりすぎるほど分かる現実が一つ。  
彼は恵依子を殺そうとしている。

「　お前が何もかも忘れて幸せに生きるなんて、許せない。絶対に……」

低くくぐもった呪いの言葉と共に、凶器は少しの躊躇いもなく、少女のやわらかな腹部に、ずぶりと突き立てられた。

7



ぶくつ。

背筋が寒くなるような、短い呻きが聞こえた。

「恵依子！」

鞍馬山がドアを引き開けると、それはほとんど同時だった。

ドアには何かがもたれかかっていた。

ずずつ　どざり。

それは俺たちの足下に、いかにも無機物らしく倒れた。

ガラス玉のような眼球は、まっすぐに俺の顔を見ていた。

頬は涙で濡れている。口元は引きつり、不自然な微笑を浮かべているようだったが、それは紛うこと無く極限の恐怖に歪められた形相だった。

それはどう見ても渡瀬恵依子だったが、ひとつ、おかしな点があった。

腹部に何かがかくつ付いているのだ。それは包丁であった。しかも、よく見れば、それはくっ付いているのではなく、深々と突き刺さっている。

俺がそれを見下ろしてぼんやりしている間にも、渡瀬が倒れた周囲の床には、赤い液体がみるみる広がり、芸術的な輪郭の水溜まりをつくってゆく。

渡瀬は、鮮血を流す瀬戸物の人形になっていた。

隣で清一郎が娘の名を絶叫するのが聞こえた。

恵依子、と言っていた。

そして唸った。

なぜ、どうしてこんなことに　と。

鞍馬山はぐらりと倒れた。

気を失ったのか……ぱしゃつと小さく聞こえた音は、鞍馬山の頬が、もう大分広がった赤い水溜まりに落ちた音だった。

俺は半開きになった鞍馬山の眼が赤く染まっているのを何となくながめながら、自分の靴下にぬるい血液がじわじわと染みこんでゆくを感じていた。

ふと見た部屋の中には、誰もいなかった。

## 第六話【人殺しの慟哭】

### 第六話

【人殺しの慟哭】 どうしてそっとしておいてくれなかったのですか。

ここはあの暗い車庫ではないはずだ。  
なのに、どうして、あの時と同じ臭いがするんだろう……。。

1

俺は自分でも感心してしまうほど冷静だった。

ともかく、出来るだけ死体やその場にあつた物を動かさないように注意して、気を失った鞍馬山を一階の居間まで抱きかかえて運び、混乱状態の父親を一応落ち着かせてから、警察と、それから黒場さんに電話をかけた。

黒場さんは駅ビルの食料品売り場にいたらしい。本人の声の他に、足音や大勢の話し声が賑やかに聞こえていた。

俺は黒場さんに状況を説明し、ここまでの道順を教えながら、『殺人現場に居合わせる』ということに言いしれぬ奇妙さを感じた。俺は全くの別世界にいるわけではない。渡瀬が腹を刺され、その死体を目の当たりにしても、俺のいる場所は確かに現実の一部である。なのに、世界から切り離されているような気がした。

殺人事件が起きたという情報は、この家の中だけに充満していて、玄関から一步外に出れば、そこには何気ない日常の世界が広がっているのだ。げんに黒場さんなどは、電話をかけるまで何も知らずに買い物をしていたではないか。

本当に奇妙な気持ちになった。知らないということが何を意味するのか、ほんの少しだが理解したような気がして、怖くなった。……そう、事件よりも、その微かな実感の方が、俺にとってはよほど怖かったかも知れない。

警察は少ししてから到着した。

俺は顔を上げる。

「自殺　？」

「そうです。常識的に考えますとね」

夢うつつの状態だったので大体の人数すら分からなかったが、とにかくこの家には大勢の人がやってきた。外に立つ者や、近所に何かを訊きに行った者。刑事らしくない、帽子付きの作業着のようなものを着た一団もいたが、それがよく聞く『鑑識』というやつらしい。彼らは三階で何やら作業をしている。

そして今、リビングの小テーブルを挟んで俺と向かい合っているのが、どうやら一番偉い人のようだ。

若くて、やけに物腰の柔らかい銀縁眼鏡の男は、森田と名乗った。

森田警部補は言う。

「君は高校生としてはかなり冷静だが、さすがに少しショックが残っているようですね……いいですか？ あなた方三名は悲鳴を聞き、ドアの前に駆けつけた。その時、悲鳴は」  
「まだ聞こえてました」  
答えるのは俺しかいない。

鞍馬山は、この部屋の隅にあるソファに横になっている。まだ目は覚めない。

渡瀬清一郎は気分が悪いと言って、何人かの刑事に付き添われ、二階の部屋で休んでいる。

「そうですね、つまりその時点では、ドア一枚を隔てた向こう側で、渡瀬恵依子さんはまだ生きていた。それから二秒ほどの間隔を開けてドアを開くと、彼女は死亡していた、と。そしてあの部屋には他に誰もいなかった」

「……はい」

「もう言わなくても分かりますね」

「……はい……」

あの時、ドアの向こう側で、渡瀬は絶命したのだ。

だからドアを開けたとき、そこには絶対に『刺した人物』がいなくてはいけない。

だがそこには誰もおらず、また、誰の出入りも不可能だった。殺人であるはずがない。

大体、渡瀬には自殺の動機まであるのだ。

だが。

「森田さん」

「ええ、君が言いたいことは良く分かりますよ。自殺にしてはあまりにも妙なことが多すぎる」

森田は俺の台詞を奪ってから、自然な仕草で腕組みをした。

「まず悲鳴……自殺ならば悲鳴を上げる理由はありませんね。それと刺した箇所ですが、腹部。これは珍しい。内臓を傷つけてのショック死が死因となる自殺など、普通ならば有り得ません。大昔の侍

や駐屯地で死んだ作家ではないんですからね、普通は手首などを切る。」

そう言つて手首を切るふりをする。

「それから使つた包丁です。これは君の話を聞くかぎり、外出する前から用意していたとしか考えられない。つまり自殺の意志は最初からあつた。突発的な自殺ではない、ということになります。だがそれでは説明がつかないことがある。死亡する直前の行動や言動です。彼女は今日も、父親と自分、きちんと二人分の夕食の材料を購入し、しかも明日は学校へ行くつもりだと言つていた。そして精神状態は非常に安定していた。そうですね」

「……はい」

むしろ不審だつたのは父親の方だ。

森田は肯いて「それで自殺するつもりだつたなんて、実に不自然でしょう」 と天井を見上げる。三階を見ているつもりなのだろう。

「加えて、あの部屋の状態はどうでしょうか。まるで、ほら密室ですよ、誰も入れませんよと、これ見よがしに主張しているようだ。わざとらしいにも程がある」

俺は黙つた。

実際 そうなのだ。あれは本当に、わざとらしい程の『密室』なのである。

なにせ昼間だというのに、きつちりと金属製の雨戸が閉まつていて、ご丁寧鍵までかかつていた。二つある窓の両方ともだ。通常ならば有り得ない話である。

しかもあの部屋は三階ときている。つまり外部からの侵入は完全に不可能だ。そして出入り口はたった一つ、俺たちが入つた扉のみ。鍵はかかつていかなかったが、代わりに俺たち自身が、あの部屋が密室であることの証人となつてしまった。

俺は小さく口を開く。

「森田さんはどう思つてるんですか？」

「刑事の見解を聞いてどうするつもりです」

「……いや……」

俺は言葉に詰まる。何となく訊いてしまっただけなのである。

森田は「そうですね」と瞬きをした。「殺人だとしても 自殺  
だとしても 腑に落ちない。そんなところですかね」

「……？」

「ただ漠然と、こんな予感はしますよ」

森田は微かに身震いしたようだった。

「この事件は一般的な犯罪の定義から大きく外れている。紐解ける  
のは一般的でない存在だけかもしれない」

「 警部補」

居間に、体格の良い、ごつい面構えをした中年の刑事が入ってきた。  
「何だか妙なことが分かりましたよ。あの雨戸ですがねえ、隣家の  
住人に話を聞いたところ、どうも常に閉まっていたそうで」

「……常に、ですか？」

「いつつもですよ。一年三百六十五日、閏年なら六十六日、ずうつ  
と閉め切ってたみたいで。 で、二階にいる親父にどうしてかと

訊いたら、何でも殺された娘は暗闇が好きだったそうなんですよ」

「暗闇 ですか？」

「はあ、暗闇つうよりは、光も入らないような密室……ですな。親  
父さん、まだ混乱しているようで細かいところについてはさっぱり  
要領を得ないんだが、話を繋ぎ合わせるとそうなる。被害者は『隙  
間から漏れる光』が極端に苦手で、いつも、月明かりすら入らない  
ように閉め切った部屋じゃないと眠れなかったと言っんですわ」

「……。それはまた、変わった子だったんですね」

森田は俺の方を見る。

俺は首を横に振る。渡瀬にそんな性質があったなんて、聞いたこ  
ともない。

武骨なほうの刑事に訊いてみた。

「その……雨戸が閉まったきりになったのは、どのくらい前からな

んですか」

「ん？ はつきりとは分からんが、大体三年ほど前からだそつだよ」

「そんなに……」

前から。

森田は肩をすくめた。

「また謎が増えてしまいましたね」

「あの、森田さん」

次に入ってきたのは、武骨ではないが、やはり森田よりも大分年配の刑事だった。

「どうしました」

「外に第一発見者の保護者が……女性です」

「黒場勝美さんですか」

「ええ、そう名乗ってました」

「通してあげて下さい」

「分かりました。おい、通してやって！」

玄関の方から、はい、と何人かの男の返事が聞こえる。

俺が、どうして森田が黒場さんの名前を知っているのかと考えている間に、この場には不似合いな買物袋をさげた黒場さんが静かに入室してきた。

森田は座ったまま頭を下げる。

「どうも、警部補の森田です」

「よく言っわ」

見下ろす黒場さんの言葉には、警戒するような敵意が込められていた。

どうやら二人は知り合いで、しかも険悪な仲であるらしい。一体いつ、どこで知り合ったのだろう。

俺の知らない世界が目まぐるしく展開されている。

俺と、向こうで眠る鞍馬山をちらと見てから、黒場さんはソファの一本に腰を下ろす。

緊張感が漂っていた。



「ええと 説明、必要ですか？」

「あんたとは長く喋っていたくないわ。何なの？ ただの公務員みたいな顔して、こんな所まで出てきて」

「お分かりでしょう、私たちはただ、狗子さんに目を覚ましていただけなのです」

鞍馬山とも面識があるのか。

そういえば、あいつは以前「知り合いに警察関係者がいる」と言っていた。あれはここにいる森田のことだったのだろうか。

「うちの子や礼ちゃんに何かしてないでしょうね」

「人聞きの悪い」

「もう話は終わったんでしよう？ 二人を連れて帰るわ」

「残念ですがそれは出来ません」

「何ですって？」

「気を失った狗子さんは、あなたが早く連れ帰って介抱してあげればいいでしょう。しかし殿山くんにはまだ訊きたいことが残っています。話したいこともね」

「……あんた……まさか」

黒場さんの顔が青ざめる。

横から武骨な刑事が森田に言う。

「警部補、その処置は少し 一応その子はうちの方で、気が付くまで手当を」

「全権は僕にあると説明を受けているはずですが」  
その一言で刑事は黙った。

森田は黒場さんのほうへ向き直る。

「では黒場さん、狗子さんを連れてお帰り下さい。くれぐれも事故には気を付けて」

「やめて 黒場さんの声がわずかに震える。「あの子から、これ以上何を取り上げるつもりなの？ あの子はやっと」

「何も取り上げるつもりはありません。失ったものを取り戻させてあげるのですよ。大体ですねえ、黒場さん」森田は横目で俺の方を

見た。「この少年を騙し続けて、罪の意識はないのですか？ 僕は真実を伝えることこそ本当の優しさだと思つのですが」

「……あんた、人でなしだわ」

「人間でないのは、僕の方じゃない」

森田は冷たくそう言った。

結局、鞍馬山は数人の刑事に抱えられ、玄関の方へ運ばれていった。

黒場さんは 俺に何か言いたそうだったが、刑事たちに歩けと促され、どこか悲痛な余韻を残して、この部屋を出て行った。

さらに森田は、ここにいる数人の刑事たちも排除する。

「君たちも少しの間、ここから出て行きたまえ。大事な話をするのでね」

刑事たちは困惑しながらも、逆らわずに、どやどやと二階へ移動した。

そして居間は静かになった。

「これで一対一ですね」

「何のつもりだよ」

俺はもう、この男がどんな人間か悟っていた。

こいつは『いやな野郎』だ。それ以上でもそれ以下でもない。

森田は笑った。

「態度が変わりましたね。いいですよ賢くて。そんな君だからこそ、任せたい仕事がある」

「仕事……？」

「そう。眠っている『ネクスト』を覚醒させていただきたい。全てを踏まえた上でね」

わけのわからないことを言って森田は俺の顔をのぞき込む。

「始めに訊いておきますが……あなたは、狗子さんが、常人の二倍以上の知能指数を誇る天才だということを知っていますね」

「ああ」

「では そうですね、眼のことは？」

「！」

「驚きました、それすら知っているのですか」

俺が眉を動かしたのを、森田は見逃さなかったようだ。

「本人から聞いたのですか？ 例えば六年前のこととか」

「……いや」

「では、どうして知っているのです、まさか」

「見たんだよ。夏休み前と、ついさっき。二度とも、倒れたときに赤くなっていた」

「それは そう ですか」

森田は少し動揺したようだった。

「まあいいでしょう。まさかそこまで揺らぐとは思わなかったが  
もしかしてこの事件は、思った以上に危険なものかも知れませ  
ね。一部が重なり合っているのかも知れないな。まあ、それならそ  
れでやり方はある」

「何のことだよ」

問いには答えず、森田はずいと身を乗り出した。

「さっきも少し言いましたが、君には把握しておいてほしい事があ  
ります。とても大事なことです。少しシヨックは強いかも知れませ  
んがね」

眼鏡の奥からじっと俺の目を見据える。まともな感情があるのかど  
うか疑いたくなるような目つきだ。

「君は恐らく、狗子さんがどうして両親と暮らしていないのか、知  
らないでしょう」

「ああ……」

「やはりそうですか。では、例の事件についても全くご存じでない」

「知らねえよ。……回りくどい話し方しやがって」

森田は脚を組み、その上で自らの指を組み合わせた。

「そうですね、何から話しましょうか」

天井を見る。

「やはり事の発端から説明するのが一番ですね。六年前に起きた、あの密室殺人事件のことからお話ししましょう」

「 密室 殺人? 」

「そう、大概ドラマの中でしか聞かないような言葉ですが、実際に起きたのですよ。この日本でね」

奇術師のように胡散臭い仕草で眼鏡を直す。

「細かいトリックなどは面倒ですので省きます。まあ、ある程度賢い人間が数日じっくり考えれば解ける程度のもの 　　くらいの認識をしていただければ」

「その事件と鞍馬山の眼と、何か関係あるのか」

「無いと言えは無いんですが、有ると言えは有ります。たまたまその事件が発端となっただけなんです」

「……? 」

「まず、その事件における犯人の名前を覚えておきましょう。犯人の名は鞍馬山健三。狗子さんの父親でした」

「親父……鞍馬山の? 鞍馬山の父親が人を殺したのか? 」

「そう。そして被害者はその妻である鞍馬山広美でした」

「親父がお袋を殺したのかよ! 」

「ええ、そうですよ」

「嘘だろ 　　」

全く初耳である。まさかそんな……。

森田は軽い口調で続ける。

「後から調べたところ、鞍馬山健三には、事件の一年ほど前から付き合っていた女がいたそうです。同じ歯科医の仲間だったらいいですが。まあ後はどうとでも想像できますね。そして今そんなことは重要ではない」

「そんな 　　」

父親が、その妻を 　　つまり鞍馬山の母親を殺した?

そんな過去を、あいつはずっと胸の中にしまっていたのか。

俺は何ともいえない感情に包まれ、内心激しく動揺しながらも、

今森田に訊くべきことを探した。

「それで　今、親父は？」

「いません」

「そんなことは分かってるよ。どこに行ってるんだって聞いたんだ。まだ刑務所か？　それとも捕まってるのか？」

「違いますよ、この世にいないんです」

「死んだ……死刑になったのか？」

「知識が乏しいんですね。今度僕の家に来なさい。一般常識程度の法律に関する知識を叩き込んであげます」

「違うならどうして死んだんだよ」

「彼もまた別の者に殺されてしまったんですよ」

「殺された？」

よく分からないが……とにかく、鞍馬山の親は二人とも既に他界しているわけだ。あまりに唐突な話で、それを可哀想だなどとも思えなかったが、やはり複雑な気持ちになった。

俺は森田の目を見て訊いた。

「それで……その、鞍馬山の親父は誰に殺されたんだ？」

母方の家族に復讐されたか、はたまた全く関係ないところで死んだのか。

森田は答える。

「その事件のパズルを解いた者に　です」

「警察官か」

「いえ、当時十歳だった少女です」

「……。え？」

ちよつと待て。

森田は微かに笑っていた。

「事件現場に居合わせた少女は、その場で、父親の作り出した絡繰りを解いてしまった。まだ十歳だったとはいえ超人的頭脳の持ち主ですからね。簡単だったでしょう。しかしそのせいで鞍馬山健三は逆上し、彼女にまで襲い掛かった。だから返り討ちにされたのです。」

彼は、手を出しては行けないものに触れてしまった」

「何つまんねえ冗談言ってるんだよ」

「冗談に聞こえましたか」

「当たり前だ。いくら鞍馬山がバカみたいに強くなったって、十歳の子供が大の男に敵うわけないだろ。ましてや殺すなんて」

「ええ、彼女がただの人間ならね」

「どういう意味だ、それ」

「それを説明するのが難しいんです」

森田は腕組みをする。

「ええと　そうですね、君はダーウィンの進化論を知っていますか」

「……ああ？」

突然話が飛んだ。向こうの考えが全く読めない。

森田は自分の指をいじりながら話す。

「現在でもなお最も有名な考え方ですね。しかしあれは一つの仮説であって完全に証明されたわけではない。最近になって、一部専門家の間で新たな説が有力視され始めています。『次世代の変異遺伝子論』……我々の間では『ネクスト進化論』と呼ばれています」

「……何だよそれ」

「ダーウィンの進化論には大きな欠陥がある。ただ環境に馴染むように、無駄が無くなるように、一定速度でその形状を変えてきたにしては、人類の進化があまりにも急激すぎるのです。ある時を境にして革新的な進化を遂げる　それを繰り返してきたように見える。……要するにですね、偶然か必然かは別問題として、時たま、進化の道のりに大きな『転機』が訪れることがあったのではないか……そういう考え方なんです」

「転機って　どんな」

「それがつまり狗子さんのような『変異体』なのですよ。ある時期に優れた突然変異体が現れ始め、増殖し、やがて全世代に代わって次の時代を支配していったと考えれば、全て納得できる。そう

新世代は過去からの緩やかな延長線上にあるわけではなく、ある意味では完全に別のものだとしたら」

「変異体……」

俺はその言い慣れない言葉をリピートした。  
別のもの。

人間ではないもの。

森田はまた眼鏡を直した。

「もちろん交配を繰り返せばその遺伝子は段々と元の形を失ってゆく。要素はそのまま継続するとしても、血が薄まってゆくわけですね。全ての進化が原始よりプログラムされているものだとすれば、それも予定されていることでしょう。だから発生時の新種は最も優れた いや、『濃い』力を持っていると考えられる。そう、生物としての安定性を欠いてしまうほどの、恐ろしく強い力を」

「……赤い眼が、その印ってわけか？」

「ええ。進化の度、知能の発達に比例して弱体化してしまった身体能力を補うための、一種の自動的な自己防衛システムなのか……それともまだ不安定でコントロールしきれない未知の力なのか。今はまだ、光の吸収率が高くなりすぎてしまうため虹彩が縮まるということくらいしか分かりませんが、何にしろあの猫の目が現れたとき、彼らの 他にも世界で数人だけその存在が確認されています

身体機能は人間のレベルを大きく超え、肉食獣以上の運動能力が発揮されるのです」

「親父に首を絞められて、自分の身を守るために、鞍馬山もそうだったのか」

「実に話の飲み込みが早い。狗子さんが好意を持つ理由も分かりますよ。落ち着いているし、何より包容力がありそうだ。しかし今はとても動揺しているでしょう？ 否定しても分かりますよ。親しい友人が あ、まだ友人の関係ですか？」

「関係ねえだろ」

「失礼しました。とにかく彼女が我々とは違う存在で、しかも実の

父親を殺めたなんて、すぐには信じられないでしょうからね」

確かに信じられない。森田の話からは完全にリアリティが欠如している。

だが俺は必至にそれらの事実を、信じようとした。いや、把握しようとしていた。ぎりぎりのところで理解の範疇に納めようと必死だった。

鞍馬山を。あいつの存在を。心を。そうしないと。

俺は言い返した。

「だから何なんだよ。あいつが突然変異だろうが何だろうが、殺されそうになつて暴れたなら、正当防衛つてやつだろ。別に悪いことじゃねえよ」

それは表向き、鞍馬山をかばうための理屈であつたが、俺が発言した目的は違つていた。

父親を殺めた動機を明確なものにし、行動理念を理解したかつたのだ。そうならば、そうならば俺はまだ、人間としてあいつを位置づけることが出来る。突然変異や進化云々なんて関係ない。そんなのは、変な話だが、漫画や映画で慣れっこだ。どんな過去や事実があつても、把握ができていれば、俺のあいつに対する認識は変わらない。そう思った。

だが森田は言った。

「ついでに、その場にいた従兄弟の二人も同時に殺したんですが、それでも正当防衛ですかね」

「え……」

「彼らは必死に狗子さんをかばっていたらしいですよ。彼らは自分を助けようとしてくれた。そう狗子さんもはつきり言っていました。意識ははつきりしていたわけです。ちゃんとした、というのは語弊がありますが、少なくとも目的意識を持って、従妹を含めた三人を殺したのですよ。パニックになつて殺してしまつたわけではなく、記憶もあるわけですし、冷静にそれを話すことも……」



「……………」

だめだ。

だめだ、越える。俺のちっぽけな許容範囲を。

俺は焦って森田の言葉を強引に切る。

「待てよ、どういことだよ。……………どうして」

「さあ。我々にも理解しがたいところなんです、彼女が言うには『私はお化けじゃないの』とか何とか。我々のような並の人間には理解不能です。一応こちらの方で、妻を殺した現場を目撃された父親が、二人を殺して焼身自殺した。あ、実際は狗子さんが三つの死体に火をつけて、その場に立ちつくしていたわけですが。まあ、そういうことにしておきました。隠蔽というやつです」

「……………、何だよ、それ……………」

俺は頭を抱えた。

もう分からなくなつた。

向こう側からぎりぎり引張られても必死に握りしめていた縄の先を、ふとした拍子に放してしまったような感覚だった。

縄の先は闇の中へと吸い込まれてゆく。

森田は俺の表情を観察しながら言った。

「話を取り敢えずの必要事項だけにまとめましょう。語ることがあまりにも多すぎる。……………まず第一に、我々は狗子さんを強く欲しています。未知の身体能力ではなく、単純にその高い知能を必要としているんです。当然あの知能も、人とゲノムを異にする新種『ネクスタイプ』特有のものですが。彼女がいれば、きっと法治国家としての日本を完全な形へと導くことができる。そういう意味では、あの事件が起きたことは幸運でしたね。彼女が三人を殺したことで、我々は他の何者をも介さず、いち早く彼女の存在を認識し、分析することができた」

「……………それで？」

「しかし彼女は我々の所へ来ることを拒みます。何故か？ 君がいるからです、殿山礼司君。もちろん他にも様々な要素があるんでし

ようが、僕の見たところ、一番のネックは間違いなく君だ。君が彼女を俗世に縛り付けている」

「……」  
「大人でもぞつとするような容姿ですからね、君も憎からず思っていたはずです。そして何より、親しみやすいあの人格。……しかし、ここまで真実を知った今も、まだあの性格が本当のものだと思えますか？ 全て演技だとは思いませんか。何人ものヒトをいとも簡単に殺してしまう自分を恐れるが故、彼女自身が作り出した、順応のための……現実逃避のための、仮面だとは思いませんか」

「……でも」

「でも、何です？」

「……」

何も

言えなかった。

認めたくはないが、俺の中にある鞍馬山は、完全に形を失っていた。怖くなった。

それだけではない。信じられなくなった。

もう、あいつが誰なのかすら、分からなくなっていた。

俺は小さく訊いた。

「……どうしろってんだよ、俺に」

「簡単です」

森田はわずかに笑う。

「これだけの状況がそろっているのですよ。近しい者たちが変死を遂げ、その周りには、これでもかというほど多くの謎が散らばっている。完結しているようで完結していない。そして彼女には恐らく全ての答えが見えている。踏ん切りを付けてもらうには絶好の機会だ。ちょうど君の幻も解けてしまったことですし、ここらで学校ごっこもやめ、黒場さんの所からも出て、偽りの環境から足を洗ってもらえれば、我々にとつてそれほど嬉しいことはない。やろうとしているのは、言ってみれば儀式のようなものです」

「あいつにこの事件を解決させて、そのままお前の良いように引っ張り込むんだな」

「君に僕のやり方を咎める権利がありますか？　ほんの数分で、彼女を信じることにすら出来なくなった君などに」

「……」

また何も言えなかった。

森田は立ち上がる。

「君にはこれから、狗子さんを説得してもらいます。どうか君の手でお別れの握手をしてあげて下さい。でなければ、僕が残酷な言葉を口にしなければいけなくなりますから」

2

「　ああそう」

無感動にそれだけ言い、狗子は受話器を置いた。

森田からの電話であった。

気絶してから分かった事件の詳細を事細かに伝え、最後に一言、嬉しそうな声で『彼に色々と伝えておきましたから』　。

特に腹は立たなかった。

森田は何も間違ったことなどしていない。

振り返ると勝美が泣きそうな顔をして狗子を見ていた。

狗子はくすりと笑うふりをした。

「どうしたんだい、変な顔して」

「……狗子……」

狗子は顔を背けて玄関の方を見た。

「多分もうすぐ礼司が来る　。少しの間、奥の部屋にいてくれな  
いか」

「……あなた」

「頼むよ」

そう言っつて片目を閉じる。

勝美は何も言わず、うつむいたまま、自分の部屋へ入って扉を閉めた。

狗子は息をつく。

ピンポンと呼び鈴が鳴った。

「おや、以外と早かったなあ」

3

インターホンが、いつもと同じ鞍馬山の声で喋る。

『礼司?』

「……ああ」

『入りなよ。鍵開いてるから』

「……分かった」

玄関を開けて入った俺は、ゆっくりと靴を脱いで上がり、廊下の終わりで立ち止まった。

鞍馬山は冷蔵庫からアイスコーヒーの紙パックを取り出しつつ笑う。

「どうしたんだい、そんなところに突っ立って。座ったら?」

そう言われて俺はいつもの椅子に腰掛けた。

「……ぼつりと。「何しに来たか訊かないのか」

「どうせ森田から説得を頼まれてきたんだろ。いいよ、もう決めたから」

「決めたって……?」

鞍馬山は俺の向かいに座った。

「あたし、これからは森田の言うとおりにする。と言うより、あいつの言うような道を選択することにした。いつまでも今の状態に固執してたって何の得もないしね。学校も辞めることにしたよ。ここも出る」

「お前」

「ちょうどいい機会だからさ。お前らと会えなくなるのは正直少し

寂しいけど。　　そうだ、お腹すかないか？　　晩ご飯食べてないだろ」

「……………」

よいしょ、と鞍馬山は立ち上がる。

「ご飯余ってるから、おにぎり作ってたげるよ。中身は鮭でいい？」

「ん……………ああ」

何を考えているのだろう。

鞍馬山は対面式キッチンの向こう側に回り、手を水で流して塩を付け、電子ジャーからすくい取った白米を握り始めた。

「あちち　　もう大分前にお釜の電源切ったんだけどなあ。あんまり冷めてないや」

「……………大丈夫か？」

「ん、平気。ねえ礼司、初めて会ったときのこと、覚えてるかい？」

「……………何となく。中等部の合格発表ん時だろ」

「そうだよ。正門の前で会ったんだ。付き添いのお母さんに向かって『受かった』、『やったよ』とか口で言ってる割に、なんだかつまらなそうな顔したチビと目が合ってたさあ」

よく憶えている。

大した目的意識もなく、親に勧められるがまま勉強をして合格したもので、あまり成功の実感がなかったのだ。

今でこそ、高校受験を経験せずに、楽に中学生活を送れたことに感謝しているが、あの時の俺には大した喜びもなかった。

「どうだった、あたしの第一印象は」

「きつそうな女だと思ったよ」

それに色々な意味で魅力的で、同時に残酷そうだとも思った。本能的に、リーダーシップを利用して人を傷つけるタイプの人間であるようにも感じ、少なからず警戒したものだ。

だからその後同じクラスになったとき、意外な温かみに驚いた記憶がある。

だが俺はそれを口に出さなかった。

「そうかい。きつい女、か」薄く笑う。「あの時ね　あたしは始めから試験も何もなくて、あの日も校長に挨拶だけして帰るところだったんだよ」

「そうだったのか」

「うん。知能検査なんかはもう、森田に連れて行かれた施設で一通り受けてたからね。普通は中学に入学した時点で受けるわけなんだけど、あたしは一足早く国定特別奨学生のリッテル付きになっていたわけさ」

「施設？」

「ああ、変な場所だったよ。一年以上そこにいたんだけど、もう毎日モルモット扱いでねえ。いや、一方ではやたらと大事にされる分、不自然でもっと不快だったね。　完璧に命の安全を保証されている環境で、変な実験にウンザリするようなテストの繰り返しだ。過去に起きたありとあらゆる……もちろん未解決のものも含めた事件のファイルを山ほど見せられて解かされたり、それから……：そうだが裸にされて調べられたこともあるよ」

「そんなことされたのかよ」

「あの時はさすがに何とも言えない気分になったね。あと、赤い眼の状態になるようにわざと痛めつけられた事もある。結局一度もならなかったけど。　よし一丁上がり」

白い皿に小さめの握り飯が三つ乗せられている。

「どうだい、ちゃんと三角のやつだぞ。すごいだろ」

「女がそれくらいで自慢すんな」

「豪勢に海苔まで付けたんだ、ありがたく思え」

皿をテーブルに置き、鞍馬山はまた俺の向かいに座る。

「手、洗ってきたら？」

「別にいいよ。なあ……ホントに食っていいのか、これ」

「変な遠慮をする男だな。お前のために作ったんだから食べても良いに決まってるじゃないか。そんなことよりお前の気持ちの方が問

題だろうに」

「俺の気持ち？」

「三人も手にかけて人殺しが作ったおにぎりだぞ。気持ち悪くないのか？」

「え」

「ほらね、躊躇した」

鞍馬山はテールに頬杖をつく。

忘れていた。

そつだ、あまりにもこいつのテンポが普段通りだったから、さつき聞いた話も、渡瀬の死も。

術中にはまっていた。そんな感覚だ。

鞍馬山の瞳の奥から、何か別の物がこちらを覗いていた。

「言っておくけど、あたしはお父さんを素手で殺したよ。まずは左の眼球を狙った。まだ小さかった手を眼窩に押し込んで中身を潰し、かき回した。それによるショック死が目的だったんだけど、意外にしぶとく暴れ続けたから、今度は首の付け根あたりに人差し指で穴を開けて、うずくまったところで、後頭部を思い切り殴って殺した」

「鞍馬山……」

「従兄弟の二人はもつと簡単だった。お兄ちゃんは、つかまえて喉笛を掴んで、そのまま思い切り引っ張ったら簡単に気管と肉が千切れて死んだし、お姉ちゃんも正面から顔を殴ったらへこんで、仰向けに倒れて死んだ。あたしの全身はどろどろで真っ赤になった。全部この手がやったんだ。物凄く力が強くなってたから簡単だったよ」  
そう言っただけで俺に手のひらを見せる。

俺は改めて皿の上に乗った握り飯を見た。

何の変哲もない米の固まりが、急に血生臭いものに見えてきた。

自分の顔が青くなってゆくのが分かった。

鞍馬山はあっけらかんとした口調で言った。

「ほら、よく考えてみると気持ち悪いだろ。だからこんなもの食べ

なくていいんだ。『気持ち悪いからいらぬ』とはつきり言ってくれ。その言葉であたしは気持ちの整理をつける。そのために握ったんだよ、これは」

焦った。

「く……食つよ」口について出ていた。「腹減ってるから。それに、そんなこと関係ないし」

俺は握り飯の一つを掴んで口に運び、一度に半分ほど嚙って頬張った。

鞍馬山は頬杖をついたまま呟く。

「無理しちゃって」

その言葉も無視して食べ続けた。

一つを腹におさめ、二つ目に手を伸ばす。

が

「……んっ……え」

不意に気持ちが悪くなった。

胸に何かが詰まったわけではない。

何かが拒絶している。初めての感覚に戸惑った。

異の中に入ったばかりの米が逆流してくる。

在り得ない血の味と共に。

「……っ！」

手で口を押さえ、俺はトイレへと走った。

明かりも付けずにドアを開け、洋式便器の前に跪く。

そのまま嘔吐した。

吐瀉物と水面がぶつかって、どぼどぼと鳴る。

頭上で鞍馬山の声がした。

「本当に優しいよなあ、礼司は。呆れちゃうくらいだよ。でもねえ

気持ち嬉しいけど、無理はしない方がいいよ」

俺の肩に手が触れる。

「もう平気かい？」

ぞくりとして、俺は反射的にその手を払いのけていた。



「な　ん、なんだよ！」咳き込みながら俺はまくし立てた。「わかんねえよ……お前、どうしてそんなに平気な顔してるんだよ！　ずっと……っ！」

止まらなかった。

「なんで……分かんねえ……お前のご全部！　何も」

「分かるわけがないんだ」

「え……？」

見上げて、暗くて鞍馬山の表情は見えない。

鞍馬山は背を向けた。

「何でもない。ごめんな、変なもの食べさせて」

「……く……」

「あたし平気だから、もう友達やめていいよ。お前は優しいし、これから先も、あたしと一緒にいようと思えばいられるだろうけど」

それはもう『本当』じゃない、不自然な形だから。嫌なのに無理矢理一緒にいたって苦しいだけだろ」

「違　俺は……」

「今までありがと。騙してたみたいで悪いね」

穏やかな声でゆっくり言って歩き出した。

一歩ずつ、向こうの方へ。

行ってしまう。

何か、何か言わなければ。今までの全てを修復できる言葉を探さなければ。

「で……でも」

歩いてゆく鞍馬山の背中に。

「でも俺、好きなんだ」

それが俺の口から反射的に出てきた言葉だった。なぜそんな、場違いで突拍子もない言葉が出てきたのかは分からない。とにかく必死だった。

滑稽なくらいに。

「俺、お前のことが……本当は」

空気が重くなり、俺は胃液混じりの唾を、ごくりと飲み込む。

続く言葉は見つからず、外に出てしまった声は、どこへも逃げて行けずに空中を漂っている。

指先が痺れていた。

鞍馬山はこちらを向かず、立ち止まって舌打ちした。

「…………。馬鹿じゃないの、お前？」

感情のない声だった。

これが地声なのかもしれない。

「せっかくだけどお断りしとく。正直言って、もう、そんな言葉は嬉しくないから」

鞍馬山は続けてそう言い、また歩き出した。

そのまま居間に入り、内側から、ゆっくりとドアを閉める。

その後、きし、と、椅子に腰掛ける音がした。

あとは沈黙があつた。

沈黙は長く続いた。

息を吸い　俺はドア越しに問いかける。残ったのはもう、背中を掴もうとする言葉ではなく、単純な質問だった。

「…………。…………。一つだけ訊かせてくれるか…………？」

ひどく小さな声しか出なかった。

もう全てに現実味がない。

鞍馬山は一呼吸後、面倒くさそうな声を返してきた。

「何？」

「どうして関係のない人たちまで…………」

殺したんだ？

その手で。俺と腕相撲をしたり、後ろから不意打ちでヘッドロックを決めてきたり、繋いだまま眠りもした、俺にとって多分、一番身近だった　その温かい手で。

「そうだね」

声笑笑っている。

「あたしが『お化けだから』、かな」

「……そんな……」

やっぱり分からない。理解できない。  
結局そうなのか。

今までずっと　こいつは　。

声はまた、冷たく変わった。

「おままごとは終わりだ。お互い大人しくお家へ帰るとしよう、礼  
司」

今度こそ本当に会話の終わりだった。

「ご迷惑をおかけしました。ありがとうございます。ごめんなさ  
い。……サヨウナラ」

4

礼司が廊下を歩き、靴を履き、玄関から出て行く音を、狗子は脚  
を組んで椅子に腰掛けたまま、目を閉じて聞いていた。

立ち上がり、狗子は一人で皿を片付ける。

皿には食べかけの握り飯が乗っている。

奥の部屋の扉が開き、勝美が顔を出す。

「　　狗子」

「ん」

「礼ちゃん帰ったの？」

「全部聞こえてただろ。帰った」

答えながら皿をキッチンに運ぶ。

勝美は、涙ぐんだ目を強くこすったらしく、微かに赤くはらして  
いた。

「狗子……」

「何だよ」

「あんた、本当に出て行くつもり？」

三角コーナーの生ゴミに、握り飯がどさどさと加えられる。

「いつかこうなるって分かってただろ……思っていたより少し早かっただけさ。今まで世話になったね。飯、けっこう美味かった」

「……そんなこと」

勝美は鼻をすする。

「そんなこと、言わないでよ」

狗子はキッチンから出て再び椅子に座る。

「やっぱり あたしにハッピーエンドなんて有り得ないんだよ」

勝美は狗子に歩み寄る。

「そんなの自分で思いこんでるだけでしょ？ 礼ちゃんなら、話せばきつと……」

「無理だよ。それをさっき確かめたんじゃないか」

「だから、」

「それにね。分かるとか分からないとか、そんな問題じゃないんだ。あれは絶対に正当化できないし、するつもりもない。どう足掻いたって無駄だ。大体、本当のあたしを知って一緒にいてくれる人間なんて、どこにもいない」

「そんなことないわよ。礼ちゃんとあんた、ずっと一緒にいたじゃない。ちゃんと説明すれば」

「全て許し、分かってくれるって？」

「そうよ。私だって」

「お前も理解してるって言うのかよ!」  
拳をテーブルに叩き付ける。

勝美は、ひい、と鳴いて尻餅をついた。

空気が重く固まった。

取り返しのつかない沈黙だった。

床に転がった勝美の姿を見下ろし、狗子は笑った。

「はは」

ゆらりと席を立つ。

「何だよ、そんなに驚くことないじゃないか」

勝美は急いで立ち上がる。

「い、狗子　ごめんなさい、私　」

「何謝ってるんだよ、変な奴だなあ」

狗子は笑いながら自室のドアを開けた。

「あたしもう寝るよ。色々あって疲れちゃった。あ　そうだ、礼司に言いそびれた事があるから、電話で伝えておいてくれないか」

「……何？」

「明日の夜、恵依子の家で一連の出来事を全て片付ける。関わったお前には知る権利があるから、来たければ来い、って」

「片付けるって……」

「吐き気がするような内容の、しかも長たらしい演説が必要になりそうで気が進まないけど、それが恵依子の遺志でもあるからね。」

あ、そうだ、恵依子を殺した奴の名前も分かってるから教えておくよ。これも礼司に伝えてくれ」

暗い部屋に一人、入ってゆく。

「渡瀬清一郎……あいつがやったんだ。ひどい方法でさ」

「それって　」

「父親だよ」

狗子は面倒くさそうに答える。

「実の父親だ」

ぱたん、と扉は閉まった。

勝美はただ一人放心していた。

5

渡瀬恵依子死亡から一日が経過した。

現在、七時三十二分。

ここは渡瀬宅前である。

これより行われるのは、重要な実験だ。……そう森田は考えている。

ネクストが暴走する可能性もゼロではなく、やはりリスクは伴う

が、それで鞍馬山狗子の本来の自我が覚醒するならば、安いものだ。ゼロではない可能性のために十分な準備もした。周囲に覆面パトカーを七台、分散させて配置。車内にはそれぞれ四人ずつ、計二十八の駒が詰め込まれている。彼らにはマニュアルのみが手渡されており、余分な情報は一切与えられていない。

これらは万が一のためだが、決して大げさな用意ではない。

そろそろ来るか。

森田はアスファルトに煙草を放り、踏みにじった。

背をもたれているのは、渡瀬家の塀である。

中にいる渡瀬清一郎は、もちろん、外の状況に気付いていない。音をたてずに全てを行ったからだ。今日用意したのは、『そういうこと』の出来る人員たちである。

こちらへ歩いてきた少年に気付き、森田は例の笑顔を見せる。

「来ましたか、殿山君」

殿山礼司は森田の前で立ち止まる。

そして殴った。

森田は特によろけもせず、やはり笑いながら頬をさする。

「八つ当たりとはね」

「余計なことを教えやがって」

「私が何も教えなければ、狗子さんと仲良くしていられた……ですか？ 彼女は加害者だが、ある意味では被害者なんですよ。心は傷だらけだ」

「何が言いたいんだよ」

「あなたが本当に彼女のことを思うならば、僕の言葉などに惑わされず、彼女の全てを受け止めてあげれば良かったのではないですか」

君は真実の重みに押し潰されただけだ」

森田はくくつと笑った。可笑しくてたまらないのだ。

唇を噛み、少年は森田を睨み付けていた。

胸に付けた小型無線が鳴る。

「……何ですか。ああ……：そうですか。では予定通りの準備をお願い

いします。あなた方の出番がないことを願っていますがね。……いや何、こつちの話ですよ、おっと」

壁から背を離す。  
「主役の到着だ」  
ぶつ、と無線を切る。

ゆっくりと歩いてきたのは、鞍馬山狗子だった。闇の色に染まった空気の中を、一歩一歩、こちらへと、真っ直ぐに。そして光の中に足を踏み入れ、全身に照明を浴びる。その姿が明らかになった。

美しい。

森田は見とれた。六年前の顔だ。無駄な揺らぎのない、完全な表情だ。

いつも首の後ろで結ばれていた長く茶色い髪は、今、解かれていた。森田は頭を下げる。

「お待ちしていました。渡瀬清一郎はこの中にいます。まだ我々が来たことに気付いていません」

「……立ち止まる。……そうか」  
特に感想はないようだった。

そして横目で殿山礼司を見る。

「来たんだな、殿山君」

「……あ、ああ」

殿山君と呼ばれたことに、少年は戸惑った様子だった。

森田は不快だった。

狗子が殿山礼司に対する呼び方を変えたのは、自分の気持ちを誤魔化すためだ。そこにはまだつまらない未練が残っている。まあ、それもいずれ消えて無くなるだろうが。

狗子は家を見上げた。

「仕方がないな。この事件はいずれにせよ、私が解くほかにない」  
「どういう事です？」

森田が問うと、狗子は、はっきりと言った。

「この事件は正常じゃない」

声は夜に響いた。

森田は興味ありげに聞く。

「それは一体どういう意味での言葉ですか」

「あの施設でお前らに見せられた数多の事件ファイルの中にも、こんなケースは一つとして存在しなかった。これは……この世に起きるべき事件じゃなかった」

冷やかな目で森田を見る。

「待っている。これから全てを説明してやる」

「そうですか」

森田は露骨に、期待にあふれた顔をしていた。

玄関のドアは内側から開いた。

明かりに気付いて出てきたのだろう、渡瀬清一郎が、顔を覗かせ  
る。

こちらを見たその表情は慄いていた。

狗子は彼を見据えて言った。

「出てきたか……」



## 第七話【フラッシュバック】

### 第七話

【フラッシュバック】暗転して暗転して血の夜に落ちて。

1

玄関先で渡瀬清一郎は狼狽した。

「一体どういつつもりですか。外の騒ぎは」

「心当たりはあるだろう。まあ心配しなくても、お前を捕まえるための人員ではないはずだ。そうだろう、森田」鞍馬山は森田を見る。

「あれは、お前とは関係ないリスクのための保険だ」

森田は肯く。

「そう、ですからお気になさらずに」

「そんな……」

気にするなと言われても無理な話だろう。

「とにかく ええと、どうすれば」

渡瀬清一郎は焦りながら、どうも廊下の奥を気にしているらしい。

俺は訊いた。

「中に……誰かいるんですか」

「えっ？ いや、まあ」

いるのか。

それは誰かと問う間もなく、その人物は奥から登場した。

「……何かあったんですか……？」

やや化粧の濃い、中年の女性だった。

色っぽい、というのは、こういうことを言うのだろうか。中肉中背で、さして美人というわけでもなく、一見して目立つところはないのだが、単純な可愛さや綺麗さとはまた別の、不思議な魅力を持つ

ている。

渡瀬清一郎同様、やはり困惑した表情である。  
多分、この人が。

鞍馬山が訊く。

「あんたが根岸花織かな」

「え……はい、そうですけれど」

やっぱりそうか。渡瀬清一郎の再婚相手である。

「こんなに都合のいい話はないな、渡瀬清一郎」

清一郎の方は見ず、鞍馬山はそう言った。

彼の顔は青かった。

「外で話すのも何ですし、我々も中へ通してもらいましょうか」

森田は笑いながら、厚かましくもそう言った。

鞍馬山が付け加える。

「ただし応接間じゃなく、あの部屋だ」

そして俺、森田、鞍馬山、清一郎、根岸花織の五人は、渡瀬が死んでいた部屋に入った。

五人も入って窮屈さを感じないのだから、一人の部屋にしては、少々不自然なほど広い。

散乱したものは片づいていたが、床や扉にできた血の染みは、輪郭のみがうつすらと、こびり付いて残っている。

やはりここで渡瀬は死んだのである。あれは現実だった。

「あの」

渡瀬清一郎が口を開く。

「もう、必要なことは全て話したはずですが」

「まだ重要なことは何も話していないだろう」

鞍馬山は一人で、昨日まで渡瀬恵依子が使っていた椅子に腰掛ける。  
「私がお前と、そして恵依子に代わって、皆に教えてやる。そうだな 何から話そうか」

異常に静かな部屋である。

閉め切られていた金属製の雨戸は、今は、開いていた。

「まず、一人目の死について話そう。言うまでもなく彼の死と恵依子の死は繋がっている。そう、神崎和也についてだ」

神崎。

思えば、あれが全ての始まりだった。

俺と全く関係のない場所で起きた、曖昧で、そして不可解な死亡事故。

あれの真相も、鞍馬山には見えているのか。

森田が訊く。

「神崎少年……あれはやはり……自殺なのですか？」

「そんなわけがない。あれが単なる自殺なら、こんな事にまで発展したわけがないんだ」

「しかし」

「そう、運転手が見たのは神崎一人だった。だがそれが間違いだ」「運転手が嘘をついていると？」

「それも違う。いいか、この事件において被害者がいるとすれば、神崎をはねた運転手と、神崎と、そして、そこにいる根岸花織だけだ」

渡瀬の名前が入っていない。

鞍馬山は横目で俺を見た。

「恵依子はそういった言葉ではくくれない」

俺の思考を読んだのか。

鞍馬山は続ける。

「神崎は、自殺をしたわけでも殺されたわけでもない」

「では、どうして」

「だが突き飛ばしたのは恵依子だ」

その言葉に、びく、と渡瀬清一郎が反応する。

森田は首をかしげる。

「しかし現場に彼女の姿は……それどころか、神崎少年のほかには誰も」

「見えなかったのさ。運転手の証言を思い出してみる」

「運転手の？」森田は腕組みする。「ええ　暗闇と大雨ではつきりとは見えなかったが、少年は物陰から飛び出したように見えた、とか」

「その後だ」

「はい？」

「運転手はこう続けた。混乱で、目の前が真っ赤になり、逃げた」

「

「あつ」

俺は思わず声をあげた。

「傘……」

「そう、傘だ。あの日、恵依子と神崎は、真っ赤な傘をさして帰っていた。ぶつかつた瞬間、飛んできたあれが運転手の視界を遮り、彼を余計に混乱させ、ミラーを見る余裕すら奪い去つたんだ。」

同時に『ぶつかる前にも赤いものが視界に入っていた』ことすら忘れてしまった。傘は電柱には隠れないだろうから、一応最初から見えていたはずだ。しかし持ち主は道の端で何かやっているようだから、避ける対象にはならない。無視しても良い。気にもとめない。だからその時点で記憶に焼き付くということはない。けれど突然持ち主は飛び出してきて　その瞬間、目の奥に、衝撃と共に赤い色がインパクトされた。あとは絶望による記憶の混乱で、傘に関する記憶が曖昧になつたんだ」

そうか。

しかし

「馬鹿な」

渡瀬清一郎が発声する。

「娘が、そんなことをする理由がない」

「よく言えたものだな」

鞍馬山は冷ややかに言った。

森田が問う。

「しかしその通りですよ。一体どうして」

「多分神崎は恵依子に　そうだな、せいぜい『キスを迫った』というところだろう」

「キス……口づけを？」

森田は啞然としたようだった。

「それ、だけ、ですか？」

「そして恐らくその時点では、恵似子も受け入れるつもりだったと思う。だが唇の触れ合うその瞬間、恵依子の中に潜んでいた、父親への　いや、男への嫌悪感が爆発し、痙攣的に彼を突き飛ばしてしまった。そこへ運悪く車が走ってきて、神崎は死んだ。恵依子の目に彼が神崎本人として映っていたかどうかは定かではないが」

最後の言葉の意味は分からない。  
だが。

「父親への……嫌悪感……？」

俺は言いしれぬ気持ちの悪さを感じながら、渡瀬清一郎の方を見た。  
同じように根岸花織も彼を見ていた。

清一郎は

「お前は、一体、どうしてそれを……」  
青ざめていた。

鞍馬山は立ち上がって話を続ける。

「そもそも間違いだか　この部屋は恵依子の部屋ではない。昨日、悲鳴が聞こえたとき、二階にある全ての部屋を見たが、そのうちの一つに、妙な部屋があった。誰も使っていないようなのに、本棚に参考書や小説があり、さらに、壁には学校の時間割表が貼られていた。私たちのクラスの時間割だ」

ということは、

「そこが本当の、渡瀬の部屋なのか？」

「では、この部屋は一体　」

「やめ……やめろ」

渡瀬清一郎はおびえ、冷や汗を流していた。

「どうして知って……どこで見えていたんだ？ どうして……！」  
ひどく不気味な呟きだった。

「三年ほど前からこの部屋の雨戸は、いつも閉まっていた。そしてここは 渡瀬清一郎、正確にはお前の部屋だ」

鞍馬山は本棚を見遣る。

そこに視線が集中する。

資格取得マニュアル、古い歴史小説……。どれも女子高生が持つ本には見えない。

ここは父親の部屋だった。

だが渡瀬も使っていたらしい。

つまり それは どういうことだ？

鞍馬山は続ける。

「カーテンのような薄い布では、人間の目は避けられても、外の世界から入り込んでくる道徳理念や倫理観の攻撃は防ぎきれない。例えそれが、自我が作り上げているただの幻でも だから出来るだけ強固な『壁』のイメージが必要だった。それが金属製の雨戸だ。そうだろう」

倫理？ 道徳？ それに反すること……？

すなわち、これだけ部屋数が多く、空き部屋まである家で、わざわざ二人が同じ部屋で寝る理由。

「三年前というと、恵依子が十三歳になった頃。そして、お前が離婚してから、少し経った頃か」

もはやこの場にいる全員が、本能的な嫌悪感と共に悟り、そして

戦慄していた。

「毎晩のように」

気持ちは悪い。

もう聞きたくなかった。

鞍馬山は容赦なく続けた。

「毎晩のように、お前は娘に女を求めた。そして恵似子は自分を殺

し、それに応じていた」

皆が清一郎を見ていた。

「わ、私は」

清一郎は頭を抱え、

よろけ

ベッドに腰を乗せた。

ベッドはきしみ、

『ぎしり』と鳴った。

根岸花織は後ずさった。

「そんな……清一郎さん、あなたは」

「ち、違うんだ、私は、……私は……」

呻く清一郎は、顔を上げようとしなかった。

「恵依子にとってはそれが、当然だが精神的苦痛だった。だから神崎をこの場所へ呼び、何かを変えようとしたんだ。日時に特別な意味があったわけではなく、『限界が来たのがあの日』だったんだ。

とにかく状況を、この空間を壊したかったんだろう。そこに明確な理屈は働いていない。ただ、どんな形であれ、狂った日常にヒビを入れたかっただけだ」

鞍馬山は部屋を見回した。

「……だがそれは最悪な形で裏目に出た。潜在していた『男への嫌悪感』が恵依子突き動かし、神崎は死んでしまった。結果、どうなったか。これが最も重要だ」

「どうなったか……？」

神崎が死んで、渡瀬は

「それにはやはり、この父親が関わっている」

鞍馬山は、ベッドに座った清一郎を見下ろす。

「あの夜、こいつは確かに恵依子を駅まで迎えに行った。だが改札から出てきたのは娘だけではなく、どうやら交際しているらしい男

も一緒だった。それでこいつは」

「……」俺は呟く。「後をつけた　のか？」

「そうだ。こいつはそういうことしかできない人間なんだ。そして娘が男を突き飛ばし、死なせてしまったところを見た。いや二人はそこで出会ったはずだ。親娘は接触している」

森田が口を挟む。

「では、この男が彼女をそそのかし、二人で事実を隠していたという……ことですか」

違う。

それじゃあ、あの言葉の説明がつかない。

鞍馬山が森田から聞き、俺に教えた言葉である。

渡瀬はこう言っていたのだ。

『父親と帰った』。

『神崎は家までついてきた』。

『二人だけで帰った』。

『一緒に帰ったのは神崎だけ』。

全てが矛盾している言葉たち　これらの答えは？

鞍馬山は言う。

「自分を愛してくれた少年を、男への嫌悪感から反射的に突き飛ばし、あろう事か彼は死んでしまった。……恵依子は混乱した。既に極限まで追いつめられている精神に、決定的なダメージが加えられた。罪の意識と絶望、目の前にある死体。恐怖、父親への嫌悪感、抑圧されていた潜在的な怒り、自覚していなかった『父親への殺意』、『恋人に生き返って欲しいと思う純粹すぎる願い』　鼓膜を突き破るような雨音が全てを壊し、かき乱す。暗闇と大雨で視界は悪く、横たわる死体の顔もはっきりとは見えない。混乱が混乱を生み、爆発し混ざり合った全ての欲求そして願望は、　最も都合の良い形をもつて……少女の中で、真実になった」

それが　この事件の核心　。

森田は首を横に振る。



「馬鹿な、まさか」

「……そうか」

俺は車の中で鞍馬山に言われた事を思い出した。渡瀬が生んだ神崎の亡霊は、生まれると同時に、別の人間に取り憑いて、生き続けた。そういうことだったのか。

「恵依子は自らの意識の中で、『神崎』と『父親』とを完全に入れ替えた。つまり、自分は父親を殺した。そして神崎と家に帰る。

そう思いこんだんだ。その時点で、恵依子にとって、そこにいる渡瀬清一郎は……恋人の神崎となった」

「そんな」

森田は声をあげる。

「そんなことがあり得るのですか？」

森田だけではない。俺も紐解かれた事実には呆然としていた。

正常じゃない。意識の中で人と人を入れ替えて、完全にそう思いこむ。そんなことはとても信じられない。

だが俺たちの周りに展開された数々の事実は、その答えを手に入れたことで、ひとすじの糸として形を持ってゆく。

「恵依子は自らの記憶を都合良く改竄した。現実逃避から生まれた自己暗示……矛盾した言葉の答えもそこにある。まず、恵依子にとって、駅から自分と歩いてきた人物は神崎ではなく、父親になった」

父親と帰った。

「しかしその途中、恵依子はその父親を殺した。だから」

二人だけで帰った。

一緒に帰ったのは神崎だけ。

「そして二人は、何事もなかったかのようにその場を立ち去る。一緒に帰ったのは父親ではなく、神崎だった。二人は帰宅する」

神崎は家までついてきた。

あのひとを、ころしたの。

あれは……父親のことだったのか。

俺はよろけて、壁にもたれた。

鞍馬山の声は無感情に続く。

「そして渡瀬清一郎 お前は娘がそう思いこんでいるのを良いことに、今度は神崎になりきって娘と夜を共にしていたんだ。その時お前は、やつと本当に満たされたのだろう」

清一郎は答えなかった。

俺たちもただ放心していた。

「顔や声、知識、口調、それらの相違は全て、狂気の中にいる恵依子の意識内で修正され、恵依子はそれを飲み込んでいた。本人が本人を騙しているんだから、どんどん都合の良い世界が出来上がってゆく。全てはこいつにとっても都合良く動いていた。だが目前に迫っていたものがある。根岸花織との再婚だ。この再婚と恵依子との交わりは、他人から見ればジレンマの固まりだが、こいつにとつてはどちらも捨てがたいものだった。いや……」

瞬きする。  
それから、その矛盾を説明するのは無意味だと思ったのか、鞍馬山は話を戻した。

「……ともかく、そうでなくてもいつか恵依子は我に返るだろうし、そうなればどうなるか分からない。だから死なせることにした。簡単なものだ」

清一郎を目で指す。

「こいつは人殺しだが、法的には殺人犯ではない。つまり包丁を刺したのはこいつではない。現実には刺したのは、恵依子自身だ」

「渡瀬が？」

「恵似子自身の手で命を断たせる方法は簡単だ。刃物か何か道具を

渡して、恵似子の極めて不確かな自己暗示を解く。ただ本当のことを教えればいい。だがそれは危険な行為でもある。小さな可能性だが、もしかしたら途端に復讐されるかもしれない。だからこいつは間接的で安全な方法をとることにした。部屋に刃物を置いて、恵依子がそこに入るのを確認してから、ドアを椅子か何かで固定する。それから内線電話を使い、恵依子に真実を教えるんだ。刃物が目の前にあれば……罪の意識と絶望から、恵依子は間違いなく自らの命を絶つ。それは恵依子を育て、その性格を誰よりも理解していたこいつだけに可能な判断だった。計画はそれなりに良く出来ていた」

鞍馬山は机の上にある電話の子機を見ていた。

「しかしそこでイレギュラーが発生する。私たちが家に来てしまったんだ。すでに刃物はセットした後で、もう、取り返しはつかないだから恵依子がここに来ようとしたとき、こいつは慌てた。私たちが一緒にいたら電話がかけられないからな」

あの時に見せた表情の意味は、そういうことだったのか。

「だが恵依子は、包丁を見てパニックを起こした。当然といえば当然だ。作り上げた仮想世界が悪意に触れて揺らぎ、揺らぎは歪みとなり、そして本来ならば有るまじき、世界の外側が破砕した。悪意は実にシンプルなものだった。即ち『死ぬ』。至極明瞭な、刃物という形を持って恵似子の前にそれはあった。恵似子は溢れ出したおびただしい感情と共に悲鳴を放った」

それが、あのときの悲鳴。

「それはこいつにとっては好機といえた。私たちが階段を上ったり、二階を探したりして時間を食っている間に、こいつは恵依子の部屋に内線電話をかけた。真実を伝えたのはその時だ。恵依子は甘い幻から完全に解き放たれてしまった」

その時、俺の眼前に、見たこともないはずの光景が、鮮烈に……  
そしてゆっくりと、再生された。

包丁を自らの手に取り、その揺れ動く切っ先を見つめる渡瀬。罪悪感、怒り、絶望、それらが止めどない涙に変わる。せき止められていた感情が一度に流れ出す。ドアに寄りかかり、渡瀬は狂気の叫びを上げる。

「父親は憎い。しかし、恵依子が抱く精神的苦痛は いや、そんな言葉で形容しきれるものではないが……ともかくその感情は強すぎて、恵依子はもう耐えきれなかった。一秒でも早く消えてしまいたかった。だがそれでは、父親はどうなるか。何もかも忘れ、新しい妻と幸福を手に入れる。そんなことが許されるはずはない」

何もかも忘れて幸せに生きるなんて、許さない。絶対に。呪いの言葉を吐きながら、渡瀬は、自らのやわらかな腹部に深々と包丁を突き刺す。

「だから刺したのは腹部なんだ。不自然な死であることを、ほんの少しでも、生きた人間に主張することが、恵依子に出来る唯一の抵抗だった」

「……。それが、抵抗……？」  
なんて、なんて儚い抵抗なんだろう。

「私たちはその直後に扉を開け、死体を見た」  
床をちらりと見て、

「事件はそれで終了する」  
鞍馬山はそう締めくくった。

終わった。

全ては繋がり、空白は埋まった。

根岸花織は絶句し、茫然と、夫になるはずだった男を見つめている。

鞍馬山は、まだベッドに座ってうなだれている渡瀬清一郎に言う。

「どうだ 何か一つでも間違っているか？」

「私は……私は」

渡瀬清一郎は不気味に呟きながらも微動だにしない。

「私が……悪いのか……？」

ほんの数秒沈黙した後、鞍馬山は問いかける。

「どうして 殺せた？ 教えてくれ。罪は感じないのか？」

人を死なせて、幸せを手に入れる事なんて、出来るはずもないのに、一体何を望んでいるんだ……？」

横顔を見ながら、俺は、それが清一郎に対する問いではないらしいということに気付く。

鞍馬山の視線は空をとらえている。

本当は 誰に。

鞍馬山は、今度は真っ直ぐ渡瀬清一郎を見た。

「そんなことは決して許されないんだ。それに隠せない。必ず何かを失う。もう無理だ」

「……るさ、い」

清一郎は突然その顔を上げる。

「うるさい！ うるさい、うるさい、うるさいっ！」

丸く見開き、血走った目。逆上している。

口元から唾が飛び散る。

「お、お前なんかは何が分かる？ お前なんかにッ！」

立ち上がりながら、鞍馬山の首に手をかける。

絞め殺すつもりだ。

「……や……」

鞍馬山はなぜか、怯えたように動かなかった。

「やめて……」

苦しい。息が出来ない。血走った目がそこにある。殺される。あの時と同じように……あの時？  
それはいつだったっけ。

3

「どんなに辛かったか分かるか！ 俺はあいつを愛していた！ なのに、あいつは、あんな、くだらないクズ男なんかと……どうしてだ？ 最初は、あんなに俺のことを愛してるって、あんなに言うってたのに！」  
力任せに締め付ける。

4

麻痺する。

熱い。

頭が、起きてしまう。眼が熱い。

まただ、また、……どうして、こんな、

「やめて」

5

「やめて……お父、さ……やめ……」

鞍馬山は両手で首を絞められ、苦しそうに呻く。

「殺……さない……で……」

「おい、やめろ！」

止めようとする俺を森田が制止する。

「待ちなさい」

「なんでだよ、鞍馬山が殺されちまつ！」

「危険だ」

「え？」

見ると森田の顔は強張っていた。

それだけではない。ぶるぶると震えている。

何かが起ころうとしている。

みるみるうちに、鞍馬山の瞳が、猫のそれのように縮まった。

「やめ……お父……」

同時に黒目全体が透明な赤に染まってゆく。

赤い猫の目　ネクストの　まさか。

森田は呟く。

「万が一と思っていたが……」

6

ごめんなさい。もうしません。いい子にします。

だからお母さんと私を殺さないで。

殺したら　殺したら、私は狂ってしまう。狂ったら

私

あ

あ、ここはどこだろう。

血の臭い、殺意、獣のような声、ここは

7

手を放し、ひっ、と清一郎は後退する。

「な、何だその眼、お前は？」

「……私……は……」

目が光る。赤く、暗く、歪みながら。

清一郎は、

「ばっ、化け物」

叫んだ。

「あ、た、たすけてくれ！　化け物だ！」

その瞬間、俺の目の前で、鞍馬山の中にある何かが切れたのが分

かった。

「違……嫌あ……あああああああああ！」

8

ここは

ここは、暗い車庫の中だった。

9

鞍馬山は頭を抱え、天井に向かって絶叫した。  
聞いたこともないような咆哮だった。

悲鳴にも聞こえた。

そして、頭を掻きながらもがくように動き、辺りの物に手を叩き付ける。

凄まじい打撃音と共に、壁や机が窪み、碎ける。

夢のような光景だ。

力が あまりにも強すぎる。

「まずい……！」

森田の手が背広の内ポケットに入る。

鞍馬山は動作も確認できないほど速く振り返り、森田の胸を、右手ごと拳で叩く。とんでもない音がした。

「が」

森田は口から血の霧を吹いた。

手と肋骨を潰されたのだろうか。ごとりと拳銃が落ち、鞍馬山が振り下ろした踵でそれを踏みつぶす。拳銃は床にめり込んだ。

「はあ……あ……」

鞍馬山は、また頭を抱えて仰け反った。

苦しんでいるのか、怒っているのか分からない。



赤い眼がきらきらと光っている。

根岸花織が近寄ろうとする。

「どうしたの、しっかりして！」

「よしんだ！」

倒れている森田が止める。

そして無事な方の胸から無線機を取り出し、荒い息で下に指示を送る。

「全班、行動開始……建物の周囲に展開せよ」

「た、たすけてくれ！」

四つんばいで逃げようとする清一郎。

それを睨み付け、鞍馬山は、テーブルの上にぶちまけられた物の一つを取り、逆手に握った。

長さ二十センチほどの、西洋の剣をかたどったペーパーナイフだった。

「……にしているのに」

何か言っている。

「私はいつも、いい子にしているのに……」

「たすけてくれ、誰か　化け物だ、殺される、たすけて、こ、殺されるっ！」

「うあ……んっ」

鞍馬山の顔が歪む。

「あああっ！」

左手を窓枠に叩き付ける。

大きな窓はその枠ごと歪んで外れ、外へ吹っ飛んで落ちた。下でごしゃりと音がする。

夜の空が見えていた。

「私……私……は」

夜空をバツクに、震えながらペーパーナイフを振りかざす。  
いけない。

「よせ、鞍馬山！」

俺は反射的に飛び出していた。

鞍馬山の細い身体に組み付き、そのまま 足が壁にぶつかり  
視界は反転した。

『窓から転落した』のだと認識できたのは、重力が無くなってから  
だった。

俺たちは宙に浮いていた。

鞍馬山が空中で俺を突き飛ばし、どこかへ消える。

次の瞬間、凄まじい勢いで、背中から叩き付けられた。

二階の出窓か何か ベランダの どこか一部、か？  
痛みと勢いで認識できない。

俺の身体は弾み、再び落ちる。

途中、またどこかに足がぶつかった。

そして二度目の衝撃。また背中だ。何か潰れる音がした。  
「っ！」

息が止まった。

ずんと頭の中が揺れた気がする。

「……はあっ……あ」

背中も腹も痛い。内蔵が口から出そうだ。

だが夜空が見えるから、どうやら生きているらしいということはある。  
かる。

俺が落ちたのは黒い車……多分、窓の下に配置された覆面パトカー  
の上だった。車が潰れてクッションになってくれたようだ。

とはいえ、俺が体重の軽いチビでなかったら 死んでいたかもしれない。

呼吸を整え、俺はひしゃげた車の上で体を起こす。

ガラス片だらけだ。さっき落ちた窓ガラスと、車のガラス……俺の  
手や足にも、小さい欠片がいくつか刺さっている。

痛覚が麻痺しているうちに、それらをつまんで抜き、捨てた。破れ

た皮膚から血が出ていた。

車内には誰もいないようだ。

ふらふらとアスファルトに降り立つ。

多分どこも骨折はしていないと思うが、左の手首をひどく打ち付けていて、そこは少なくとも、捻挫にはなっている。なにせ感覚が無い。

三階から落ちたのだ、これで済んだのは幸運と言えるだろう。

鞍馬山は

「……どこだ……？」

銀色のペーパーナイフを持って、道の真ん中に立っていた。

向こうからライトに照らされ、シルエットしか見えない。

「鞍馬山……」

「脚を狙え！ 動きを止める！」

男の鋭い声と共に、火薬の破裂する音が立て続けに木霊した。

鞍馬山は地面を蹴る。数メートルの跳躍。瞬時に姿は消えた。

俺はとっさに顔を守った。

俺の傍らにある潰れた車のドアが、バカン、ベコン、と鳴る。流れ

弾が当たっている。

何かが激しく繰り返り広げられているのだ。

弾は 幸い、俺には当たらない。

ライトが眩しく、しかも腕で顔を守っているからほとんど何も見えないが、なおも銃声は続き、それに混じってあちこちで悲鳴が上がる。

男たちの悲鳴だ 動き回る複数の影と、地面を滑り、闇の中を跳

ね回り、それらを薙ぎ倒す影。

すぐに何も聞こえなくなった。

射撃していた者たちを全員打ち倒し、鞍馬山は、今度はゆっくりと、こちらへ歩いてきた。

彼らは死んだのだろうか。

俺も……殺されるのか。

近づいてくる。どうすればいい？

縛り付けられるような緊張で、体中から冷たい汗が流れ出る。

鞍馬山は俺の数歩手前で立ち止まった。

俺は唾を飲み込んだ。

……何を言おう。

下手に刺激すれば一巻の終わりだ。だが、何もしなければ逃れられない。

どうすればいいのか？

曖昧模糊とした意識の中で、ただ一つはつきりと形を持っているのは、目の前に迫った死に対する恐怖だった。

怖い。

死ぬのが怖い。動くのが怖い。……鞍馬山が怖い。

座り込んでしまいたい。

俺は赤い眼を見つめて、そこにある死の重圧に怯える。

鞍馬山も俺の目を見据えている。

夜が止まっていた。

しかし、

沈黙はそう長く続かなかった。

「あ  
」

10

やっぱり同じだ。

彼も同じ目で自分を見る。結局同じなのだ。

……それでも。

11

不意に鞍馬山は、何かを感じ取ったように声を上げ、顔を歪ませる。そして目をそらし、苦しそうに両手で髪を掻きむしった。

「……………うして……………あなた、まで……………」

震える声。

「なぜ」

突然、かつ、と目を見開いて、何かを爆発させるように、物凄い早口で吠える。

「なぜ……………どうしてなの！ 私が私だから？」

うめきとも咆哮とも違う、別人の、

いや、まるで

「分かっているのよ、産まれたときから知ってたわ。何かが違うってことくらい！」

子供のような声だった。

赤い猫の目に涙が溢れている。

「一生懸命いい子にしたのよ。そうすれば嫌われない。褒めてもらえる。かわいがってもらえる、って、そう思ったから！」

しゃくり上げ、髪を振り乱して首を横に振る。

「あの時だって、私はちゃんと隠蔽を手伝うつもりだった！ だって、お父さんは私のことを好きだって、愛してくれているって思ったから……………でも本当は違った！ お父さんは心の中では、私のことなんかずつと嫌いだったの！ 大嫌いだったの！ 気持ち悪いと思ってたの！ 優しくしてくれたのも、頭をなでてくれた手もみんな嘘だった！ だから、だから今度は……………自分ごと造り替えてしまおうと……………ちゃんと、好きになってもらえるように……………」

「……………だけどそれも無駄……………。どう足掻いたって過去も自分も変わらない。あなたも結局、本当のことを知って私を嫌いになってしまったわ」

「鞍馬山」

「やめて、言わなくても分かる！ だって私、あなたなんかよりずっと頭が良いんだもの。今みたいに体の中が燃えているときは特に調子がいいの……。ほら、あなたの全身から本当の気持ち滲み出ているわよ。今あなたがどう思っているか当ててあげましようか？

化け物、こんな奴人間じゃない、殺される、来ないでくれ、  
気味が悪い、傍にいただけで気分が悪い、触るな、こっちを見るな、  
消えろ、早くどこかへ行ってくれ！」

悲痛な声でまくし立て、はあはあと獣のように呼吸する。

「……………当たり前でしょ……………？」

まるで、言葉で自分を切り裂こうとしているようだった。

涙がまるで血のように見える。  
だから。

腕を下ろし、茫然と俺は立っていた。

緊張が嘘のように解けてゆく。

今 やっと分かった気がした。

鞍馬山はナイフを持った拳で涙を拭う。

「こうなることなんか最初から分かりきってた。叶わない夢を見るからいつも胸が苦しくなる……。本当は私なんて産まれてこなければ良かったのに、死のうとすると僅かな望みが邪魔をする！」

鞍馬山は目を剥き、嘎れた声で絶叫した。

「どうせ逃げてゆく幸せなら、最初から私の前に現れるな！」

その白い手がナイフを振りかざしても、俺は逃げずに立っていた。

もう全て分かっていたからだ。怖がる意味など無い。六年前 そして今も、みんなが間違っていた。

「逃げねえぞ……………お前なんか別に怖かねえんだよ」

そうだ、怖くない。何を怖がっていたんだ。考えてみれば、ずいぶん滑稽な話じゃないか。

「他がどうだろうと俺は違うんだよ。そうだろ？ くだらねえ。…

…俺は違う……………俺は違う、俺は違う、俺は違う、俺は全っ然、違う

「からよオ！」

鞍馬山が地面を蹴って飛び込んでくる。  
風のように。

両腕を広げた。

「来いよ、このバカ女！」

俺は笑っていた。

1 2

もう一度……

……もう一度、優しい手で触れてほしくて。

1 3

ナイフは振り下ろされた。

左肩に、どすりと火のような痛みがはしった。

全身に伝わり、響く。

思わず顔が歪んだ。

熱い血が溢れてシャツを濡らす。

だが

俺の肩に刺さった刃は、そこで止まっていた。

景色の全てが静止していた。

次の瞬間、鞍馬山は我に返ったようにびくりと震え、息をのんだ。  
そしていつもと同じ表情を持った、赤い瞳で俺を見る。

「……礼……司」

「おう」

ペーパーナイフを握った手に、俺はそつと、自分の右手を乗せた。

「落ち着いたか？」

「礼司あたし あ、あたし」

「こんなん気にすんなって」

ペーパーナイフは、数センチ刺さったところで止まっていた。

俺はその刃を持って引き抜く。

激痛が走り、ぱっと血が散ったが、一瞬だった。

「俺は大丈夫だからよ……。気に す……な……って、おお？」

終わったと思つた途端に、俺の意識は急激に遠のいた。

脳から血が抜けてゆくようだ。

全身が痛く、車に酔つたような気分だ。三階から落ちた衝撃が今頃来たのか。

膝が勝手に曲がり、俺は前のめりに倒れた。麻痺していたが、脚も本当はだめになっていたらしい。

「礼司 ? 礼司！」

眠る前に見えた鞍馬山の瞳は黒く、俺を抱き上げようとする腕は温かかった。

俺を呼ぶ声は、だんだん遠ざかっていった。

14

狗子は夢中で、胸に抱いた少年の名を呼んだ。

「礼司、礼司……しっかりしてくれよ」

殿山礼司は目を開けない。

「起きろ……死んじゃ嫌だ、……礼司……」  
ぎゅっと抱きしめる。

その時、靴下のまま玄関から出てきて歩み寄り、静かに二人の横に立った者がいた。

根岸花織だった。

彼女は膝をつき、しばらく少年の手首の脈などを診ていたが、すぐに立ち上がって優しく微笑んだ。



「大丈夫、ひどい怪我をして気を失ってるけど、死んじゃうような心配は無いわ」

「本当　？」

狗子は顔を上げる。

その頬を濡らす涙をハンカチで拭ってやりながら、根岸花織りは自慢げに言う。

「本当ですとも。私はこれでも、大きな病院の婦長をやってるのよ。嘘は言いません」

「あ　でも　あたし」

「あらあら、そんな顔したらいけないわ」

またうつむいてしまった狗子の頭に手を乗せる。

「何が起きたのかは、ちょっと、っていうより全然分からないけれど　あなた今、見ているこっちが泣きなくなっちゃうような顔してるわ」

「……………だって、取り返しのつかないこと……………あたし、したんだ。今も……………だから」

「何があつたか知らないけど、私の目には、あなたはもう十分苦しんだように見えるわよ？」

「苦しんだ……………」

見上げる。

「あたしが……………」

花織は

「まあ　」

と眉をひそめた。

「自分でも気付かないくらい、ずっと、自分を責め続けていたのね」

狗子の頭を、優しく撫でる。

「あなた　さっきだって上で、あんなに泣いてたじゃない。大声出して、もがいて……………何も知らないくせに無責任なことを言うようだけど、絶対に取り返しのつかないことをしてしまったなら、も

う、いくら苦しんだって変わらないでしょう？ 開き直るのも一つの方法よ」

「根岸……さん……」

狗子はきつく目を閉じた。

ぼろぼろと零れた涙が、礼司の頬に落ちた。

「ありがとうございます……。嬉しい、……です」

「どういたしまして」と花織は微笑む。

根岸花織は何も知らない。

だから、こんな優しい言葉をかけてくれる。狗子はそれを知っている。

だから今の会話に意味など無いのかも知れない。

それでも狗子は純粹に、嬉しかった。

ときどき目の前をよぎっては、狗子を繋ぎとめる僅かな真実が、またひとつ。

こうして狗子は生きていた。

それから十数分が過ぎて、狗子に攻撃された男たちが全員、防弾スーツにたすけられて無事に生きていることを花織が確認した頃。

一台の黄色い車が到着した。

運転席から出てきたのは黒場勝美であった。

「……これは……」

勝美はその光景に絶句する。

気を失い、道路に並べられた、大勢の男。

見事に壊れた車。

アスファルトの上に砕け散った窓。

散乱したガラス片。

家々の窓から、何事があったのかと道路を見下ろす人たち。

玄関から出て、遠巻きに見ている者もいる。

そして口から血を流して扉に寄りかかっている森田。

殿山礼司は気を失い、狗子に抱かれている。

「狗子？」

呼ぶと狗子は勝美の方を向いた。

「……あれ。……来るなって言ったはずじゃあ……」

「何言ってるの、心配して来たのに！ ああ もつ、ええと」

勝美は混乱していた。

車のボンネットに手をつき、うつむいて考え込む。

そこに花織が歩み寄る。

「あなた 勝美さん、ですか？」

「はい？」

我に返って振り向く。

根岸花織は、遠慮がちに言った。

「あの、さつき……狗子ちゃんに、大体の話は伺いました。小さな頃から色々あったそうで」

「はあ」

間抜けな返事をしながら、勝美は驚いていた。

狗子が、自分の過去を、自ら他人に話したというのか？

根岸花織は続けた。

「それで、ですね、あの……狗子ちゃんを、怒らないであげてください。話を聞いていて気付いたんですが、この子、とても自分を責める癖があるようなので」

「そう、ですか……」

勝美は頭をかく。さつきは血の気が引いたが、どうやら六年前のような惨事にはならなかったらしい、と分かった。

「ええと、ところで」

花織の目を見る。

「どちら様ですか？」

「あら、嫌だ」

花織は照れ笑いを浮かべた。

「ごめんなさい、名乗りもせずに。私は根岸花織と申します。ちょ

つと縁があつてここに居合わせましたの」

「はあ……そうなんですか」

勝美は口を開けて、納得とも独り言ともつかぬような調子で返事を返す。

花織はもう一度「ええ、そうなんですの」と言つて肯く。

二人はお互い、相手に対して同じ感想を抱いていた。

何だかとぼけた人ねえ、と。

森田がこちらに歩いてくる。

「さつき救護班を呼びました。もうすぐ到着すると思いますが、どうします、彼」

左手であばらを押さえ、あごで殿山礼司を指す。

狗子は地面に座り込み、胸に礼司の上半身を抱いたまま、首をこつくりと縦に動かす。

勝美が代わりに答えた。

「結構よ、と言いたいところだけど、お願いするわ。しっかり頼むわよ」

「分かりました。責任を持つてお預かりします」

「あんたもすごい怪我ね」

「ええ。もう今日は疲れました……いてて」

本当は、いてて、どこの傷ではないのだろう。右手をだらりと下げ、口の周りには血がべつとりと付いている。

「諦めるわけではないですがね、今回はちょっと、リスクが大きすぎたようです」

「懲りないわね……。その怪我、狗子にやられたんでしょ？」

「ネクストに　ですよ。右手とあばらを叩き折られました。痛いんです。治療費を払ってもらいたいくらいです」

「そのくらの金、落ちないの？」

「いや、落ちますが、もとは国民が出した税ですからね、出来ることなら出費は小さく……あいたた」

「変なところで真面目なのねえ」

勝美は肩をすくめた。

同時に　渡瀬家の玄関が内側からゆっくりと開いた。  
皆、無言で注目する。

玄関から顔を出したのは渡瀬清一郎だった。

こちらの姿を見ると引つ込もうとしたが、それを根岸花織が呼び止める。

「待つて」

そして自身も玄関の方へ歩いてゆく。

「ここへいらっやって、清一郎さん」

清一郎は、婚約者の優しい顔につられたのか、おそろおそろ歩道まで出てきた。

森田と勝美と狗子は黙って見ていた。

「清一郎さん……」

向かい合う。

花織の笑顔はそこまだった。

くわ、と憤怒の形相を顕わにし、

「馬鹿男、お前が一番」

振るった平手が空を切り

「悪い！」

ずばん。

頬ではなく顎に直撃　少々鈍い音が響いた。

「あなたとはお別れです！」

倒れた清一郎の顔を踵で踏みつけ、根岸花織は、広がる夜空にそう宣言したのだった。



## エピソード

## エピソード

もうどうでもいいことだが、あの事件は、やはり森田たちによって曖昧に誤魔化されたらしい。

渡瀬家に立てこもった強盗を、警官隊が突入して捕まえた、とか何とか。俺は病院にいたからよく分からないけれど、そんなことになったそう。森田がどんな組織にいて、どの程度偉い男なのかは知らないが、そこまで事実がねじ曲がるのだから大したものである。

渡瀬清一郎は、神崎をはねてしまった不運な運転手のために一度

警察に連れて行かれ、色々証言をさせられた後、どこかへ引越したという。消息は知れない。

それと 怪我についてだが、俺の手はレントゲンを撮ったところポッキリと折れていて、その日に手術して針金を入れてもらった。何でも、骨折したのは親指の付け根部分で、そのまま何日か放っておけば先端の方が腱に引つ張られて曲がり、手そのものが変形してしまう、特殊な折れ方だったという。

しかし半月もすれば針金も取れ、治るというから安心した。もう一度肉を切つて針金を引っこ抜かれるのかと思うと、少々憂鬱ではあるが。

一方、肩の傷は思いの外深く、治るのは大分後になってしまった。

鋭利な刃物できれいに切られればまだマシだったが、突き刺さったのが刃先の鈍い、玩具のようなペーパーナイフだったので、かえって傷口が汚くなってしまった。その上、ペーパーナイフの先端が骨までとどいていたらしく、骨には少しひびが入っていた。幸い膿んではないが、正直言つて滅茶苦茶痛いし、左手は思うように動かない。

そして脚はといえば、あろう事か、両方ともいかれていた。右は挫いていて、左は肩と同じく亀裂入りになっているそう。

あの時はよく立てたものだと思つても感心する。

とにかく、それらの怪我のせいで入院が決定した。けつこう長くなるらしい。

ガラスの傷もあるし、全身至る所にある打撲は、日に日にずきずきと痛くなる。どうやら当分包帯と仲良くする日々が続くそうである。

入院費は高くついたが、森田が自腹を切つてくれたので、有り難く使わせてもらった。おかげで個室を悠々と使える身分だ。

だから金に関しては問題なかったけれど、大変だったのは親への言い訳だ。本当のことを言つても信じてもらえないはずはないし、言



う気もない。結局『渡瀬の家にいたら突然凶器を持った強盗が入ってきたから、隙を見て窓から飛び降りた』ことになった。その場にいた理由など、細かいことに関しては有耶無耶にお茶を濁して切り抜けた。隠蔽というのは、なかなかどうして、難しいものだ。

入院三日目、俺はベッドに横たわり　まあほとんどその姿勢しかできないのだが　ぼんやりと窓の外を見ていた。ベッドの上半分は斜めに持ち上がっているから外も見やすい。

天井からはテレビが吊り下げられるような形で備え付けられていて、ベッドの横に固定されたりリモコンを使えば見ることが出来るが、もうとつくに飽きていた。テレビなんて案外つまらないものだ。特に今のような昼間の時間帯には、ろくな放送をしていない。誰が買うんだというような、微妙なデザインのネックレスを宣伝販売する番組とか、キャストで犯人が分かる二時間サスペンスの再放送なんかを見るくらいだったら、まだ、三階からの眺めで暇を潰す方がましだった。

こここの窓からは、中庭と駐車場が見える。

「ん」

俺は、リハビリ中の外科患者や車椅子の老人たちが集まっている中庭に、見慣れた人物の姿を見つけて呟いた。

「……鞍馬山じゃねえか」

個室に何日も入院していると、どうしても思ったことが独り言になりやすい。まあ大半は「いてて」と「腹減った」くらいだけれど。

鞍馬山が見舞いに来るのは初めてだった。

窓を開けて声をかけることも出来ないの、少々趣味が悪いが、ここから鞍馬山の動きを観察してみることにした。

鞍馬山は、左手にケーキが何かの箱を持って、中庭の真ん中を歩いていった。俺のいる病棟はすでに知っているらしく、迷い無くこちらへ近づいてくる。

と、若い看護婦に車椅子を押ししてもらって散歩している、小さな

お婆さんに横から話しかけられて立ち止まった。声はここまで聞こえないが、「お見舞いですか」とでも訊かれたのだろう。こくりと肯いて、何やら答えている。その言葉でお婆さんは笑ったようだった。何を言ったのか分からないけれど、あいつは人を笑わせるのが本当に上手い。

そのまま二人は話し込んでしまったようだ。

「殿山さん」と声をかけられ、俺は窓の外の光景から目を離し、声の方を見る。

開けっ放しのドアの所に、白衣の根岸さんが立っていた。こは根岸さんが勤めている病院だったのである。根岸さんは婦長なので忙しいはずだが、ときどき、小さな用事で俺の所に来てくれる。本人曰く「おサボリ」らしい。

「くん、でいいですよ、殿山君で……。どうしたんすか？」

根岸さんは小さな白い紙袋を手に、こちらへ歩いてくる。

「痛み止めを持ってきたんだけど　ついさっき、狗子ちゃんが受付に来てたわよ。殿山礼司の病室はどこですか、って訊いてたみたい」

「ああ、あいつが来てることなら知ってますよ。この窓から姿が見えますから」

言いながらまた外をしてみる。

鞍馬山はまだお婆さんと喋っているようだ。いや、今は車椅子を押していた看護婦も巻き込み、三人で喋り合っている。

根岸さんも、痛み止めの袋をベッドの横にある棚の上に置き、隣の窓からその光景を見て微笑む。

「あら、ほんと……」

「あいつ、ご老人相手に、何か下ネタでも言ってるんじゃないですかね」

「まさか」

ふふふ、と根岸さんは笑う。

俺も笑った。

鞍馬山が俺のいる304号室に入ってきたのは、最初に姿が見えてから十分ほど過ぎた頃だった。

もう根岸さんとはとくに仕事に戻った後で、病室にいるのは俺一人だった。

鞍馬山は俺の顔を見て、箱を持った右手を軽く持ち上げ、気まずそうに「……………やあ」と言う。

俺も「よう」と応える。「どうだ、臭うだろ、俺。三日も風呂に入ってねえんだ」

鞍馬山は満身創痍の俺をじっと見て、それから、しよげたようにうなだれる。

「大怪我してるもんな」

「おう。誰かさんのせいだな」

「……………ごめん」

「いつからお前はそんなに冗談の分からない女になったんだよ。謝らないで笑え、アホ」

「……………うん」

だめだこりゃ。

俺は大きいため息をついた。

「なあ　冷静に考えてみるよ。お前に体当たりして三階から勝手に落ちたのは俺だぞ。お前、ちょっと反省しすぎだろ」

「でも元はあたしのせいだし、肩を刺したのも……………」

「ああ、ありゃ正直痛かったぞ。今でも痛い」

「……………ごめん……………」

「でも、そうだな」俺は鞍馬山の持っている箱をちらりと見る。「

……………そのケーキ食わせてくれるんなら、あのレッドカードもの一撃は無かったことにしてやってもいいぞ」

「……………これ？」

「おう」俺は肯く。

鞍馬山は、痛み止めが置かれている横に箱を置き、いそいそとそ

れを開ける。

「あの、これ、ケーキじゃないんだ。似たようなもんだけど」  
中身の一つを取り出す。大きめのカップに入ったプリンの上に、生クリームや色々な果物が乗っている洋菓子だった。

「プリンアラモード。……一個千五百円の」

「マジかよ」

「いや……嘘だけど……」

「嘘かよ」

「うん、本当は三百円くらい。でも美味しいんだ、ここの」

「ふうん」

確かに美味そうだ。特に、てっぺんのチェリーと周りのメロンが俺の食欲を刺激する。

俺は「オーケー」と肯いた。

「じゃあ食わせてくれ」

「うん」

鞍馬山はカップのフタを開けて、俺の膝の上にある折りたたみテーブルに乗せ、添え付けのプラスチック製スプーンを、「はい」と俺に差し出す。

俺はそれを受け取らなかった。動く方の腕も、敢えてベッドの上に寝かせたままだ。

鞍馬山は首をかしげる。

「……やっぱりいらなくなっただ？」

「分かってねえな」

「え？」

「怪我人の俺が『食わせてくれ』って言ってるんだぞ」

「？……あ」

鞍馬山はやっとこちらの馬鹿馬鹿しい要求を察したようだった。そして、ようやく、少し笑う。

「分かったよ」

カップを手に取り、プリンアラモードの端の方をスプーンで少しす

くっつて、俺の顔の前に持つてくる。

「はい あーんして」

「あー……」

俺は鳥の雛みたいに大きく口を開けて、それをぱくりと食べた。なめらかな生クリームの甘さが口の中に広がる。なるほど、確かに美味しい。

「ん。けっこうウマイな」

「だろ？」

鞍馬山は安心したように微笑み

なぜか、カップとスプーンを持ったまま、いきなりその場へへたり込んだ。

俺は驚いた。

「おい、どうした？」

腹筋に力を入れて上半身を起こし、ベッドの脇をのぞき込む。

「……うん……」

うずくまっている鞍馬山からは涙声が返ってきた。

「いや、良かったなあ、と思って……」

「は？」

うつむいているから顔は見えないが、鞍馬山は肩をふるわせて、くっくつと泣きながら笑っていた。

「だってさあ……もう、全部、終わりになると思ったからさあ……」

「泣き虫な上にバカだなお前。俺はそんな簡単に死なないぞ」

「んん……そうじゃなくて……いや、それもあるんだけどね」

鞍馬山は、ずつ、と鼻水をすすする。

「……ま、いいか……」

スプーンを持つている右手の甲で、濡れた両目をこしこしとこすり、立ち上がる。

「悪い悪い、プリンまだ一口しか食べてなかったね」

「ん、おう、そうだな。早く食わせろ」

「はい……口開けて」  
そしてまた、「あーん」とやる。  
何をやってるんだ俺たちは、という感じである。

プリンの上に乗っていた薄切りのメロンをゆっくりと噛んで飲み込みながら、俺は思う。……うまい、と。  
それでいいんじゃないかと思う。  
このプリンアラモードの細かい材料や作り方なんて、俺の知った事じゃない。でも美味しい。

鞍馬山がどんな奴なのか。何を考えて生きてるのか。 実際、そんなことが完璧に分かるはずがない。そりゃそうだ、難しすぎる。でも取り敢えず、こいつは心の優しい奴だと感じるし、だから俺はこいつのことが好きだ。

ややこしく考えるのは疲れた。罪とか真実とか暗いことも、もううんざりだ。  
だから、それでいいんじゃないかと思うのだ。

不意に鞍馬山が手を止める。

「あ……」

「どうした？」

「いや ごめん礼司、口の周りにクリーム付けちゃった」

「ええ？」

そういえば上下の唇に何かが付いている感覚がある。

「ったく 食わせ方が大雑把なんだよ」

「礼司がすっかり口開けないから付くんだろ。あ、今取るから動かないで……」

そう言っつて鞍馬山は、指先でクリームを拭おうと、俺の口に手をのばす。

、……が、その前に止まった。

しなやかな手は迷うように少し宙を泳いでから、結局、俺の頬に、

すつと添えられた。

俺は瞬きした。

気付いたときには、目を閉じた鞍馬山の顔が眼前に迫っていて、俺の唇は生温い舌先でぺろりと舐められていた。

どくん、と胸が鳴った。

濡れた優しい感触は、念を入れるように、数度、俺の唇の上を這ってから、すつと離れた。

鞍馬山は一度目を開け、俺の顔を間近で見つめる。

俺は何も言わず、鞍馬山も無言だった。

そして 俺たちは、今度は本当に、唇を重ね合った。

品のいいクリームの味と、かすかな煙草の香りがした。

廊下の方から、稲森と、他にも数人のクラスメートたちの話し声が聞こえる。あいつらも学校をサボって自主的に見舞い……いや見物に来てくれたのか。

にぎやかな声は足音と共に近づいてくる。もうすぐこの病室にどやどやと入ってくるだろう。

だから その前に。優しい口づけが終わってしまう前に……。

この物語を、終わろうと思う。

了





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5592e/>

---

探偵生命体ネクスト

2010年10月10日22時23分発行